断片　二〇一八

u_

（風を待ってる…）

　風を待ってるのかな、水に潜って呼ぶのなら。嘘は嘘を吐く、その吐かれた嘘に、どの嘘も吐かれて嘘なんだけど、そうして嘘に吐かれて嘘塗れの何処までも、の何処までもから嘘なんだけど、どの嘘も、なんで嘘が嘘か知れなくて、そうしてその何の嘘も嘘でないみたいに嘘のように嘘か知れてそうで。尤も知れてたって嘘に決まってんじゃ、何が知れても知れるばかりの嘘尽くめで、何が嘘かその嘘が嘘みたいに知れなくなるか、嘘でも知れない何かが嘘がなんで嘘かを知ってるようでも、そんなの何にもならないかで。そんなだから、嘘を吐きたくて吐きたくて堪らないのは、どうにもそうなんだけど、そんなだから、吐かれた嘘は嘘みたいに、何だか知れなくなってしまうのがやっぱりまるでどうにも嘘とかで、それで、その、とかで、を、おろおろと追っ掛けなきゃ居られないみたいに、ゾクゾクと嬉しくも悲しくもないのが堪らないのが堪らなくて、そんな堪らないのを、嘘ごと見失いたくて、そんなの何時でも見失えそうでも、それって何処までも何だか知れなくなってしまいそうに嘘みたいで、っ

て嘘の尾っぽさえ見失ったかに行き泥んでるなら、まぁそんなもんかな、明るみを剥かれて風は溶けて凍って削れ果て。それともさも嘘が嘘を吐くようで嘘なだけで嘘なら、どの嘘も嘘でも嘘なんかじゃなく、凝っと嘘かの風でも待つしかないみたいな何でもなく、他の何とも変わらずに。の何が他なのか、そんなもの、嘘でも吐かなきゃ見付からないぞ、って言いたいけど、嘘だねって言い返されそうで、言い返されたら、嘘はまたその嘘が嘘な嘘を吐くに戻ろうとするに決まってて、なら黙ってて遣るさ、って、その黙るのが嘘かも知れないし、って事でしかないのも態とのようにゾクゾクと。でも違うかも知れない、だって嘘も黙るもゾクゾクも、どうにだって違う何かを映すか透かすかして、違う何かに変わるなんて、きっとずっと誰かには見慣れてた事で。見慣れてた？嘘も黙るも、じゃどんな姿を見せたのかなゾクゾクと。見せる訳ないよ、だから嘘が嘘でも吐かなきゃ嘘も嘘で居られないような、嘘でもない何かさえ裏へ回れば嘘、みたいな、の何が裏かも知れない儘に嘘だろうけど。なんて話しになるのは、裏も表もなしに、嘘からしか始まらないから、って、そう思いたくて思いたくて、そう思えないんなら何も思えないんだって思えて仕舞うのが、どうにも堪らないから。だって嘘でさえないかも知れない嘘でも、何処かから回して来なきゃ、それらしい何かなんて見付からないよね。ん？見付かるさ、見付けたんでそんな言い草を、涎垂らすまでむしゃくしゃ噛み砕いてんだろ。

ふん、そんな草だの涎こそ、丸きり嘘じゃないか間違いなく、間違いなく嘘なのも嘘で。って、にしても、だから、嘘で構わないんだけど、嘘で構わないので、他の何もが違う何かで有る儘ならきっと、そこに昇る陽の姿も嘘で構わなくて、そうしてそれは、嘘の始まりみたいに。昇る陽だなんて？そんなの嘘にもならないよな、陽は昇りも沈みもしなくて陽で、嘘だろうとなかろうと。だって陽は昇る為にでも沈む為にでも陽じゃないからね、これだけは嘘じゃなく。その嘘じゃないのが嘘かどうかなんて、知った事じゃない、だって陽はもうそこに、ほら。の、ほら、の周りを、嘘だ嘘だ嘘嘘嘘が蜜に集るように面白可笑しそうに取り囲んでるね。でもそれって嘘と嘘とが共食いでもするみたいに、嘘を打ち消し合ってるんだよ、嘘の始まりが嘘だった、とでも言いたげに、なら、嘘が嘘を打ち消すなんて嘘だけど、とでも言ってそうに。で、にしても、そんなのも嘘で構わなくて、その嘘の始まりのようであってさえ、そこに陽の姿は、さも揺るぎなく、ぐらぐらと揺れっぱなしでさえないばかりに、かに。でも、それ、姿とは分かると、して、陽って、そこには陽しか無いんだけど、それ何だっけ？知らないよね、って誰に尋ねようもないなら、その陽の姿に尋ねる振りでもして、知らないその何かに揺さぶりでも掛けてみようかってそっと誘って来るのは誰？　振り向いて誰も居ないようで振り向けてさえないなら、何？　見付けたぞ、その、何？だ！　でもそんな何？なんて見付けて仕舞えば

嘘でさえないみたいに、はらりとそれっ切り。なら、陽って、そんなそれっ切りだったんだね、って、こそこそ悪い企みでも囁き合ってるのが聞こえて来ないかな。ま、聞こえなきゃないで嘘みたいにどうでも構わないんだけど、その、かな、が、かな、だけで、ぼそぼそ呟いてる事にして仕舞えないかな。かなかなかな、って、それっ切りを滑ってずらして行くとか、で、はらりが、はらりはらりと舞い窮まるようなら、何がそれっ切りか、って話しもはらりと。ふん、な旨い話しが有るなら、何も嘘から始まるとかどうとかの話しにはならないさ、って誰が言うんだっけ？そう言うに決まってたみたいに。誰でも構わないけど、そのそいつだよ、誰とかでもない。そいつにだけは、陽の姿を、それが陽と分かって見据えられて、だって、酷く眩しくて、まるで真っ暗みたいで、真っ暗みたいなら真っ暗を呼びたいみたいで、なら真っ暗で。って言ってみたって、何が暗いもなく。で、そいつはどうしたいの？黙ってても黙りながらに少しも黙れないと分かりながらに、ただ凝っとしてるのが少しも凝っとしてられないみたいでどうにも嫌になって仕舞いそうなら。いや初めからまるで凝っとしてるみたいに少しも凝っとなんてしてなくて、ずっと陽の姿に向かって滑るように進むしかなくて、それって少しも動いてないみたいで、なので陽は、揺れっぱなしでさえないばかりに、さも揺るぎなく、ずっと周りを、沈んだ囁き声に囲まれて隠されるかに守られてるかに。ならそれを聞き取る耳は？って、

陽の姿の奥か後ろしかないよね。耳でなくったって何だって、何でも陽の奥か後ろにしかないしね、決まってる。つまりその声に限らず何のどんな音も、その奥か後ろでしか鳴らないって事。なので陽って、そんな、それっ切りそれっ切り…切り、切り、の並んで滑るなら、ずっとそれで。で、陽は終わり、そこに陽の姿で有る儘に。なら何も終わってもないんだけど、ならその何も終わってない、終わりと隔てられた真っ暗の底へも行き着けない、すっかり厚い泥の姿の風のざらざらとも溶けてそうな辺りで、そいつは、濡れて重い石みたいな時でもじっとり喰らってるんだな、ってな、どうしてもそんなそいつの姿を見付けたくて見付からないのが堪らなくて、だってそうして時を取り逃がしてばかりじゃ、そうしてる時に閉ざされ、時を終わらせ時に終わらせられてるに違いなくて。なら何も終わってないにしても、時と隔てられて何をどう出来るか、って見上げも見下ろせも出来ない陽の色が、真ん前に、その奥か後ろに何もかもたっぷり溜め込んでるのに陽の他はすっかり何も無い空っぽみたいなのを時の向こうへも誇るかに、態とのように微かな音の連なりを伝えたそうに。でも聞こえない、だって耳は陽の奥か後ろでは。でもその音の連なりの響き合って、それが陽の色を滲ませてるに違いないんだ、その色はそれを匂わせる為に微かに明るいんだ、って、隠された儘の耳に、その匂いを嗅ぎ取らせたくて、陽の色色色って呟いてれば、その色に匂いが移って、その匂う色の揺蕩う陰陰に音

の連なる姿の、暗がりの狭い向こうへ沈み落ちそうに裏返り裏返りするのを、何処かに映して居られるんだって思いたくて思いたくて堪らなくて。いや、そんなの映してるに決まってるよ、だって、何処か、だもの。何処かって、何処でもあるんだからね。でもそんな何処か頼みじゃ、陽の色だって怪しくなりそうかなって、でもその、かな、のお蔭かまるでそうじゃなく、その何処かを頼みとして仕舞えるなら、その何処もが、陽の色の光りを受けるに違いない、陽の奥か後ろだった色んなものが、ごつごつと影を刻むかに競うようにころころと酷く痛そうに、暗がりの底を抜け切って浮かぶんだよきっと、陽の前の、ほらそこら辺りに、びっしりと。にしても、ただびっしりなだけで、何の色に輝くもないんだけどね。でもびっしりって知ってる？　只事じゃないんだよ、びっしりには、数え切れずびっしりと狭い隙間が砂に埋もれた砂みたいに埋め込まれてて、そこを、止まれば直ぐ死ぬぞって凄い勢いで、影を切り刻んで連ねたみたいな小さな獣の群れが走り廻ってて。ああ、奴らみたいに小さくなってすばしこくどんな歪に曲がる隙間も凄い速さで走り抜けられたなら、奴らを追って、奴らが何を囁き合ってるか、それとも怒鳴り合ってるかも知れないけど、その声も聞けるんだけどな、だって耳なんて、びっしりの中にびっしりで、どんな向きの音も聞き漏らさずに欹てられてそうで。「ならそうしたら。」なんて言われなくったって、そうしたら、って思い浮かべた獣の姿に、その影を擦り

擦り成り切ろうとしてるとは思うんだけど、どうかな。にしても、「ならそうしたら。」って、誰かの声でも聞こえたの？その聞こえたかも知れない声だよ、声だよ、その声だよ！の他に何が有るかって、無いだろ。いや、無いだろ、なんて要らない。だって、その声だよ！と「ならそうしたら。」はもう、どっちもがどっちもを呑み込んだみたいに、ぐらぐらと一塊につるりとそっと膨れる影みたいで、そこに映るのは、びっしりの裏にぽつんと一つ隠された、小さな、さて、何だろう。でもそれがそこに隠されてるんで、小さな獣らは、きっとそれの匂いを嗅ぎ取って一呑みにしたい程にどうにも行き着けなくて、走り廻らされてるんじゃないかな。で、びっしりは、低く丸く響くみたいに細かく揺れてて、その細かな揺れの一つ一つがまた、小さなそれを深く隠してしまってて。ああ、でも、で分かった、そこまで深く隠されるものなんて他に無いもんね。そうと分かれば、深く隠されれば隠される程、それへ近付けて、それをこっそり獲って来るのも出来そうかな、獣共を出し抜いて。まぁそう見えはしても、近付くには、獣共を産んでじっくり煮詰めるようにでも育てた深くて広過ぎてそれを眺めるだけで何処から眺めてるか知れなくなる、何処までもただ眩しさを走らすだけの陽の輝きは暗く差し続く森へ入って、きっと迷うに迷うしかなく、その迷いの果てに見付かるそれなら、それを何の姿にも見て取れて、なら、何にしよう、「鳥にしたら？　翼を拡げれば、霞んで濁って歪む陽みたいな、

だってずっと昇りも沈みもしないなら、ずっとそこに留まりながらそこに留まりようもないみたいで狼狽えるかに、飛ぼう飛ぼうって、で飛んでてもそこにその儘な、きっと鳥の姿なのが嫌で嫌で堪らない鳥の姿を。で、そんなの鳥じゃないって、鳥でもないかの奴らに言われ続けて、その姿を、さも鳥でしかなく晒して、って、そんなの何の姿でもないなら、ずっとそこに囚われてるしかなかったに違いない、かの、で鳥な。」って、こんなの声じゃない、聞こえてもない。鳥の匂いなら確かに漂って来そうな森の眺めへ、突き刺さってふらふら揺れてる、尖って長い影かな石より硬そうな、の石の硬さもあやふやにしたくてうずうずしてそうな。でもその長い影の、透けた炎のように伸びて行く尖った先を追えば、陽の裏へうっかり行き着けて仕舞わないかな、何だか怖くて、森の眺めはすっかり縮み上がって仕舞って、でも縮むのは眺めだけで森の広さは変わらずに、その奥深さへ、試しに「鳥にしたら！」って声を投げ込んでも何も返って来ないのを見下ろしてるのは、どうやら陽の裏に隠れる、翼を畳んだ鳥か鳥擬きか鳥擬きを装いたいと見せ掛けたい鳥みたいで、なら森の奥の果てと陽の裏の繋がってるのを、それは、こっちへ知らせたいのかな。って思えば、森の木木も草も、すっかり陽の眩しさに引っこ抜かれ、森はこっちに僅かに薄い陰のような苔と茸を生やしてもそっから先はすっかり丸裸で、嫌でもそれを見て確かめるしかなく、森の奥の果てまで走って丸裸の中にぽつんと残っ

たそれを獲って来るしかなく。で、びっしりは、もう要らなくなったみたいに獣の群れを道連れに水に沈んで行くんだけど、何をにしても沈ませる水なんて、もっと要らなくて、水もそれを分かってるかに陽の後ろへ自ら沈むように隠されて。で、なら、その、それだけが残るみたいなんだけど、それだけ残るそれなんて、疾っくに影も無いよ。残るのは、真っ直ぐに突き立てられた尖った影だけなんだけど、その長く落ちて尖って行く先には、おっと何も無いんじゃないか？アハハハ。…なら有るじゃないか、笑い声が、笑い声を響かせる拡がりが、石より硬そうにか、って事に成りそうだけど、どうかな。その有るのって、その、それなんじゃないの？鳥とは似ても似つかない。いや姿がないんだから、その笑い声に陽の眩しさでも触れれば、鳥が翼を拡げてるんだって、見ようによっては有るかもね。まさか、眩しさなんて届く筈ない、だから笑えるのさ。って分かれば、笑うのも要らなくて、影も無い儘、それだけ残るそのそれが何かをそのそれが分かれば、それは、すんなりと、陽への恨みでしかなかろうかね、棘棘と尖りたくて尖れない。それが、陽の裏へなんて行き着けそうになくそこへ落ちて来てる尖った影に、緊く絡んでじりじり這い登れば、周りの暗がりまで巻き込んで渦を幾重にも脹らませて。でもそれっ切り、だってそんなの、自らをズタズタに引き裂いてると同じ、だって恨みだもの、下を向いて逆さの炎みたいに静かにすうっと尖ってなくちゃね、熱い儘で居る為に。でも、そう

して自らをズタズタに引き裂いて恨みでもなくなったかのそれって何。暗い渦は愈愈勢いを増し、巻き付かれた尖った影なんてもう影も無く、渦は自らの重さを支え切れないかに危うく傾いて、でもその度に身を持ち直すなら、その身は心でも宿してるかなって、の、心なんだよ…って言い掛ける声を、狙い澄ましたように下から噴き上がって一呑みの水は真っ暗で。「真っ暗だってさ、アハハハ、そりゃ陽への恨みだもんね、己も己を呑むものも真っ暗って言いたいだろうよ、陽の眩しさを剥いで裏返したかに。」でも、分かり切ってるけどね、陽には姿は有ってても光りなんて無くてだね、つまり眩しいなんて何かの間違いが紛れ込んだ儘なもので、だって光りなんて有って眩しかったら陽はその光りの中に眩しさに打ち拉がれるかに溶けちゃうもんね。いや、陽がどうとかなんて誰と話せる筈もなく、何の声も聞こえてなくて、なら、水は何を呑んだのかな、の水だって怪しいよ。なら心は？「心なんてもっと怪しいよ。だってずうっと見て来たよね嘘のコロコロ転がるの、コロコロ転がれなきゃ心じゃない心そっくりに、嘘が嘘の嘘みたいに。でも嘘と心って、その二つばかりで絡む程に背を向け合ってそうで。」って、これは、温温してそうで水なんかよりずっと冷たい声で、平べったくて、丸くて、ちょっと歪んでて、ならそれって陽にそっくりだよね。なら、陽の声かな、って思わされそうでも、陽の姿のずっと黙ってるのも今更にはっきり見て取れるなら、水も心も無く、それって陽には

裏も後ろも無いって言い換えられそうで、でも、じゃ言い換えてどうなるかなら、きっと、それって切り。いや、それっ切りにはそれっ切りの裏も後ろも有ってね、どうにもそれっ切りな儘で有る筈もないんなら、さっさと言い換えようよ。うん、でも、声が無いよね、心なんだよ…って言い掛けたかったが徒か、心も無くした切りじゃ。それとももっと違う事かな、びっしりな耳も哀れ水に沈んじまったんだろうし。そうか、それで鳥の姿なんじゃないか、って言ってるのも鳥の姿で。だって裏も後ろもない、沈ませる水さえ沈められて、飛んでもんでもその姿をその儘に留める、きっと風になんて少しも乗れない強張る翼でも持ってなくちゃ、陽を向こうに回せそうになくて。「何だその翼、そんなじゃ、翼でなくったって、そうだな例えば剥がれてボロボロの小っちゃな魚の鱗でも、そんな鱗みたいに透ける程薄くて風に飛ばされた石礫でも、もっと役に立とうさ。」なんて声の届く筈もないなら、届いたのは何？の、何？が鳥の姿なんじゃないか、だって首を傾げてるもの、翼なんて疾っくに捥がれて、ひくひくと土に頬を擦り寄せて這うばかりの。そんな身も直に引き千切られるに違いない、だって目障りだもの、陽から見たら。いや光りのない陽は何も見ようともしなくて、なら土か土に染みた水に酷く嫌われたんだな、でも構わない、だって恨みだもの、もう熱いのも諦めた。でも冷たいんでもない、熱い冷たいなんて土か水に遣らせて置いて、嫌われる儘に、バラバラにされて粉粉に

されてきっとドロドロにされて、骨と肉も溶かし込んだザラザラと濃くて戯（おど）ける血みたいに成って、土の水へ染み通って。そうだよ、そこで役に立つんだよ、翼。いや、さっきまで翼だった、さて何かな？って、声を作りたいのが、その何かな？で。で、作れたの？作れたさ、だからこうして、何やらと何やらを言い換え言い換えしてられるのさ、だろ？の、だろ？も要らなくて。だって喉の奥にも陽の姿を映せそうに、ぱっくり大きな、恨みに恨ませたあれやこれやの災いに挑み掛かろうって震えの止まらない口が開いてるじゃないか、でその恨まれる災いって、全ては、陽の姿にしかなくて。喉の奥に映るその姿を、その喉の奥の奥まで引き据えたくて、さっきの翼は何にでも言い換えられて、でもその何もは恨みの他にないにしても、その恨まれる災いなんて数知れず、言い換えられ過ぎても言い換えられ足らないみたいに、何の風にも影にも留まりようがなさそうでは、どうにも。「だろ！で、そこで魚の鱗さ、魚なんて知らんけど、ふふん、石礫かも知れないかの。ほんのり茜色の、ってのは言わなくて良かったかな。」なんて声の届く筈もないなら、災いの全てを、剥がれて擦り切れた鱗より薄い透ける程な声に、一言、恨み…、と態と言い換え直し損い掛けるその勢いで、大きく開いた口へ陽を呑み込もうと狙い澄まして。って、どうやら、さてどうにか、こっちが狙い澄まされてないか？沈んでも腐ってても種を甦らせてはどんな土でも水でも構わず繋り直して拡がる森の奥から、

湧いても尽きない、鳥にも獣にも成り損なって産声の儘かのか細く尖った声を上げ続ける、そんなのが、風に乗って開けた口の喉の奥に映る陽の姿目掛けて、幾重にも続く尖った群れを並べて繋げて。ふん、そんなの見なかった事にして仕舞えるさ、だって狙いを付けたのはこっちが先だぞ、って開いた口を歪めるだけ歪めるように滑らせて、じりじり閉じて行きたいんだけど、鳥にも獣にも成り損なってるのがきっと奴らの強みで、陽の姿は、奴らの瞳の一つ一つに、まるで陽には似てない、真ん中に真っ暗な穴を開けたような形に映ってくるくる回るのは脅すみたいで、でも「ああん、それ、その穴、見覚え有る有る。」って赤児の嘘泣きみたいな甘ったるい声が、陽を支えるかにその下にぬるりと滲めば、そこにそんな穴の形が見付かるしかなくて、きっとその奥深そうな暗さが、陽の姿を陽の姿の浮かぶしかない処に翳してるんだ、って直ぐにそう決め付けないでは、赤児の嘘泣き声は蜷局を巻いて蛇にでもなって暴れそうで。ならその穴って、陽が産み落としたんだよ、その穴が陽を産み倒し産み上げもして。つまり己を産ませて互いを産み合ったんだな。って分かって仕舞えば、穴なんて嘘で、その嘘を呑み込みたいみたいに、鳥にも獣にも成り損なった奴らが、そこへ集るように群れごと突き刺さって行くなら、後は知れないかな。知った事でもないし。だって陽の姿が、何も知った事じゃないさって言ってるみたいに、そっくりその儘だもの。その儘？いや陽の姿がその儘だった事なん

て無かったよね。その儘の陽の姿を狙えるなんて今の俺だけだな間違いなく。って声を作れたの？作れたさ、だから陽の姿なんて、今産まれたばかりの赤児みたいに捻り潰すんだって思いの儘で、でも捻り潰せても、それ、姿だけなんじゃないか、の姿って何だっけ。喉も塞がって何処にもそれを映せないんじゃ、どうにも。なら姿なんて要らない、初めから要らなかったかも知れないかに。だって姿を剥ぎ取れてるなら、丸裸の陽だけを狙えるじゃないか。だろ？「だね。」って声を上げたのは誰だ。そいつの、だね、だけは嘘に決まってる。だって、そんなの直ぐに分かる筈ないもん、温温と水に潜って、待ち構えてたかに嘘を吐きやがって、態とみたいにもたもたと嬉しそうに。で、陽は見る間にその嘘を纏って、丸裸も嘘で、いや、でもそうして嘘塗れな程、陽はその嘘の真ん中で身動き取れなくなってて、狙えば何時でもその真ん中をぶち抜けそうなんだけど、その何時でもがどうにも時を引き延ばすようで。なら、で構わないさ、恨みの口を、その引き延ばされる時の重く沈むのを真似るかに、幾らでも時など余らして、恨みの一色に染め上げるかに、ゆるゆる大きく開け直そう。だろ？「だね。」なんて声は、もう嘘でさえないさアハハ。なので、その笑い声さえ唸るかに直に陽に突き刺さってるぜアハハ。って笑う息を吸うだけで、喉の奥へ嘘ごと陽を呑み込めてて。その嘘ごとってのが肝だね、だって喉の奥だって嘘に決まってて、嘘ごとでなくちゃ、喉の奥の嘘がオエッて引っ繰り返

って、陽をゲロッて吐き出そうからね。でも直ぐに「アハハ、嘘を呑んで、陽を呑み込んだ積もりとはね。さぞ、ほんのり茜色にかな、なんて言う積もりはないよ。だって色じゃないもんね茜って、ま、何だって色じゃないんだけど陽の色の他は。の、陽の色って知ってる？知ってそうにないね。だからだよ。」陽って刺刺した声が喉の奥から噴き上がって恨みの口も裂きそうなら、それって、陽を産み直したいって、って事は、陽に産み直されもしたいって、穴の恨みの叫びか何か？なんて微かにも疑ったのが徒か、その声の勢いに乗せられ、陽は嘘ごと引っ繰り返るかに、陽の色を轟き渡らせて、すっかり吐き出されて。その陽を見上げるようなばかりな恨みばかりなら、恨みの色は研ぎ澄まされ、陽の色に包まれる陽の姿へ突き刺さってても行けるだろ、ってそんな事をまた企むしかないんだろうけど、どうかな。「…なんて、どっちを振り返ってるの。」の、なら、そっちつって、穴しかない筈なんだけど、なら穴なら穴で構わないんだけど、中はすっかり陽の光りが、ん？陽の光りなんて見えちゃって良いのかな、坩堝にでも収まりたそうに丸丸と何の穢れもなさそうに安らってて、ならそんなそっちが陽でしょ、それとも陽って呼んじゃいけない訳有りな何か、とか。いや、そんな事を迷ってるのが、その陽で。なら、時の染み渡るかに時と共に広広と轟く陽の色に包まれてる陽の姿って何。も何も、まるでそんなもんでしかないんだけど、でもそれを陽って呼ぶのって、きっと間違ってそうで、

嘘とか嘘じゃないとかでなく。って心付く儘の心で覗き込めば、陽の光りなんて消えて無くなってて、そこに、ただ丸丸と何の穢れもなさそうな、透けて淡い、それを恨みの色と呼べるなら呼べそうな、疾っくに陽の去った冷めた真東を向く歪んだ茸のぬらりとした艶みたいな、そんな、産まれたばかりの小さな蛇の苔に埋もれ掛けてむずかってそうに揺れる狭い額とも見えて仕舞う、いや待てよ、心に目なんて無いもんな、抑も心付く心が怪しいじゃないかって、きっと、そんな無い筈の心が、そこへゆるゆると落とし込まれて、それをそう見せてるんだな。ああ、なら、すっかりもう空を覆って揺るぎない陽の色に包まれる陽の姿も、心無しかに分かったね。だってその空、幾ら広くたってその奥深さまで、蛇の狭い額に丸ごと映り込んで身動き取れないじゃないかアハハ。って、ここで笑っても笑い損の空笑いかな。だって先にその陽の姿が笑ってるもんね。それって何の笑い？って思えば、そこからまた、もっと無い筈の心が、その下の土に染みるようにじわりと落ち込んで、で、やっぱり、無い筈だけあって心は無かったねって、土を持ち上げて茜の根でものんびり探してそうな水にゆっくり笑われて。ならそれで憎らしく笑う陽の姿だって消えてるよねって、うっかり見上げた、でも見上げも見下ろせも出来ないんだけどね、そんな空には隅から隅まで、眩しくて死にそうな、紛れもない陽の光りでどうにもならなくなってるのは何、ギラギラギラと。ここで笑わなくちゃ、陽の光りを押し返す為

に、でも笑いの蓄えを使い果たしたかな。なら恨みは？の恨みって何だっけ。まるで分かりそうにないなら、すっかり恨みに満ち満ちてるに違いない、死にそうに眩しくても陽の光りを押し返せる限りには、こっちは。だろ？「かな？」ああ、その、かな、が嘘かどうかなんて知りたくも考えたくもない。だって、そんな声を作れるのって、お前しか居ないだろ。のお前なんて見付かる筈ないんだけど、なので、お前に声を掛けられて。「声って？」間違えた、声じゃない、声じゃないんだ、の、声じゃないだけが陽の光りを押し返せてる。筈が、どうもそうじゃないのは、ギラギラ眩しい中に陽が見付からなくて、なら何を押し返すもないなって、声じゃない、は、声かも知れなくなって、「で声って、作れるもんだっけ、陽の姿みたいに。光りの眩しさとは違う事だよ、分かってるよね。それとも茜色みたいに、ってのは言わなくて良かったんだけどね。」な事言えるのって、お前じゃない。だって、お前しか居ないんで。なのでお前でだけはないんだよ…。「だろ？って言ってみろよ。」ふん、お前が言ってろよ、お前でだけはなく。光りの眩しいのから陽は消えちまって、そっちもこっちもだろもかなも、どうにでも言い換えられそう過ぎて、溶けて一塊の、落ちて行くなら穴しかないようで、の穴は、穴を開けてる穴じゃなく、穴の色に塗られて穴の姿にしか成れない、でも穴擬きじゃなく、穴の色と姿なら全く穴でしかない、そこへ。それを、無い筈の心が、無いとも知らず見るとも知らず、何処

かから見てるなら、さぞコロコロ転げて行きたいだろうね、でも何処へ。の何処へ、なんじゃないかな、陽の姿って、それとも、その何処へと陽の姿とが、互いを作って作られ合って、それより何処へも転げられない処へ転げて、無い筈も何も無くなってすっかり消えた心の、何も残さなかったとしか薫らない、その小さな匂いを下に敷くかに、ふんわりと、嘘も嘘でないもなく、そのそれらしく。なので、その何処かは陽の姿だけが知ってて、陽の姿もその何処かにしか知られない、そんなそこのそれなら、水の底に縮れた茜の根の先だって見付けて、己の色と照らし合わせられようね。なんて言わなくて良かったし、茜は色じゃないんだけど、その根の影の水の揺れる隙間へ、己の色の淡く映るのをどうにも確かめられそうで堪らなくて、そうせずには居られなくて、で却って目を逸らし身を躱すその目にその躱す身の映って、それは、己を陽の姿と知ってその姿を作ってる姿で、陽の光りの空から消えて無いのを思い起こせば、笑いなど喉から舌から根刮ぎの、水に底など見付けられない突き刺さるばかりの姿のない影さえ暴いて震わせる、そんな尽きない歓びに、己の姿は貫かれ、でもそれって、まるで辛くて苦しいだけで、その辛さと歓びは、どっちもがどっちもを呑み込むみたいで、組んず解れつもし損なってもっと苦しげに、その先に起こる事を待ち望んでるに違いないんだけど、ならそんなのどうだって良くって、で陽で。で、それ、底もない水なら、水ばかりな底でないそこで、

何を呼ぶんだっけ？呼ぶ振りだけさ。陽なんて嘘だって嘘を真っ暗なこれ見よがしに振り翳したい振りの。で、なのでか、呼べば呼んだだけ、呼ばれた姿は陽に成って、死んだような陽の色の。だろ？って、俺は光りを消された姿の陽に言ってるんだけど、その俺がそんな陽で、って声を作れてるなら、それって間違いなく陽しかない、の陽が、その陽を恨んで殺そうと、ならそれって、陽じゃない他の何かだよね、って声は黙らせて、（二〇一八年一月九日）

（有り余る目を…）

有り余る目を幾つか知れないけど隠してる、にしては重くもなく、草原の果てに置きっ放してあった瓢の中へふわりと詰め込まれたのを、手に提げて。でも、山の森に囲まれた凍り始める湖で遊ぶ鳴く鳥を、真似るかに翼を拡げる形の茸のぱたぱたと嗤う声へ向く、隠せない目が一つ、目だけで泳いでるみたいに。だって魚で、鱗を明明とぎらつかせ、水を知らないかに、硬い風を打ち据えずに措くものかと跳ねて。でまだ、雲間の星屑を散らす高い風に乗って天翔たくも、水に沈んで餌を漁りたいでもないなら、跳ねるにも飽きて、捨てられた自らをよりさも愬ろに捨て直すかに、取り敢えずの足を生白く生やし、森の

曲がって険しい始めばかりで終わりそうにない途切れ途切れに長くて捩れた、裂けては突き上がる木の根の股の陰を次次潜る坂を上ったり下りたり、凝っとはしてられなくて。それともそれで凝っとしてるかな、どう歩き回ってみたって足なんて、土を踏むばかりに凝っと突っ立てられてるだけで、草木の汁の落とせない汚れに縛られてるみたいに。だって魚で、向こうに湖の凍ってるだけで、風の匂いもチリチリ剥げ焦げて、ずっと曇りっ切りの空にその痛みを走らせる程に風は乾いて、ならもう渡りもせず、その焦げる匂いの痛みが、透けて捉えようのない空の色に刺さりたくて悶えるように短く反り返って吹くにしても、水なんて影も無い。それとも、鱗のぎらつきが何処かへ映って身へ射し返って微かな影を透けた花弁のように落とすなら、その影は延びたそうに反って水の影とも見紛って、なら水の影なんだって、その先へ走るかに仮の水の匂いを漂わせ、水の面は、直ぐその下な。にしてもそんな水面では、青い空の遥か裏を回り込んで洩れる陽の光りばかりが、馴れ馴れしく流れ込むように映って、これ見よがしに力任せな愚かな振りで、魚の近寄るさえ拒むのも明らかで。それとも拒むようで待ってるかも知れない、厚かましくも、でも陽の光りに溶ける柔らかな色か形か匂いでも身に着けていなくては、鱗をぎらつかせてるようではは、どうにも。で、なら、魚の姿の儘にも一つの目なんだから、その目で、坂を逸れてそうな泥を滑らす木の根の内の破れ目でもと、曲がり切れてない坂の

縁を濃い繁みの影の奥に探せば、替わりに見付かるのは、尖った陽の光りの欠片、に見えて、それって、剥がれたのも忘れてた己の鱗かも、と、で、目が拾い上げて、翳してその向こうに透けて眺められるのは、やっぱり足を生やして歩き回る目で、その己の姿に違いないにしても、その魚なのは、捨てたか、秘めて隠したか、うっかりとでも。だって生足で裸足で足だけなら殆ど凍えてそうで、それをその目一つは、拾い物でもしたみたいに嬉しがってて、明明と、水とぎらつきに係わるあれやこれやはすっかり匂いまで洗い落としたかに。でその姿は、それと溶け合える明るさを欲しくて、そこでくるくる回って見せるなら、それをずっと遠くで見付けるのは、重く苦そうな火を噴く穴しかなさそうだけど、剥がれ飛んだ火はどれも穴を下に見て、もう真っ暗なねばねばしてそうな一塊で、それを火と分かるのは目一つしかないにしても、それはその見詰める目の明るさを裏返しに映したに過ぎないとも分かって、なら穴は何だろうと、冷やりとする程にほんの直ぐ真下に、行き成り覗き込めて仕舞うなら、どれ程歩き回ったか知れない足はすっかり擦り切れてて、でも目は、足なんて忘れたかに軽軽と瓢をぶら下げてる。穴なんて真下へ来れば穴でもなく、それを塞いでる肉厚の艶は歪に捩れて脅すようでも黙った切りで、ただ膨れたり窄んだり、噴き尽くした火なら産んで直ぐ奪われた児らを取り返したいかに。そこへ突き刺さって埋もれてみたいんだ、って目が思わないんなら、目じゃない。

で、目なのか、じゃないのか、そんなどっちかでしかないのは真っ平って、真っ暗なねばねばした火にでも取り繕ろうと探しても、坂の終わりの白い土の僅かに窪む辺りに、それとはまるで違う細い筋の茜色に毳立つような小さな火のぽっと浮くのを逸らし掛けた目は見付けて仕舞って、それ違う違うって思いながらも、そんな火を寒くて諦め切れずに探してたんだって、それ擦り切れて失われた足に促されるかに。でも近付けば、霜の降りて冷え切った灰が、窪みを斜めに滑ってばかり。なら、火くらい熾せるさ、その目の中になら、また少し先の、やっぱり終わってなんてなかった坂の曲がって緩くなる辺りの灰の滑り倦ねて火の匂いでも欲しがってそうな辺りへ、ちょっと傾けた目を角角しく見開いて、ざらざらした涙を薄っすら溜めるだけで。そんな火じゃ目の縁までで弱そうに拗ってるだけだけど、でも良いよ、瓢にびっしりの目が、瞑った儘でもその火の色をありありと映し、熱を移して、詰め込まれた中はすっかり火じゃないか、にしては、ほんのり温かいだけだけど。ほんのり、そのほんのりって、コロコロしてて、中で凝っとしながらも、嬉しそうに転げてて。いや嬉しそうでもないかな、じゃ悲しそうって言い直せるかって、きっと嬉しいも悲しいも忘れて、その忘れたのも全て捨てて、なら少しは嬉しそうな、悲しそうっても言い直せそうに、でもそんな言い直しなんて何にもならないなら、そうされそうにもなく。でひっそりとも、何の風を待ってるんだっけ、全てを忘れたからには、己

の空っぽをそっと回し回しして。で、その風は直に来てるかも知れない、コロコロ出来るのって、その風のお蔭かも知れないみたいで。って、目一つは、瓢の中をそっと覗くんだけど空っぽで、びっしり詰まってた目は、じゃ何処へ行ったか、それを考えるべきか考えないで置くべきか、ああ魚だったら巧く考えを操れたかな泳ぐ儘眠るように、でも魚なのは、捨てたか、秘めて隠したか、うっかりとでも、水も失せ、連なり果てない山の眺めは何の答えも断って凍て付くようで。と振り仰いだ初めに重い目に留まる山のなだらかな左肩に、鳥が羽を休めた脚の痕の匂いのように月が乗ってて、そこからもすっかり瓢の中を覗けて、その空っぽなのが望み通りで、ハアハア嬉しそうな息を滲ませてるんだけど、それ、なんて臭いんだ！って、山に埋もれてた石ころが耐えられずに山肌を裂いて草の根を掻き切って全て転げ出すのなら、それらを山へばら撒いたのは月に違いないなって、瓢の中の狭い空っぽは、答えを見付けたみたいに静かな儘で。その静まり返ってるせいで、その狭いのなんて見掛けだけで、青い空とその青も知らない遥か裏までより、もっとずっと広そうで、なのでそこへ、有り余る数知れない目を易易と隠して置けたんだなって。いや、で、だったとして何なのかな。目は何処へ行って仕舞ったか、よりも先ず、瓢はそんな知れない広さに何を容れる為に、草原に置きっ放されてたかだよ。目じゃないんだな、だって、空っぽって覗かれるから空っぽなんで、その空っぽ

にしたら、それは少しも空っぽじゃないんで。惚けたように、月は知らん顔、を装って、空っぽにしか見えない瓢の中に容れられてるものを、ずっと狙ってるんだけど、ハアハアする息に身がぶれて、中中飛び掛かれずに、まだ見ぬ血腥さに悪酔いするかに。って心付くのが、瓢の中で、少しは嬉しそうに悲しそうに、ほんのりコロコロ転げてるなら、それってきっと、その心にしても、月の光りに射抜かれたりしたくないなら、ずっとそこで凝っとしてるしかなく。で目一つは、そんな事を知れても知れなくても知れた事って事にして、覗くのは已めて、それ違う違うって思いながらも、もうほんの先に枯れ枝の燃やされてる色を嗅ぎ付けて、そこを避けて裏へ回るようで回り切れないなら、真下はまた、穴を塞ぐ捩れた肉厚の艶だろうなって、その辺りを跨ごうとして、うっかり角張る目尻を滑らせ瓢を落として仕舞ったに違いないね。だってそうして目一つは、吃驚するくらい身軽になって丸くなったかに風に乗って。瓢って、そんなに重かったんだって手放してみて分かるとか。それともそうじゃなく、瓢の中のコロコロ転げてるのが、枯れ枝の燃える匂いを嫌うか瓢から抜け出て、目一つに色もなく取り付いた儘、ひたすら火から遠ざかろうとしてないか。きっとそうだ、だって真っ暗な月の光りが上を向いて矢のように追って来るしな。風に乗れるのは月の光りで、こっちは風に弾かれてばかりで、ならまた直ぐ真下の膨れたり窄んだりしてる塞がれた穴へ突き刺さって行くしかないかな、っ

て思えば、その思いを迎えるかに、穴は開いて、さっきと違ってふわふわ軽そうに尖ってふらふら繋がった火を噴いて靡かせて、月の光りより先に、目一つに突き刺さって来そうで。なら火を噴き返して遣ったら良いんだよ、って何が良いかなんて知れた事かなって投げ遣りで居て、そうして目一つは、もう知らず己の噴いた酷く熱い火に包まれてても、その熱さに直ぐに慣れれば、何もかもが分かったような。で何が分かったのかな、分かった事なんて、ずっと分かってたし。その分かってたって事が分かったって事かな。じゃ何を今まで分からなかったか、分からなかった事が無かったなら、何を今更分かりようがあるのかな。なんて、解けない謎が解けたのが謎のような初めから謎でもなかったような謎に、絡み付かれてるのも謎めいて切りが無さそうなんだけど、そんなの直ぐに切りで、ただ分かったのは一つ切り、目一つって、火一つって事。の火って何だっけ。って振り仰ぐ空の青の裏まで、もう目を突き刺して行くしかなくて、ぐるりと空の果てを一巡りして火を噴く穴へ戻って仕舞いそうが嫌なら、その手前で身を捩って、穴を逸れ、そこで目一つは、空に架かる一つの陽の姿を待たれてたかに己に纏うしかなく、それは息を継ぐにも風を呑み呑み泳ぎ続けるしかないなら、魚。捨てられたか、秘められ隠されたか、でもうっかりなんかじゃない、だって、水は失せた儘で、月の光りは遥かな真っ暗へ遠ざかって、そこでやっと僅かに嬉しそうに仄白いんだし。その嬉しそうなのだけ

は、そこに有る儘ずっと見知らぬ儘みたいに分からないな、でもそのせいで他の何をも分かってられるようなら、こっちも嬉しそうにして、それを分からない儘にしてられそう。そのしてられそうが、すっかり酷く分からないばかりになって、嬉しそうも消し飛んで、何処へ逃げようも逃げられず、一つの陽の魚、他の陽を真似るかに火を噴くばかりの。穴なんて、その逃げたさからの嘘なんで。水の失せた儘なのも、水なんて嘘って極まってるから。で、捨てられ秘められ隠されたかの己なら、その己を捨てて秘めて隠し直して、浮かぶ瀬にでも辿り着けたらしいのは、水の嘘へ、その嘘を水と浸かってられるからに違いなく、ならと、そこからまた何処へも泳いで行けそうに身を翻して振り仰がれる山のなだらかな左肩に、脚を縛られ辛そうに目を真ん丸く開きっ放しの鳥を見付け、それで囚われたかに、その鳥に肉を啄まれたくて堪らない身は、真っ直ぐ鳥の脚下を目指すしかなさそうで。でも、真横から真っ暗な程に真っ白く射し込む月の光りに遮られ、鳥なんて直ぐに見失われ、山を離れて水を探して転げてるに違いないその縛られた脚の匂いの形に身を埋めれば、それはそっくり己の姿その儘の魚の形、鳥そっくりの。ああ、その鳥そっくりを憎んで来たんだ、ずっと。それで、一つの陽になって、青い空を果てなく泳ぎ回って、そんな魚で居るしかないから、穴へ埋めたい火を吐き続けて。でもそうと分かれば、そんなのもうどうだって良くて、でも他の陽はどうなんだろうって見返ると、

数知れない陽の魚が、狭い空を好きに輝きたくてもその互いの輝きが障ってぎしぎしと暗そうに泳ぐのも儘ならなさそうで、確かにそれでは有り余ってるとしか。って、誰が思うんだっけ、陽自らな筈ないなら月しかないにしても、数知れない陽に隔てられ、なら月の在処は、空の青の低く果てる暗いその向こうとか、水ばかりな水ならその暗さを襲うように迎えにも来られそうな。その水の面に映るのが、陽でも月でもない、熱くも冷たくもない色の、間違ってもぎらぎら輝いたりなんてしない光りならな、って、そんなものを待ち望んで仕舞うのは、魚だからか、鳥そっくりだからか、なんて惑って仕舞うので、鳥そっくりは憎まれるんだなって、その水面へ、鳥そっくりだけを映して脱ぎ捨てて、魚の陽の姿だけに成ってみても、直ぐにその鳥そっくりの映る水面へ、身を突き刺しに行くしかなく。でも水面は凹んで歪んで限り限りで魚の陽の姿を避け、ぐるりと捩れる水の裏から透けて見えるのは月の光りの、青い暗い空にぽつんと滲む抜けるような色で、色は様様に滲み合い重なって脹らんで、ああそうか、月の光りって時を重ねた鳥の巣なんだ、囚われた鳥を逃がさない為のって、何が分かったか知れないのに分かった事は何やら分かったかに、月の光りは忘れて、なら陽の姿も忘れるしかないらしい儘に、鳥の巣目指して泳いで行けそうかな。だって辿り着けたら、その中の囚われた鳥とその痩せ扱けた雛共までを何羽だろうと一呑みにして遣るって、力が湧いて。でもまだ歪んで捩れてどっ

ちが裏か表か知れなくなってる、躍り回る柔らかい翼みたいな水面から抜けられずに居て、目一つであるばかりに。で月の光りへ近付けも遠ざかれもせずに居る内に、目は月の光りをぬるぬるぬると纏ってるらしく、そのぬるぬるに己の身の重さが掛かって、ぬるぬるごと目は、そこを下れる限り下って行く、としか。滲む色の中に切り抜かれたかにその形をくっきり現して、きっとどの色にも崇められるしかないばかりな遠ざかる月の姿は、きっと、鳥そっくりを裏返してて。そう見えるんなら、目一つが、月の姿に裏返る鳥そっくりを呼び寄せたんだって、その嬉しくも悲しくもないのを楽しむかに、目一つはくるくる回って、躍り回る水面に、鳥そっくりと裏返った鳥そっくりの交わってそのまた交わり合う姿を産み続ける拡がりが果てもなさそうに映れば、愈愈色でも真似てひたすら月を崇めでもしなければそこに囚われる儘らしいにしても、遠過ぎる月はもう、目眩く入れ替わる見知らぬ色の星の姿で、その同じ星ばかりが湧いて尽きないかの空は、その星明かりのせいで真っ暗で、その真っ暗へなら、幾らでも真っ暗から流し込まれるかに星屑は殖えて。でもその殖えたのって、月が星の姿に成ったからなら、星明かりってどれも月の光りに繋がれて縛られてる筈、って、水にはそう思えるんだろうね、鳥そっくりと裏返った鳥そっくりが、そんな色に滲むように僅かに染まれば。で、そんな色で固められたかに、目一つの中には、星になんて成ってない丸い月の姿が曇りなく、何処までも透き通っ

て何処までも空に浮かんでる水の中でゆらゆらしてて、その透き通った水の果てに映る月の光りの明明と裏返った鳥そっくりに冴えるのが、それを見詰める目一つにそっくりなら、それは目一つで、それだけが目一つに違いなくて。って、その目一つが、もう一つの目一つに見詰められ、その一つともう一つとで、一つって事かな、ってただ一つの目一つが、目一つを見返すようなら、その見返されたのは何かな。の、何かな、は、その纏う月の光りさえ嗤うかの、裏返り返した鳥そっくりの、鳥そっくりなら鳥に成ろうとして、でも透き通って何処までも空に浮かんで風も光りも遮る水に阻まれ、自ら翼を捥ぎ捨てたそうな鳥の姿にしても、翼なんてもう幾つも幾つも捥ぎ捨てられてないかなって、自らの姿を自らに映す目一つは、遠くに月の溶ける色の流れるのを見て、って事は、月の光りは切り離せてて、凝っとクルクル回れるのは、捥ぎ捨てられた翼を探そうとしてそうで。それでやっと、目一つの、その一つなのを探り取れたかに、でもその一つって、まるで見知らぬようで目眩くばかりの一つのようで、そんな一つをずっと身に着けて来た目なら、確かに一つっ切りで居るしかないかなって。で月は？って、さもおっとりとした見上げ方で探し直される月の姿は、ぬらりと遠過ぎて、きっとそのせいで、何処までも空に浮かぶ水からさえ逃げ切れてるみたいなら、もう満ち欠けも沈みもしなさそうで、びらびらした茸を真上から見下ろしたようなその形を、自ら憎みながら、その憎しみの色艶

を、山に捨てた切りの数え切れない石ころに擦り付けるかで。でも石ころ共にしたら、まるでそうじゃないだろうな、だって月に捨てられる前に同じ月に山から掘り出されたに決まってるからね、どの石も。憎むんなら、月より石共が先って訳で、然もばら撒かれた儘じゃ、その憎しみの色艶なんて何処へも拭いようもなく。そんな石ころを蹴飛ばして遊ぶ為なら、また足を生やすのも悪くないなって、でも何処に？空に柱を立てたみたいに、足だけが突っ立って、何処から見付けて来たか月の色を懐かしそうに浴びてるなら、まさか目一つに替わって月が足を生やしたとか。それともさも月の足が、月を憎む石ころを蹴飛ばし続けて憎しみに果てのないのを、目一つは、身を低くして凝っと見て居たいとか。ああそれって我ながら良い考えだぞ、だって目一つに映るのは、憎しみが膨れて転がり続けるばかりになって、それに身を委ねるなら、その身は直ぐ側の直ぐ側な程に見知らぬ何処かへ運ばれて行かれそうで。だって一つって見知らぬ一つのようなんだもの目眩く、そっちしかないよねその目なら、ってまた、捨てられた自らを自ら捨て直してるようで、中中嬉しそうな筈だけど、ちっとも嬉しくもないのは、魚で、泳がなくちゃいけないのにすっかり何処にも水は無く、その匂いも無くて、嗅ぎ取れるのは遠い微かなチリチリ乾くような火の音、尾っぽでも振り立てて遊んでるみたいな。確かに中中に、それって目眩く音だな、そっちそっちって目は泳いでないか。ないよ！って誰が言うん

だっけ、そのないよ！に傷付かなくちゃいけなくて、傷付けたなら先へ進めそうでも、傷付けなくて、そうしてその誰がを見返ってる積もりなら、沈まないならその儘消えたに違いない月に替わって、すっかり老いて疲れてるのを見透かされまいと今産まれたばかりのような色を泣き喚くように振り立てる、一つ切りの小さな赤いか青い陽に、目一つは突き刺さって行くしかないようで却ってその陽の有るか無いかの光りに突き刺し返されて、その色を目一つは映し取って、憎しみの真っ只中に据えるしかなくても、それだけは憎しみから守らなくちゃいけないみたいで。それって、鳥そっくり、でそれはまたさっさと憎まれ直し、でも月の光りの届かないからか、その憎しみはキラキラと新しそうで、これなら幾らでも嬉しくないかなって、その嬉しさを確かめたさに、目一つは、泳ぐようかに遠い火の音に誘われる儘に。でもどうもはっきりしないんだよね、何か危ない事を見逃して仕舞ってるような。って、なら湖なんじゃないか、あいつなんで凍ってるんだろ、空を真っ直ぐ見上げる目一つみたいな振りでもして、怒れないのを怒ってるみたいに。ってその畔に小さな火を見付けて仕舞うのを、違う違うって、捥げても捥げても幾らでも生え直す翼を羽搏かせるかに、そうして憎しみをばら撒き直すかに、そのばら撒かれた憎しみは、捥げた翼が森の木の枝枝に掛かって、その儘燃えるように腐って行くかに、その数え切れないきつい臭いで、赤いか青い陽の光りを撥ね返すかに。なら違うんだよ、火

じゃないんだよそれ、湖だって怪しいもんさ、いや、でも、森は動かないなら見えない何処かに湖の底が眠ってて、見えないならそこって、目一つの底かも知れなくて、ならきっとそうで、で何で、そこは眠ってなくちゃいけないかなら、重ねた時を跳ね返らないように折り敷く為とか。まさか、時なんて重なる筈ないから火は尽きなくてね。違うの？って眠ってるのにうっかり尋ねたりしたら、返って来ない答えに巻き込まれそうに益益危ない事を見逃してそうなんだけど、火じゃないんなら、それってやっぱり火で、何も怪しくなんてなくて、だって、それって、目一つの底で眠って目一つの底を眠らせてる、鳥そっくりでだけはない、なら空っぽな鳥の巣みたいな、山で産まれたんじゃないって直ぐに分かる滑滑したら一つ切りの遠い水の色を透ける儘にも潜ませてる石ころを直ぐ上にコロコロ浮かせて転がしてる、蕾に成り損なった儘綻びたかの淡い形の穴の影で。でも眠ってる底に穴なんて無いなら、それって何処から来たの？何処かから来なくちゃいけないんだ、火なら必ず。って言いたそうに、その火を提げて湖の畔に立って、凍ってた湖なら必ずその底に開いてる筈の凍るより冷たい穴の姿が赤くて青くに透けて見通されなくちゃいけないんじゃないかって鳥そっくりに震えてる目一つが、仄白い裸足の生足を生やして曲げては反らして揺すって、左肩左肩って呟くのを已められず。それ鳥の左肩だったらな、ふわりと舞いたそうに、でも違うんだ、淡い形の影を延ばして来た、その穴の左

肩に決まってて。ああ、ならその穴って姿を消した月の埋もれた姿だったらな、その左肩に鳥みたいにふわりと止まれるなら眠るように事切れられるかなって、でも違うんだ、事は切れようもないんだ一つ切りじゃね、なのでもう月も消えた切りで、元元消えた切りなんで月か、な。つまりその穴って、その穴の姿をした、その姿でしかないんだよ。淡い形の影を延ばすばかりなら、その淡いのは影の淡さで、なら、その姿の影の形には形なんてなくて、ならその姿だって、何の姿も無さそうで。の、無さそうで、が形なら、影の淡さも、その形からちょっと貸して貰えたみたいな。だから凍るより冷たくて赤くて青く見通されるしかない、って事にしてもしなくても、事なんかの事じゃないのは、きっとその穴から始まって事で、だって、凍った湖の底で口を開けてられるなんて、事を悉く呑んで仕舞ったばかりに抑え込まれるように眠らされて、思い出せるのは火しかないのに、その火が鳥そっくりじゃ火って何だったかなんて、鳥そっくりよりも分からなくて、なら鳥そっくりの何が分かってるのかな、なんて考え始めるだけで、何の火も見付からないせいで眠りよりも重く低い石の匂いでもして来そうに平べったい眺めに、呑み尽くした事を悉く磨り潰されてそうな、そんな頑なな石のような身を呑み込めるのは、その開けた自らの口しか無くて、そんなじゃ何も呑み込めない儘、開けた拡がりに侵されてそうに口を開けてる穴位だよね、石のような身なんて、火よりも何だか分からなくて当たり

前に。でも頑ななんだよね、って言っても、頑なでないものなんて有ったっけ。で、水の面に映るものなんて一つも頑ななんかじゃなかったぞ、って心付いて、見付からないと知れてる月影を探す振りで水面の移ろいを覗くように柔らかく、その穴の口の奥までを呑まれるように見通せる心なら、それって裸の、底もなさそうに僅かな色を浮き沈みさせたそうに柔らかく震える目一つ。裸って、ただ火を脱いだだけなんだけどね。でも魚。火を脱ぐ魚って？火を脱いだ魚って？なんて、その穴が目一つに尋ねる程に愈愈、火って泳ぐ魚で、その魚は火と燃えて。でもそんなの、穴だからなんだよね、だって、その奥に嫌でも目一つが見付けて仕舞うのは、渦巻く水が水を産んで渦巻いて尽きない、水が水を憎んで憎み切れずに已まない、でもそんな憎しみの渦なんて嗤ってて侮るかに、淡い空っぽの瓢の中にしか見付かりそうにない色の、小さな染みでしかない自らの姿を喜んでも居そうな、上辺はふやけてても中は確り硬い、山裾より低くにしか生えない草の種が、ぱらぱら浮いたり沈んだりで、陽の赤くて青い匂いをこっそり周りへ流してるか、それともあからさまに欲しがってるかで、火も魚もそれに縋って取り憑ければ身を翻して天翔て、幾ら陽を呑んでも持ち堪えられそうにただ青くて熱い空に、焼け焦げて散れそうなんで。そうならそうしときなよって、裸の目一つは、草の種なんて目尻に埋め殺して、だって山裾までだって行けやしないよ、そのこっちに陽の赤くて青い色と匂いがぬるぬる溶けて

て、でもうっかりって事もあるからね、そしたら涙の筋を引いて山裾へ繋げて殺しても死んだりしない種を流して草を萌えさせれば、叢へ身を隠せも出来ようからね、だって裸じゃ山裾なんて、うっかり山へ迷い込んだ奴らが刃でも振り回したりで危ない事ばかり。なんて事も忘れて仕舞えば、裸かじゃないかもどっちでも何も変わらない程に、周りに火も水もその匂いもなく、森なのに土ばかりが幾つもの陽に代わる代わる焼かれてる禿げ山みたいに酷く乾いて。なら目尻に埋め殺されてるのって草の種なんかじゃなく、もっとこう、山裾なんかよりずっと遠くまで運ばれないでは居られない、なんて遠い目をして仕舞ったのが徒か、それらはもう疾っくに目尻なんてぶち破って、目尻を裂いて失った目一つは、そこに蹲った儘、それらがより遠くへ何処までも、凄い速さで空を逃げ続ける陽も悉く呑み尽くす水を溢れさせて行くのを眺めてるしかなくて。なら陽の赤くて青は？って振り返る失われた目尻に燃えるようにでも溢れてなくちゃいけなさそうでも、そうでもなく、押し被さって来るみたいに周りを塞ぐ眺めは、とても抜け出せそうもない穴の中の、暗くもなさそうにさも薄暗い。だって穴の縁までが恐ろしく遠くて、行き着くまでに裸の目一つじゃ間違いなく干涸らびそうで。の、裸って、これだったんだね、目一つを裸にするのは、転げ込んだ目一つを何処へも遣らない逃がさない、その為に広過ぎて深過ぎる穴だって事。で目一つは何処へでも行ける、裸な限り、だって裸なら

何処までも穴だもの。でも足下は水浸しで水はどんどん上がって来て、ああ遠くへ行き果てた水が果てるにも飽きて重い土に潜ってぐるりと回って穴の底を噴き上がるんだな、なら目一つは、脱げる筈もなかった火で魚で、なら穴って、火で魚で、の魚が、水から逃げ上がる火を呑んで呑んで、天翔るかに尾っぽも突っ立てて。なんてんじゃ、穴はもう穴でもないかな。じゃ何？なら大き過ぎて何でも呑みたい魚しかないようでも少しも魚らしさが見当たらない、それを疎むようになら何処か魚の面影に取り憑かれたかの。酷く寒いね、この身が、じゃなく、この眺めが。でも眺めではあるなら、魚に成り切った穴が姿を変えた、そうだな例えば、その穴を容れる器とは見えない器とか。見えるなら瓢とか。で無くした瓢が、この眺めを一呑みにひょっこり出て来たりなんてしないなら、やっぱりあれって草の種で、もう見晴るかせない遠い陽に映える山裾に独りでに蔓を伸ばして俯く花をひっそり咲かせてて、何処までも水を拡げた姿って、その花の形で、なら瓢の花に違いない、なら、この眺めは、先へ先へ、先の無いかに虚ろに眺められる限りには、その花の形その儘の、その穴の咲かせる花でもあるに違いなかろうね、形ばかりにも、それでも花の形ならどうにも花な。いや、でなくても構わないんだけど、だって花なんて、他の何だって構わない、虚ろに移ろう色のどんな眺めにも映ろうとする色の競って消され損なうのが嬉しそうが悲しそう、みたいなもんであってもなさそうでも。で花に

しとくけど、そんな花じゃ直ぐに花じゃなくなって、花じゃなくなるから花なこの眺めに、目一つは、一つ切りにすっかり溶けて、なら一つ切りに目一つだけが、眺めに溶け込めず花の姿から取り残されて、だから寒いにしても、眺めに寒いもじゃないも有る筈もないさって、誰が言うんだっけ？湖は黙った切り、って誰の耳にそうと何も聞こえて来ないんだっけ？なんて、だっけ？だっけ？を繰り返し呟く目一つは、俯くばかりな内に、寒さに滑るかに、もう山裾までも踏み迷ったかなって、うっかり心付くのも果たしてどうかな、心なんて要らない、って下り掛けてる山の頂を探して、態と見付けずにまた俯いてて足下の土に火の色が混じるかどうか確かめるかに。魚なんて済んだ事、だって虚ろ過ぎて形も知れない花なんて、この冷えた身には余りに遠過ぎて、失われたも同じな程に、何処もが花な。って、端っから分かってなかったっけ。って目一つに顧みられる目一つは、もう一つの見知らぬ目一つでもあるかに、鳥そっくりな色をして燃えてる小さな火で。違うかも知れない、でも違っちまったら、それも端っからに違いなかろうなって、それならそれで、悲しそうなだけ嬉しくもありそうに、その、ありそうなので、目は、どの見知らぬ一つを自らと顧みようと向き直ろうと、一つの儘で。なんて、心なんて要らない筈にも心付くのは、やっぱり鳥そっくりが災いしてか。なら、見知らぬ目一つなんて知らない、知ってる目一つばかりが、見知らぬげに一つの姿を纏うなら、それっ切りで、

その先は、花にでも任せて虚ろならそれだけで、そうしてまた顧みられる目一つは、その自らの火を穴へ埋めたくて、そうしたくてだけで目一つの姿で、それも、ずっと。って、心付く心は、水の色を透かせた石ころみたいにコロコロ転がって、水の色なら石ころだって水なんだ、って、それを埋もれた穴から眺めるしかない火に言わせたいんだけど、火って何。そんなの鳥そっくりに任せて置くさ、って、ついうっかり火から目を切ってしまったのが徒で、尖った火がいきなり目に切れ込んで、その目が爆ぜて失われれば、陽も月も隠れた森の冷たい土を掻いて、そのずっと奥の見えない湖の底に音もなく何が眠ってたか、それを分からなくちゃいけないんだよ、どうしても。ああ、なら、そのどうしてもってのが、この眺めなんだね、眺めなら何処もが花な、って憎まれて已まない鳥そっくりの穴に埋もれた火が、そう心付くなら、火って心なんじゃないの、水の色でもコロコロ転がるならやっぱり石ころな。で、そんな石ころなら湖の森に幾らでも埋まってるさ、山には火なんて鳥そっくりと同じで匂いもなくってね、って、繰り返される己の呟きに促されるかに、目一つの身は、遠ざかる山を向いて、(二〇一八年一月二十七日)

(夜なのは陽が…)

　夜なのは陽が余りに高くて昼のようにはその明るさの届かないからにしても、空に浮かぶ真上の陽の、昼よりずっと近くて肩さえ届きそうなのは、何処も真っ暗がりの中に、その陽一つ限りなので、か。それとも、陽の光りの真っ暗に降り注ぐ山坂を夜など知りもしないかに日日上り下りして、その暗さを目の底へまで染み抜いて何の暗さも見て取れなくなったこの身ばかりが、その陽に呼び寄せられて、その暖かさの頬にも触れられそうなら、うっかり背伸びしてるとか。にしてもこれは、前からずっと何となく望んでてこうなってるだけで、でなかったなら夜の陽なんて空の裏側にも思い描けず、ならこの陽と夜との親しみ深さも、その望みが、その儘の色形に降りて来ただけとか。何処へ？ひょっとして色も形も、その望む眺めに塗り込められるようなばかりなので、そこを抜けては行けそうになくて、然も暗さの見えない目で何処かの先を探すばかりと来ては。などと下手に考えたところでどうなのか、その陽の暗いだけの色と形の他に、係われるものもなく。夜にしたって、暗いだけで、果たしてこれを夜と呼ぶのは、酷く間違ってて後後取り返しの付かない災いの元に成らないとも限らないような。誰も殺しててないよな、どうやら独りだからって。と凝っと見詰める手だけはくっきりと手の形で、力も漲ってるようでも血の色なんて影もないし。なら生かした儘にも、この辺りの誰らを、その手は拒んだのかな、

次次と軽軽と踊らせ回らせるように。と独り嗤うようにでもこっちが誰の何を拒んでみたって、夜に色の有るなら、血の色の影の色の、その明るさも暗さも無ければ、何処へとも走り回り続けるしかないような、きっとそんな色の下に生き埋めにされて、でもその色を追ってれば、息を吸って吐いてその息の届く周りを疲れ知らずに踊り巡ってられそうな、そんな影のような姿なら幾らでも湧いて出ようね、なのでまたそれらを繰り返し拒んで飽きるしかなくて、ああ、それらの息の生臭さ。然もそんな姿らの、太い根を走らせて血の色の影の色の下に浸みてる甘い水でも吸い続ける草みたいに太るのを已められないで居るのも、酷く目障りで。そりゃ草は嫌だよな、陽を向いて伸びるようで這う身に囚われて何時か萎れるって分かってて萎れるだけ、陽に褪せた色なんて骸の己を愛おしむようだし。で何処へ目は逸らされるか、抑も逸らす目もないよね、何の暗さも見えないでは。なら瞑っても瞑らないと同じ眺めの瞼の裏へでも、さも訳有りげに囁くなんてどう？そっと「望む眺めを望むばかりの、望みって何だっけ。」とか、いや、そりゃ拙いよ、だって誰かに尋ねてるもんね。誰が誰に尋ねようもないんで、逸らしても逸らしても逸らしようのない目なんで。なら、この手が何をしたかなんてすっかり忘れたか、抑も誰を幾ら殺してたって分からない儘かも知れないけど、真っ暗な陽の光りなら、飛び散った血も砕けた骨も腐った肉も疾っくに洗い清めてそうで、真上の陽の失せない限り、殺す

と殺さないのなんて、首を僅かに縦に振るか横に振るか程の違いもなく、でも
首はずっと同じ向きに振り続けてて、縦でも横でも斜めでもなく。それって、
縦にも横にも斜めにも切れ目なく裏返り裏返りして首は振られてるからで、そ
れできっと、殺すも殺さないも拒んでられる、そんな向きにずっと真っ直ぐ振
れてられるんで。まさかそのせいで、目は何の暗さも見えなくなって、何処へ
逸らしようもないとか、なんて疑っても、疑いの晴れて目の何が変わるでもな
いのも分かり切ってそうで、それより、裏返り裏返り振られる向きって、どっ
ち向きだろう、何かその先に陽の光りと違うもっと暗い沈むような光りの、陽
の光りを殺したいかに蠢くのでも捉えられないか。って、目だけが首の振れ方
に抗って、つまり裏返るのを拒もうと、その真っ直ぐ向く儘の先へ向かうよう
なら、真っ暗な陽の光りに囲まれ、褪せるどころか色鮮やかさを増して恰もし
っとり濡れるかの捩れた骸が一つ、角角しい石ころの散らばる乾いた山肌に、
顔を真上に向け胸を反らし、尻から脚は切り捨てられたかに埋もれ掛けてて。
ふっくらした肌の下には、どんなに病んだ強張った口だって間違いなく涎を垂
らしそうな、たっぷり旨そうな肉、そうとしか見えない、どうして喰われない
儘なんだろう。こんな肌の艶は、真っ暗な陽の光りをずっと浴び続けてたんで
なくちゃ出せないに違いなくて、なら遠くの森の全ての獣共にもその瑞瑞しさ
を常に晒してたろうに。なんて疑っても、骸の何が変わるでもないのも分かり

切ってるなら、それを跨いで、また山を少し上ると、いやいや、喰うべきだったのはこの口じゃないか、どうして喰わなかったか、でも涎を垂らした覚えはない、口の中は酷く乾いてて。股の下から覗くと、暗い中に逆さの骸は獣共に集られ、喰い散らかされてて、でも骸なんで、幾ら肉がじわりと生生しく剥かれても血は飛び散らないんだな、と肉の裂け目を能く能く見詰めてると、そこを太くゆっくり横切るように出し抜けに溢れる薄暗い血が、真っ暗な陽の光りに触れ様、たっぷり盛り上がって旨そうな肉に変わって尽きないようで、そう見て取っては、逆さの口から溢れた涎が頬から目尻まで垂れて慌てて身を起こしても、濡れて冷えた頬は見る見る生臭くなって、この臭みを消すには、身をすらりとした獣に変え骸へ引き返し牙を剥くしかないかな。なんて事を考えたとしても忘れたいし、忘れたね、うん。で、どっちを向いてるのかな、首なんて振ってなくて。捩れた骸。色なんて無い、だって何の暗さも見えないからね。ひょっとして骸でもなく、ただその捩れる形が立ち塞がるばかりかな。って、それを見てるんでもないなら、もう狭苦しい床で添い寝するみたいに身をそれへ絡ませてて、まるでそれに恋い焦がれてでも居そうで、なら、もしこれが骸なら間違いなく、この手に掛けたんだ、手はきっと温かく憶えてるさその恋しさを、そうか見付けたぞ！でも何を、殺し？殺すも殺さないも拒めたんじゃなかったっけ。でか、幾ら身をぎりぎり擦り付けたって物足らない、ああこの肉

の味を知りたい頭の皮から爪先まで、舌でそれを思う様転がして涎だって垂らせるだけ垂らして、でも口って何処だっけ、捩れる形に絡み過ぎて、こっちも捩れ過ぎて、何処が目か口か、腕か脚か、背か腹か、ならもう、幾ら捩れても捩れ足らない野太い草の根みたいなんだ、身は。の、身が、もうどうだか。でも、なのって、抱いてる骸をこっちも骸みたいに成ってじわじわ喰ってるからじゃないか。口なんて要らないさ。喰われてる骸が喰ってる骸みたいな、裏返り裏返りでもして。なら、何も喰ってないし骸なんて何処にも無い、っても言えそうに。っても言えそうなら、何も喰ってないし骸も無いんだよ、口もずっと緊く結んだ儘だったろ。でもそうも言い切れないなら、側に口を見付けるしかないかな、骸のでなければ誰のでも構わない、何も喰わない口を。そんな口の動き回って、その生臭さとまるで違う臭さに獣共が耐えられずに居なくなれば、喰われる為の骸も、有って無いも同じで朽ちるだけだしな。な事を思うのも、さっきから口は捩れた骸にガリガリと歯を立てて、その歯応えが快くて已められず、でもそれ肉の味がちっとも舌へ届かないせいに違いなくて、舌が使い物にならなくなってるとか。な事を思うのも、さっきから分厚い舌は、上も下も歯を奥へ押し遣って、反り出されて捻曲がって、捩れた骸の腹へ、硬い草の根の形の小さな獣みたいな姿で野太く突き刺さってて。でもどう足掻いても舌はその腹の肉を千切り取れずに、その捻曲がる程に延びてまた厚みも増し

て腹に埋まるしかなく青ざめる姿は、その骸に恋い焦がれるもう一つの骸のようかな。でも、骸のようならそれは骸で、とはとても言えそうにない。だって、それをその腹に裂けそうにも捩込まれた骸が、独りでに起き上がって、ふらふらと走り出してないか。突き刺さって食み出しもしてる重い舌に好きに腹の底を舐め回されてるせいか、酷く腹を空かして、喰えるなら石ころでもって口へ放り込める物を探して。でも何も見付からないなら、己の腕を囓り脚を喰い千切るしかなく、そうして自らの姿を歪な胸へ巻き込むように傾くその身は、走っても走っても、山坂に埋もれ掛ける赤黒い石と青白い石の隙間に湧く小さな泉の周りを酷く狭く円く回るしかなくて。で、そうして、泉の奥から上る光りを受けて輝く、蜘蛛の糸みたいな一筋の泉へ吸い込まれるように引かれるのに惹かれるなら、蜘蛛に成ったみたいに、その糸をするする這い上れそうで。な事を思うのも、これまで蜘蛛の口をまじまじと見た事なんて無くて、蜘蛛ってひょっとして喰う為の口なんて無いんじゃないか、なら蜘蛛に成っちまえば、この話しは終わりに出来るぞ、話しが終わり損なったって、喰う為の他に喋る口が有るでもなさそうで、なら終わり損ないを接げる何も見付けようもなさそうだし。な事を思ってる内に、その一筋よりずっと明るく輝く毛むくじゃらの脚の短い蜘蛛が、辿辿しい足取りでもいそいそと糸を伝って、こっちへ向かって、細かな牙をびっしり生やした喰う為の他にないに違いない口を、脅すよう

に激しく震わせて開いて見せ、でもそこで止まれないなら、その儘一筋に沿って泉へ落ちるしかなく。すると泉の奥からの光りも落ちて、一筋の輝きも闇に溶け、空きっ腹を水の頭に押し被せるように泉の底を覗くと、そこには、脚は溶けて真ん丸くなった蜘蛛が独りで安らうかに微笑むかに輝いてるけど、その光りの泉から上へ漏れないのは何故。蜘蛛の糸みたいな一筋を輝かせたのって、この降りて来た蜘蛛の輝きの、泉に映って返した光りだったのかな。その蜘蛛が泉の底に身を隠せば、泉からも泉の上にも光りは失せようね。で、その隠れた光りを見て仕舞ったばかりに、目は、見えて仕舞う暗さに襲い掛かられて、眺めは目を凝らす程に何処も真っ暗で、泉の底で輝く蜘蛛の他には、空きっ腹を舐めて已まない獣そっくりに、重い舌のザラザラ言う奥まった音ばかり。でも音って光るみたいに鳴ってるな、って思うと、その舌は、重かったのが嘘みたいにはらりと泉の頭へ落ちて、そのどう見ても小さな骸は、上を向いてて待ち構えてる蜘蛛の口へ呑まれるに違いなく。で呑まれたの？水の揺れて確かには見て取れないなら耳を澄ます、その耳へ落ちて来るのがどうやら月の光りの鳴る音なら、その舌か骸かを呑んだか呑まなかった蜘蛛って、月なんだよね、いや、でなくったって構わない、月の光りの耳に鳴るなら、見上げれば、蜘蛛の糸みたいな一筋が、その同じ月の音を立てて輝いて、腕も脚も粗方千切れた傾いた身は、操られる骸みたいに、その一筋を口に銜え銜え上って行けて、

辿辿しくもするすると。するする。するするって、音だっけ光りだっけ。って見下ろして直ぐ、泉の火の点されたみたいな微かな色か形を小さく見付けられたけど、それは直ぐに見失われて何処も真っ暗で、音でも光りでもなかったらしいするするも何処かへ消えて、ならこれっきり上るまでもないなと、もう輝いてもいない一筋から口を離して、独り。捩れた骸、が、その独りだけど、それって誰？誰でもないみたいに誰かは知れないなら放っとこう。それよりその捩れた骸に恋い焦がれてるのが誰かだよ、その誰かをずっと探し求めて、それで高過ぎる陽を見付けて仕舞って真っ暗なんだよね、いや、でなくったって構わない、その誰かの面影を、消えた月でも探してそうに僅かに揺れてる高過ぎる陽の姿に見て取れるなら。って事にして置こう、だって遥か下に泉の色の滲むのでも目を掠めれば、きっとそこへ真っ逆様かも、恐ろしい、下を向いてるものは何だって恐ろしいって思い出して仕舞ったかに。陽の姿は何処？陽だけじゃない、高過ぎるものなんて何も無い。ならこっちが高過ぎるのかってほんの少し、何が恐ろしいもなく俯くと、後を追って来たか、間近に脚の溶けた蜘蛛で月が仰け反ってて、どうやら息が出来ないなら、陽の息を探して借りるしかなかろうけど、確かに陽の息なら上へも下へも行かない真っ平らで真っ暗な空を飛び回ってても、蜘蛛で月の身が真ん丸じゃ弾かれるばかり。なら代わりに、それを獲って来て遺ろうって陽の息の行き来する中へ滑り込めるこの身は

真っ平らかな。ならもう腕も脚も背も腹もなくて、きっと、目でも耳でも口であるに違いない閉じて厚みも底もない穴一つ。でも、そうか身は穴なんだって見直すと、無い筈の底が捩れて、そうして捩れた骸の身なら、誰もない。だってそうして真っ平らから弾かれて、でも陽の息を少しばかり呑んで含んだので息は継げて、息さえ継げるなら、息絶え絶えの蜘蛛で月に襲い掛かれて、尖った短い舌を突き刺して、その甘い肉の味を思う様知れる。そんなものに誰もある筈ない、でもそれでも身が、骸かどうかはちゃんと知っときたいな。骸なら骸なのを骸でなくなるまで隠さなくちゃいけないし、骸でないならどう逆立ちしてみたって骸でしかないのを忘れちゃいけないし。ならどっちでも良さそうで、なら骸は忘れて誰でもなしに、蜘蛛で月の肉を貪る姿ばかりに身を寠すまでは良いとして、前からずっと望んでた望みはどうなったの、って、誰も尋ねて呉れそうにないなら、こっちから、喰われても喰われても微かには息は有ってその儘ずっと微かに有りそうな蜘蛛で月を引っ提げて、その誰かを探しに行くか。まさか。誰もなくて、誰を探せるもんか。でも、なら、その誰もないのなんて忘れたら、どうかな。でもどう遣って？誰もなくて。それとも誰もないなら、望みはずっと、誰にもどうにも出来ず望みの儘で探すまでもなくて。なら、その望みに縋るだけの、蜘蛛で月の肉を貪る穴一つで、それは誰もない。って事でしかなさそうだけど、何それ、って誰もなしに尋ねられるなら、その

それって、望んでた望みのそれしかないんじゃないの？で、そんなそれが何を
してるかって、望みなんて誰もなしの誰にだって呉れて遣るって忘れたかに、
蜘蛛で月の肉を貪るばかり、けっ。で、肉って何だっけ。その味を思う様舌で
転がしたくて肉なんだよ、蜘蛛で月の肉の味なんて知りたくもないさ、なのに
何でそんなのを貪り喰ってるかな。ふん、そんなの分かったところで、喰うの
を已められそうにないなら、分かる筈もないって事かな。それで、何もどうと
も少しも構わないなら、そんな事。でもそんな事のそれにしても、穴一つの儘、
誰もない儘なら、そんなそれにはそれの望みを探さないでは、孰れその儘そこ
で溶けて消えるしかなかろうね。でもそれが望みのそれじゃ、その望みってど
う遣って探せるんだろ。誰もない穴一つの己の腑（はらわた）でも、突っつき
出すとか。とかも何も、他にないならそうするしかないけど、こんなの、どう
にでも引っ繰り返せるんじゃないか。いや引っ繰り返すも何も、初めから、こ
の穴一つの誰もないって、この穴を埋める誰かに呼ばれてたんで、そんなら誰も
ない穴一つなんで。なんてのが虫が良過ぎるんなら、もう一つの穴一つの誰も
ないを、己の腑に呼べないかどうか試すなんてどうかな。「あーあ、一つ切り
じゃなくて、穴一つの誰もないが、誰もない儘、遣って来て呉れないかな、も
う一つ。」って呟いて見るとか。とかも何も、他に思い付かないなら、もうそ
の呟いた声が、その望むものを探しに出てて、直ぐにその声に取っ憑くように

応えるものが、その望むそれかどうかは、さてどうかな。にしても何にしても、それもやっぱり、上へも下へも行かない真っ平らで真っ暗な空を飛び回る陽の息であるよりなくて、でもこっちの声が、それをどうにか変えられるんでなけりゃ、何もどうにもならないのも確かなら、先ずはそう望むしかなくて。にしても、真っ平らな限り何でも出来そうな陽の息に比べたら、穴一つの誰もないって、出来る事なんて殺ししかなさそうで、それで、陽の息が、こっちの思い通りのもう一つに変わって呉れるなんて、やっぱり虫が良過ぎるよ。なら変わらない儘の陽の息に、そのもう一つに成って貰うしかないね。で、ならそれって、穴一つでもなくて、誰もないでもなく、陽の息の儘に、穴一つの誰もないと並んで、そのもう一つな姿を、穴一つの誰もないに晒して、科でも作って。
「あーあ、全く、そんなもう一つだよな。」って、呟き直したのが利いたのか、そんなそれが、側で陽の息をして、科を作ってて。呼び掛けるんなら優しく「何も殺さないんだよね…」しかなくて。「だよね…」の声を纏うみたいに、くるりと回ったその姿は、易易と陽の息をする脚の溶けた蜘蛛なんだけど、その真ん丸な何処もつるりとしてて、口が見当たらない、真ん丸いのが、その儘目でも耳でもありそうでも。脱ぎ捨てられた月なんてきっと、遥か下の泉目指してゆるゆると落ちて行ってってようかね。「殺しませんとも。」「何だ、声が出せるなら口が有るじゃないか。なら殺さなくちゃ喰えないだろ。」「陽の息を吐けるな

ら、喰う口なんて要りませんから。」かも知れないな。いや、そうに違いないんだって思っちまえば、望まれた望みは、望み通りに望めてるんだ、きっと。ならもうここは、真っ平らでも真っ暗でもなくて、なら穴一つの誰もないでもなかろうね。って、捩れた骸へ戻るのかも知れなくても、骸も陽の息を吹き込めば生きてると同じさ。生きてると同じって、生きてるんだよ、生きるって、捩れた骸に陽の息を継がせる事だったんだな。そうか、その息を吹き込むんで、その為に陽の息を吐く蜘蛛は、そのもう一つに成って、側に居なくちゃならないって事かな。にしても、そうして捩れた骸で生きてるにしても、生きてるなら、陽の息を喰って生きて行けるでもない、やっぱり殺して喰わなくちゃいけなくて、でこんな高くへ上って仕舞って他に喰える物なんて見付かる筈ないなら、またこの真ん丸な蜘蛛に齧り付くしかなさそうで、肉に有り付けようと無かろうと。「いえ、ですからね、陽の息を吐けるなら、喰う口なんて要りませんから。あなたは、私の吐く陽の息を吹き込まれてれば、その同じ息を吐けるに決まってるじゃありませんか。捩れた骸ですって？構いませんけど、そんなの他の何とも入れ替えられますよ、遣ってみましょうか、そうですね、あなた私の肉を味わいたいんでしょ、でも真ん丸な私の身にあなたの歯が立つ訳なくて、なら私を一呑みにしたらどうでしょう。腹なら脹れるでしょう。でもそれで、私を喰えたかどうかは、さて。だって、何とでも入れ替えられるあなたの

腹なんて、何も熟す事なんて出来なくて。だって筒抜けで。」何処へ？いやそんなの知れちゃいけないんで何処へとも筒抜けなんだ、そうしとこう。それより一呑みって何だ。捩れた骸の喉と腹じゃ何を呑み下せるもんか、って、何をかめようかって下を向きそうになっただけで、捩れた喉から吐かれた切れ切れの腐った肉の匂いみたいにばらりと拡がる恐ろしさに身は強張って震えて。でも蜘蛛は真ん丸だからか、こっちに微笑み返すみたいに少しも震えてなくて、ならひょっとして一呑みって罠じゃないか。甘い誘いに乗って、うっかり蜘蛛に向けて大口を開けたら、そんなの直ぐに裏返されるかして、それでこの身が蜘蛛に一呑みとか。それとも何処もつるりとした真ん丸って、丸ごとそれが口なんじゃないか。それともその真ん丸な何処かに小さ過ぎて見えない口を隠してて、こっちが近寄るとそれがぱっくり裂けて開いて牙を剥くとか。ならら下を向くよりずっと恐ろしい、なら下を向かなくちゃいけないんだ、震えようと震えるだけの事で。その下は、骸みたいに捩れてて、なら捩れた骸の身って、こうして見下ろせてるその下だったんで、なら、その身の何が身を見下ろすんだろうって見上げてるのが、明るくも暗くもない陽の色を振り捨て振り捨て、泉の底から蜘蛛の糸を伝って上って来る水の頭で。で、そんな水の頭の行き着けるのは穴一つの誰もいないしかなさそうだけど、それが捩れた骸を突き抜けるなら、その骸の喉からそれは、真ん丸な蜘蛛へと吐き出され様、一呑みと

蜘蛛へ襲い掛かるしかなさそうで。蜘蛛は先にそれを分かったか、真ん丸を真っ二つに裂くかに大口を開け、返り討とうかに吐かれる水を一呑みとでも待ち構えるらしい。でも中中そうはならないのは、この身が捩れた骸にしても陽の息を継いで生きてるからで、水の頭は迷いに迷って、穴一つの誰もないへは行き着けそうになく。その迷いの向きに揺らめく重さに従うばかりの捩れた骸は突っ立ちながら寝返りを打ち続けて、どちらが上も下もなくなれば、蜘蛛も泉も消し飛んで、それを消し飛ばしたのが己の吐く陽の息に違いないにしても、蜘蛛を無くしたんでは息は途絶え、泉を無くしたんでは、水に救いを求めようもない。と、ここまではきっと分かってた、なので「どうって事ないさ、俺は喰う口だけが欲しいんだ。」って、すらすら口を衝くんだけど、その口って、どう見たって全く喰う口でもあって。そうして少しも捩れたりせず、すっと身を立ち上がらせると、側に、その身のもう一つの姿も立って科を作って、「なら、私は何も喰わずに陽の息だけを吐いてましょう、だって、あなたの望んで探してるのって、何も殺さない、陽の姿をした、陽の姿をしてるなら陽の、あなたのもう一つの口なんですよ、何も喰わない。」そうかな？でもそれで俺が何でも喰えて殺せるなら、それで構わない、困る事もなさそうだし。月が捩れてる。他に何もないならそれが、この身の、何も喰わないとやらのもう一つの口の姿であるしかない。なら何で、この身は少しも捩れてないのかな。「そり

ゃそうでしょう、もう一つって、何でも逆様なんで、もう一つで居られるんですから。」なら、陽の姿をしてるなら陽が月なら、その逆様が喰う口の俺って事かな。それで俺が何でも喰えて殺せるなら、それで構わないにしても、捩れた月を望んでたとして、月が捩れた儘に陽の姿をしてるなら陽で、それは、きっと夜を知らない陽の高過ぎて真っ暗がりの寝返るかに捩れたその裏側に照る月でもありそうなら、その逆様の身は、どんな姿だろう。って、真っ暗がりな光りに照らされる、それだけを見詰められる掌からは、殺した獣の血の匂いが水の爆ぜるように激しく噴き上がって、それに噎せ返って、捩れる腹が酷い空きつ腹と思い知らされれば、赤い月に照らされて真っ暗に獣の肉のように白く捩れる隙間に湧く泉を探すしかなくて、それは山坂に埋もれ掛けてるんだって思い出し掛けては、その瞼の裏かの朧な小さな水の動く光りは円く円く裏返り続けて。で水の噴く手応えは掴めたかな。でも手を洗うしか出来ないのは、どうやらその水に殺した獣の血の匂いが浸みて、それを獣共が嫌って近寄らないかららしい。そうして口が血肉を幾ら欲しがろうと獣が現れないでは、どうにも空きっ腹な儘で。いや、でも陽の息は吸えるんだ、それが腹を満たしてないか。だって、独りなんだ、何処に殺せる命なんて見付かるもんか。喰う口は何も喰わなくたって、陽の息を甘い肉みたいに嚙み砕けてるなら、それは喰う口さ。だとして、それがどんな姿かだよな。それにはやっぱり、たっぷり獣の血

で身を染めないでは、月の光りに何の形も浮かばせられないようで。いや、でももし月の赤くて何処も血の色の光りでは、何とも。なら俺の身がどんな姿かなんて、もう知らない。で済むよな、の済むか済まないかも知れないようなら、月が捩れてるの逆様だって憶えとけば、その儘に山坂を上り下りしてる姿のそれらしい息の弾むのは目に見えるようで、見えるようなら見えるんだ。で、なら考える事って一つしかない。それは、そんなこの身のもう一つの、捩れてる月の、喰わない口なんだけど、側で科を作ってる筈だけど、何処？って、その辺りを弄ろうと差し伸べられる手はさも青かろう、すっかり乾いてて血の匂いなんて少しもしない。そのせいで遠くに血の匂いを見付けた身は、もうふらふらと山坂は逸れて、その行く先は喰わない口だってのは分かるんだ、もだって見上げれば、見上げる向こうが高いに違いなくて、それでやっと、どちらが上か下かが戻って来て、その上が下へ捩れる処に喰わない口が、赤かったとしたら裏返ってきっとそれは白い月が捩れてて、辺りを青い光りに染めれば、そこには何でも見付かって、ひょっとして俺は、殺さない儘、思う様獣の肉に有り付いてるかも知れない、だって何でも見付かる中には殺すも殺さないもなさそうで。「何を言ってるか知らないけど、それで私を見付けた積もりなのね、違いますかしら。」違ってない、その通り、俺にそう話し掛けて来るその口だよ、何も喰わない。「違ってないって何の事でしょ？　違うも違わないもなくてし

か、私の姿なんて見付けた積もりになれないわよ、違うかしら。そう、きっと違うわね、なら言わせて貰うけど、何を喰っても喰わなくても喰う口って、何を喰ってるか分かってらっしゃるかしら。でもその前に、喰うって何をする事でしたっけ、何を囓るのとも呑み込むとも腹へ収めるとも熟すのとも違って。喰うって、ただ喰うとしか言えない事なんですよ、それって何かしてて他の何かが何かに成ったって、それをどうとも言いようもないようにしてる、そんなそれなんですわ。それが喰うって事なんで、その違うも違わないもなくてそれは、来る日も来る日も、あなたの口を動かしてて、そのくちゃくちゃ言う音が、捩れた月もくちゃくちゃを裏返した音で裏返せてて、その裏返るんで、あなたの口はもう狩りは済ませたかに獣の肉を好きに頬張ってその血を口から溢れさせ、陽の息なんて有りもしない嘘話しを捏ね回し、でも嘘だからって無い訳じゃなく、だって嘘なら無いなら何も有りませんものね、その陽の息が陽と同じな真っ暗な光りで空を照らせば、色も形もなく何処までも高くへ突き刺さって行く昼の空が仰ぎ見られて、そんなの、喰う口をあんぐり開けて滴らせた獣の血で身を赤く染めながら仰いじゃったら、そりゃ、喰わない口が何処かにその同じ昼の空を仰いで、あなたの側に来たがってるんじゃないかって、そう思わなかったにしても、あなたはもう、あなたそっくりのそんな喰わない口をした、あなたより少しだけほっそりしたもう一人と身を絡ませ合ってるかに、身を捩

って、その喰わない口が開き掛けたらその吸う息より先に、頭から呑み込まれようと、頭を尖らせてこっちへ向けてて。で、そんな嘘の真っ暗な光りに晒されて姿を現すのが、何だって構わない、なら泉にしときましょうか、赤黒い石だって青白い石だってその泉の側でひょろりと身を延ばす朽ち木に跨がって青い息も絶え絶えの宿り木だって構わないんだけど、嘘臭さなら泉に敵いそうもないんで、だって飲める水なんて嘘なんですわよ、ってのがもう嘘ですし。で泉ですけど、泉なんかと似ても似つかなくて、あなたそっくりのもう一人で、でも少しだけほっそりしてるんであなたには少しも似てなくて、まあそれが私なんですけど、でもあなたにはどう見えてましょう、きっと陽の息を溜め込んだ、なら厚みも底もない穴一つでしょうか、だって他に陽の息を溜め込めるなんて有りませんもの、真っ平らに。で昼の空が何処までも高く突き刺さって行くんじゃ、陽なんて疾っくにすっ飛ばされ、私の溜めた陽の息を唾でも混ぜてどうにか捏ね回して、それを山の端へ吐き出しでもしない限り陽はずっと陽の目を見ない儘って訳で、その為の喰わない口とか。きっとあなたなら、もうそう思い浮かべてそうですわ。ええ、厚みも底もない穴一つですから、出来ない事なんて有りませんとも。にしても、青い息も絶え絶えの宿り木って目障りじゃ有りません？　何時の間に伸びたか、誰かが植えて行きましたかね。それとも月の音を立てて輝いてた一筋やら蜘蛛やらに隠れてただけとか、でも、なら、

これって目で耳で口で、わたしやあなたや夜や昼を、思いの儘に見て聞いて、その通りを語って、それらを回してるなんて事も。陽の息を溜め込むばかりか、ずっとそれを吐いて昼の空の高くへ突き刺さる更にその高い先まで、陽の息の暖かさと明るさを真っ暗かに届かせてるのもこの宿り木で、ならこの木が、喰うのをあなたに強いて、私に喰わないの勧めてるんですわ。だって、厚みも底もない穴一つの泉の私に何が出来ましょう、出来ない事なんて無い儘に。そんな事なら一つ切り、喰わない口で、あなたの獣の血肉の匂いをぷんぷんさせた口を黙らせる。だってその通り、あなたの喰う口はさっきから黙る切りで、私より宿り木のもっとほっそりした姿がお好みなのね、身を擦り寄せて、ぬるぬるした穴でも開いてないかって撫で回してますものね、その木の肌を弄って仕舞った手に何が殺せましょう。獣を殺せるのももう宿り木だけなんですわ、その干涸らびてそうでも生きてる根が朽ち木の中の水を吸い上げる音が、獣には喉元に突き立てられる牙も同じなんでしょうか。なら却って私は穴一つの儘にも、無い筈の底を捩らせて泉の身を、月の光りを全て吸い取る宿り木の影に埋めるかに。でもそんな影も予め宿り木に吸い取られてるなら身の置き処もなく、誰もない姿に身を窶そうにも、穴一つの無い筈の底の重みにでも引き摺られて、そんな私を罵る月の捩れた声に纏わり付かれ、でも出来ない事なんて無い儘に何でも出来るんだって思い出せるなら、そんな穴一つの身なんてきっぱり捨て

て、でも穴は、捨ててもやっぱり穴を捨てただけの穴で、月に罵られてる捩れた声ばかりが、その穴の底を重そうに響くみたい。って、そんな、私が私でなくなって行くみたいな私が、あなたには見えてる筈ですわ。だってあなたは、宿り木よりもっとほっそりした身を、宿り木の影に蛇みたいに絡ませて、それとも宿り木の影って、吸い取られたその影に似せたあなたの影でしょうか、ならあなたはあなたの影に身を絡ませてるんですわ、ならきっと直ぐにその身は冷え切って、宿り木の水を吸い上げる音に切り刻まれて。って、まさか。そんな事なら宿り木の姿も消えてしまうからね。なら、あなたが穴一つなんですよ、私そっくりに。そのあなたの喰う口なら、蛇が呑み込むみたいに、宿り木の姿をあなたの腹に収めて仕舞ってますわね、きっと。それとも、そうなら、穴一つの儘に、あなたの姿が宿り木よりもっとほっそりしたその影でしょうかね。ああ、そうですわ、なので私は、そんな痩せ細ったあなたに優しく肉付けするかにぴたりと張り付いて、もう一人のあなたの振りで、もう一人のあなたの振りならもう、もう一人のあなたで、そうして、あなたの喰う口に口付けする喰わない口に成りたいかに身の影を捩って。でもそうと分かれば、もうあなたはあなたにしか吐けない陽の息を、あなたにそっくりな私の穴一つの身に吹き込んで、私の喰わない口を遠ざけようとしてて。ええ、それで良いのですわ、あなたの陽の息を吸った私の喰わない口は、それで、こうしてあなたに語り続

けてられるんですものね、いやまるで違いますかね、違ったって構いませんわ、だってそれがあなたの望みでしょ、望みなら望む通りに叶いますわ、だってその為の何処までも高く突き刺さる昼の空で、そんな空なら真っ暗でも、却って私とあなたを行き来する陽の息が何でもしたいように出来て仕舞いましょう。さあそれならもう、私も黙って良い頃合いですわね。でも、夜も明けないかに昼の空が何時までも落ちないでは、誰が私の声を止めるんでしょう。喰わない口には喰わない口を、ですかね。なら誰かの、それとも、誰でもないの、またもう一つの喰わない口を呼び寄せて、その口に私の喰わない口を喰わせて仕舞いましょうか。喰わない口なら喰わない口を喰えよ、なんてね。って、そんな事を思い付くのは間違いなくあなたですよ、喰う口の。私じゃありませんわ。ならそうして下さいましょうね。陽の息をすーはーさせれば、そうして穴一つの身を振ってでも一つの穴の底を舐め回しでもすれば、出来ない事なんて無い筈、いや一つ出来ない事は有りましょうか、でもそれを分かるのは私独りで、私独りなら、もう一人の私なあなた独りで、そのどちら独りにも分かる、出来ない一つの事が、私とあなたを隔てて、それであなたは、喰う口と喰わない口とを二つ並べるように比べようとも出来て。って、そんなあなたに陽の息でも吐き掛けたいかに、誰でもないを装う振りで、あなたに身を擦り寄せて行く私を、その姿が誰もないの、見誤られてでも影ならばと、（二〇一八年二月二

十五日

（帰ろうとしてる…）

　帰ろうとしてるんだよ、ずっと。何処へ帰れるか分かってて初めから何処を探し回るもないなら帰れてる筈が、くるくる回る為だけみたいにくるくる回るみたいに、迷いようもなしにまるで帰れてなくて、それで、ずっと、って、何だかこんなで。うっかり帰れたりしちゃいけないかな、探し回るもないそこへ迷い込んで、すっかり目を醒ましたみたいに、探し回るしかないのが何処か分からなくなってては、ずっと、では居られなくなるので。ずっと、で居られないって、その見失われたずっとへ帰り着けそうになくて態とみたいにおどおどしてなくちゃいけないんなら、もう何処へも帰り着けない儘で居るしかないって事だし、態と諦めるみたいに、きっと。でも、ずっとそんな儘じゃ居られないなら、眠るのが怖くてずっと眠る儘へ逃げ込もうとしてるしかなさそうで、それもずっと怖くて。なら、ずっと、まで無くすなんて、ぞっとする、でも、ずっともずっとじゃない。ずっとのせいで、そのずっとは嫌でも孰れ途切れて仕舞うに決まってるし。ぞぞっ。ならずっと、から身を躱す、それとも途切

れてない内に、そのずっとを他のずっとに繋げるとか、せめて先ずはそんな身の熟しの一つも思い描けたらな。でもそんなの出来てたら、もっと向こうへ息も撓って伸びて届きそうだけど、出来てなくてそれで、ずっとはずっと、って、はっきり分かる事なんてもうその一つ切り、他はすっかり燃え縮れたみたいとしか分からなくて。でも、だからって、帰ろうとして何になる、なんて力を抜いて呟いちゃいけない。いや、なので、こっちはそれで呟きもしないんだけど、そんな声は、凝っと身を潜めて途切れ途切れの短い息を力を込めて転がしてるだけでも、あっちこっちからあれやこれやの先っぽから尖って聞こえて仕舞う。それともそれって声なんかじゃなく、身の微かに震えるに合わせて水を吐くように揺れる眺めのあちらこちらから、それまで見えなかったような色が色色に艶めくとかな、艶めくだけで色なんて見えない儘に。そんな色ならまあ確かに、帰ろうとしてて何になるも何も、何処へ帰ろうとしなくたって色色にずっと色なんて要らずに戯れてられそうで、なら呟きたいんなら、それが何になる、ってこっちを嗤う為だろうと、まあ好きにさせるさ。で、って訳なんだろうね、帰ろうとして何になる、のそれらの声は、呟きどころか、見えなかったような色が見えない儘が災いしたか、幾重もの大声に弾けてこっちを脅すみたいに辺りを訝してないか。それに耳を塞ぎようもなく、凝っと身を潜めるように、それらの声の渦に流される儘かに、彷徨くともなく足の爪が剥

がれても見向きもしなけりゃ痛みもせず休みなく彷徨くようで居るしかないなら、この身なんて言ってるこの身は、何、声の渦に丸められて風を転がる石ころみたいな塵の塊とかかな。なんて、振り返られそうにもないこの身なら、帰ろうとして何になる、この声の、弾けて震える音に塗れて、それに紛れてるんだよ。そうしてやっと、この身、なんて言えたりもする。の、この身なんて何処にも見当たらない程に、どっちを眺めても、眺められる何処もが、土の生温かくてやけに広そうな、ぼやけてるとだけははっきり分かる虚ろで、そんな中ばかりが見詰められてなくちゃいけないみたいにそれは凝り固まってて、なのに水を吐くように揺れてて、その虚ろなののそこだけ冷たい底に水を覗くしかなくて動けないみたいに暗くて、でもそれって、昼も夜も分からなくなってその忘れてられる位に明るいのかも知れなくて。でも、それを暗いなって見て取れる内は、何処にも見当たらなくったってこの身の重みは、色の色のない艶の戯れを、狙い定めて色をぐにゃりと潰して抜き出すかに、ずしずしと踏み付けてられそうで。でも重みって、この身には、この身の重みかこの身に掛かる重みかは知れないよね。それが知れないから、まるで帰れてないのがどうしてかも、ずっと知れないみたいで、それでこの身は愈愈、その重みで踏み付けてる箸の色の色のない艶の戯れに、却って好いように傷付けられ、その痛みを裏返したくてつんのめれば肉は剥がされ血もさも浮き浮きと舐め取られ、帰ろうと

してて何になる、の声に紛れるばかりとか。で、どうなんだろうね、すっかり紛れたなら、それっ切り、こっちから上げる声もなさそうとかね。でも声がなくったって、重い身が消されるでも、まるでないよ。なのでこの身は、何を揺らめかせるもなく、ふわりとした水だってこっそり吐けようかね。なら、この身には、例えば空が空より高い向こうへ必ず大きな口を餌をぱくつこうかって魚の口みたいに開けっ放してるみたいに、溜まった唾の味のちょっとは懐かしげに匂いそうなのが擽ったいみたいに嬉しい、そんな柔らかい口が開いてるって、どうにも今やっと、もっと早く分かってなくちゃいけなかったのが酷く取り返しが付かないみたいで嫌でも、そう分かったなら渋渋とも、直ぐにもう冷えて強張る口を、それを動かす肉と骨の組み合わさる重みでも確かめようと、暗いので遠く見える風に晒すかに、黙ってゆっくり開け閉めしなきゃ居られない、そこから何の声も出てなかったって、その出てもなかった声の色まできっちり隅まで殺し直すかに。だって、声なんて呟きだろうと叫びだろうと口に係わりないなんてのは、何処を眺めてもそうだったもん、違いないよ。で、そんな口がどうしたっての、口なら喰わなくちゃいけないとか、またそんな話し？でしかないかも知れない。でも食い物なんて獣や虫どころか草や木の根さえ、この眺めの何処にも見付かる筈ない、だって色の色のない艶の戯れてるばかりなんだもの、血か水かどろどろの汁でも送ってそうな動きを探そうにも、身は

またつんのめるばかりさ。なのできっと腹は酷く空いてる、って事にして、そんなのどうにもならなきゃ、それで忘れた儘にして仕舞おうかね。で、なら、何が忘れられないのかな、その忘れられなくて、水も吐けそうな口で、遠いか近いかも知れそうにない風にまたざらざらと冷えてさえ。凍った骨より重そうなその口を、何処へ帰れるかは分かってるなら、そのそこはそのざらざらした辺りだって、うっかり眠くなったせいにでもしてさも懈そうに易しそうに当たりを付けて、そこへふわりと擦り付ける振りでもして、分かるぞ分かるぞ、こここって身を低く低く這わせて、もっともっとふわりと。それもずっと、どうにも酷くに、ずっと、ずっと。そのずっとの酷さのせいで、口なんて、もう水を吐く形に動かずに、それより冷たくも成らず硬くなったみたいにただ開いてるだけの、幾らでも掘り出されて転がりたそうで何時も濡れてて木の根の匂いの染み着いた石ころみたいに脹れて放られてそうな、ならそんなの何処が口なんだろう、囚われたみたいな生身は、その下に辛そうに深く埋まってそうに横たわってる岩の面にざらりざらりと擦り付けるしかなくなってて、骨から腑まで削られ、砕けて風に吹き払われ、なんて筈は今はないんだけど、何時かはそうなるに決まってるようでもあるなら、今の内から、そんな風とだけ身の熟しもそんな風を真似られるかに巧く遺ってられたらな、いやそうさ、そう遺ってられてるんだよ、なら、それでさあ、他に、何！

何？なんて何も尋ねてる

んじゃなく。…なんて事さ、そうなのさ、って、思えないかな。で、それでも何か残るんだろうかね、さもうっかり何が？って言えそうなだけの何かみたいに、そんなんでもなさそうに。と、その高く真上かへ開く空の、口ならもう何処を眺めてもその一つしかなそうな口さえ、空の向こうへ見失われたみたいで、なら、酷いずっとよりもっと酷く、こっちは俯くしかなくなってるかで、口を無くし窄まった空なんて見たくもなくて。で、残るのは何。ふわり、それとも、ざらざら、二つ合わさるなら、もう吐いたかも知れない水の塊の、土へは浸みたくなさそうに、潮に練られて粘着く風でも招くように、そっとおどおどと向きを変える、その静かさを己の重い塊の底へ沈めて行こうかって、その為の、何処へも洩れない限り鳴り続ける、なので少しも鳴ってないかも知れない音、とかかな。で、穴。何が？　も何もなしに。他にない。どうでもそうしかない。なので何処にだって何でも有り、でも有りのね。だって何だってかんだって、その穴には放り込まなくちゃいけないからね。でないと、それしかないのにそれも穴でもなくなっちゃって、そしたら何もかもなくなっちゃうもんね、だよね。ん？じゃそれって何。うん、だからその、ん？から始まってる訳だな、この声は。まるで違うかも知れなくても。でだね、いや、で…、なんてもう言える声じゃないんだよ、だってそうして始まっちゃってるならね、で…、へなんて戻りようはないんだ。でだね、いや違うんだ、うーん、なら、ん？へ

なら戻れるかな取り敢えず。でもそれも分かる筈なさそうなら、そうしてと。ならまた、穴。でしかない、でしかないもあるもないもなさそうに。穴。が、そのそれであるのには、ん？を繰り返せてて、そうして事が運ばれるなら、その事が事で。でだね！でだね、だよ、穴じゃなくて、いや穴でもあっても、事の事だよ、そうだよね、事が事なら始まるも戻るも脇へ退けられるかに。でもそんなの、穴が無くちゃどうにもならないなら、事は穴に決まってるさ。なら繰り返せてるのって、ん？でもあっても、でだね、でだね‥の湧いて出て、繰り返すまでもない、そんなんじゃないかな、どう？。さあ、知らない、の知らないんで、その知らないのを、でだね！で穴埋めしようなんて企むしかないって成り行きなんだろうかね、何か違ってそうだけど、だって穴埋めなんて言い回し、きっと穴にしたら言い掛かりか脅しにしか聞こえなさそうで。そんな事より、誰が埋められたんだっけ、いや違う、誰が埋められなかったんだっけ、ずっと。だって埋められてないなら、他の何を押し退けてでも、それは、ずっと、しかなくて。酷いさえ通り越してそうに、いや、そうでなけりゃね、でなけりゃ、穴、でお仕舞いだし。で、身はそんなずっとの途切れた処で穴を残して、何時か吐いた水の塊の底へでも沈めて行けてそうで。それとも、そうしてすっかり沈めてるかな、おどおどと向きを変えては、そっと水の届かない向こうを眺めるみたいに、憧れるみたいに。で構わないよ、だって、その向こうっ

て、やっぱり穴しかないもんね。身なんて、そんなもんさ、なので埋められもされなくて、水の塊の底へ沈めてられるようでも、どうでもそうするしかないって定められてたみたいに向きを定めて流れ出すしかなくて、ならそれって水の塊をあっさり音もなく、水に音のないなんてきっと目も眩むように凄いんだけど易易と、裂いて破ってて、塊でもなくなった水は、ふわりともざらざらとも、そんなのどうだって良いみたいに、その帰り着けそうな、水に相応しい明るさをおどおどと望むみたいに、昼も夜もない暗さに染まるのを避けて低く平べったく静かな程に生き物の息でもしてるみたいにぼんやりと、でも少しでも高い向こうだけは見失わないで、そっちへ凝っと走ってて、身も眺めも揺れず揺らさずそっと、ってね。凝っとだよ、ずっとじゃなくて。じゃ、ずっとはどうしたかって？巧く片付けでもしたとか。知らない。でもまあ、ずっとはずっとで、ずっと、凝っとの側を離れないで、凝っとの壊れるのでも黙って待ってるかな。でも、凝っとはね、きっとそうと分かってて、壊れるより先に、水の先を崩して、それをひらひらと舞わせるのさ、軽く薄く、嘘みたいな行き成りの強く束ねられた光りでも、受ければキラキラと光りを騙して、水から先にその光りを照らしてたんだぞ、みたいに。見えるだろ。「も何も、それをずっと見てるんだよ、こっちは。」って誰が言うんだっけ、誰も言いそうにないなら、誰に言わそうかな、って誰も居ないその向こうは、やっぱり穴なんだけど、そ

の穴の向こうに、濁って閉じてまたすっかり濁ったような色の昼の空を覗けるなら、それで水の走るのも浮き浮きと楽しそうで、何処へ帰り着けるも忘れてられそうに。そんな水の舞う先でくるくる回って水を低くへ導くように、だって放っといたらそんな水だもの、根を凝っと岩も穿って下ろすみたいに力を湧かせて易易と天翔そうで、それを抑えて空と水の真ん中に立って独りで間を隔てたんだって誇ってるみたいな、岩の千切れたみたいにも見える苔生す逆さの、そんな姿の朽ち木に跨がってる、ひょろりとしたさも裸な身を風に揺らすのが楽しそうな宿り木まで向かう坂を、走る水に乗るみたいに、ひたむきにひたひたと上ってて。それとももう、水に走れそうなその果ての縁まで上ってて。なら、その宿り木に言わせたいんだって決めて掛かるしかない、それが水の音を旨そうに食べる振りで、高そうな眺めを曇らす風なんて払って切って、さあ、さて何を見るともなく見てるかって事をね。そうしかなくて、なので、その聞きたい声が、聞きたい穴。それともその声が見せてくれるなら、それが、見たい穴で。って、つんのめってないか、なら身を反らして踏ん張ってそれを直すんだ、宿り木の揺れる影を真似て、当たり前に息をしてるのを懈そうに易しそうに続けられてるのが、己独りなんだって惚けた顔でも作り直して。でもそれどんな顔だっけ、そんな顔だけは出来てそうになく、でもそうならそれでそう出来ない顔さって、それを丸丸宿り木に向けて晒すと、干涸らびて歪んだ穴だ

らけな虫に集られてる顔が、暗い艶のつるりとした宿り木の傷一つ瘤一つない生きてる儘皮を剥がれて磨かれたみたいな幹に、狭そうに、延びて横に拡がって映って、埋められてないのはこの身だったんだって、しかも酷く汚れててって、急いで思い至ろうとするんだけど、だって急がなくちゃ埋められてない身なんて直ぐに何処へでも棄てられて転げ回され擦り切れて塵芥に塗れて消されそうんで、でも巧く行かなくて、だって埋められてないって事は埋められてなくちゃいけないって事で、その、何で埋められてなくちゃいけないかが思い当たらないからにしても、何処へ転げようと、埋められてない身なら、その儘に、何が埋められてなくちゃいけないのなんてもう済んだ事にされてそうで。で、何が済んだかだよ、何も思い至らないなら、この身に起こりそうなあれもこれも残りなく済んでて、でもすっかり済んだって分かるなら、何かは済んでないとも分かるしかなく、そのすっかりの他の何かって何？って尋ねられるのが、やっぱりこの宿り木の幹の艶に映る歪に横に拡がったこの身の姿しかないだろうな、どうにもその棄てられてしか身に帯びない汚れに塗れてるとしか見えない。って、やっとの事のようにそう思い至れて少しほっとして。穴。そうほっとしてられる、ここが。それとも、そうほっとしてられるこの身が、その儘に。どっちかな？それとももっと他の、でも、にしても、見えるだろ、穴って。なら「だから、も何も、それをずっと見てるんだよ、こっちは。」って言えるのって、

宿り木しかないよね、逃げられないでしょ、宿り木との間に他に何か有ったっけ、それとも朽ち木は…、いや、それ朽ち木じゃないよ、岩が千切れて頭を下にして苔生してそこへ流れ着いた朽ち木に見えてるだけで、でもそう見えてるんなら岩でもなく、頭を下にしてるんなら、誰？何で頭が下？って尋ねられるのを待ってる、そんな姿を楽しんでるかの。なんて考えてるこの身が頭を下にしてそうで、朽ち木の透き通った影にでも成りたそうに、だってさっきからやけに重い頭で、重さなんて、他の何より間抜けに戯けるみたいに何処へも透き通るしかなくて。「もう已めといたら如何でしょ、そんな、独り遊びにもならない。それより、ここまで来たんなら、あなたはあなたの望む通りを、うっかりとでも呟けるんですよ、遣ってご覧なさいって。」ご覧なさいって、って、そう言われては、その、うっかりとでも、で躓きそうな。「違いありませんわ、もう躓いてらっしゃいますもんね。」いや、違うな、そんな当て擦りみたいな言い合いをしに来たんじゃない。それともどうにも、そうするしかないなら、これっ切り黙るって手も有りそうで…。いや、違うな、ずっと黙ってるしかなかったんで、何か言ってるみたいに身を尖らせ揺らせて、さも声を繋げたかに、ここまで来られてて。いや違う、ただ、ここまで来られた、ってな声を繋げられては居て、だって、そんなここなんて知れないから嫌でも、ま、嫌でもはずらっと、なんだけど。「違いありませんわ、そうしてずっと黙ってらっしゃいま

すもんね、さっきから。」さっきから？なのに、ずっと、って…。そうか、その、さっきとずっとの行き違いを、こっちはうっかり聞かされてるとか、声みたいに。なのにさも当たり前かに、そんなのに、話し掛けて仕舞ってて。違うの？「ですから、違いありませんわ。も何も、あなたの、そのずっと黙ってる、でも、なら、ずっと何か言ってるみたいな、ってのも、行き違いなんだって見えて来てましょう、さっきから。そんなの、違うも違わないもなくて。あなたがあなたで有るも無いもないみたいに。なら、まるでそうじゃなくもあなたで。だって、他に何か？」他に何か？は、こっちから尋ねないとね、だってそれの他になくて、それを奪われては、穴一つ見付からない底もない水の塊の後ろへでも真っ逆様とか、やけに奥深いなとも言えなくて、ただ喉を嗄らして、その喉の奥の狭いのが酷く障るみたいに。「まさか、抑も穴なんてまだ何処にも見付かってないでしょ。なので埋められもしない、って事でもないでしょうけど。は、それとして、あなたに、他に何か？って尋ねられたら、それはこの私の他にない、って事にされて仕舞いそうなのは構わないとして、」穴が見付かってない？なら、そうか分かったぞ！穴と言い合いしてる。って、つんのめるのが良いかどうかは知りたくもないけど、「じゃ、その穴を捕まえてご覧なさいよ。」も何も、言い合いしてるのって、もう捕まえてて、でもそれ、丸丸穴じゃ、その何処に穴の開いてるでもなくて、開きっ放しを裏返して閉じもしないかに。

「そうして穴の見付からない私が、穴って訳ですわね、かしら？」なのかね？って、ここで止めなけりゃ、穴の見付からない穴を捕まえるの繰り返しで、裏なんて返せずに。「で構いませんけど、止めたところで、穴はどうにもならないのは、もうお分かりでしょ。なので、言い合うのもお仕舞いですわね。」どうやら身は逆さで、下にした頭を、宿り木の根の股の間に石みたいに捥げたみたいに突っ込んで、その隠された奥を、見上げるように覗き込んでる。それ朽ち木じゃないなんて決め付けたばかりに、この身でそれの替わりをするしかないかに。で、その股の間に何の穴が開いてるかって、それが幾ら覗いても、何も覗けてないかに分からない、なら何も覗けてない、なら穴なんて開いてない、って、逆さの身を、抱き付いてる宿り木から引き剥がさなけりゃ、身はすっかり石になっちまうに決まってる。で、引き剥がしようもないなら身はもう石で、逆さの宿り木そっくりな、でも何処か違う、宿り木は、股の間の狭い穴をこっちに知れないようにこっそり燃やしたみたいなので。穴。何が？も何もなく、穴。なので、穴一つ開いてない穴。宿り木の股に石の頭の絡んだなんてのはもう、石まで燃やし尽くした火の話しみたいに忘れられた昔話しかな。でも石になった逆さの頭の、昔みたいに懐かしい重みだけは残って、その重みにぴったりの容れ物を探しに降りて行けるなら、そこは穴の中でしかないよね。違うの？って穴に尋ねるしかないなら尋ねると、そこは穴じゃなくて、それに答える穴

が、そこの外で、「穴だよ、決まってるさ。」って答えるなら間違ってて、正しくは、穴じゃないに決まってるだろ、って、それは答えた訳だけど、違うの？って尋ねずに置いたら、穴だったかも知れないな、違うの？「…、」答えなんてないよね、でもそれが答えで、答えは、穴、なんだけど、それを、そう言って仕舞ったら、また違う事になって仕舞うに決まってる。なので、言わない。でも言うも言わないも同じさ。なら「穴。そう、穴ですわね、でも、その穴って何でしょう。」え、誰、誰が話し掛けて来るの？穴、な訳ないさ、答えがないのが答えなんて嘘に決まってて、なので声の主が穴でないのは確かで、それとも、穴の外で穴の声色でも使う、穴に外が有るならそこも穴でしかなくて、でも有るかどうかなんて、穴にも穴の外にも分かる筈ないなら、声の主を探るまでもない、声が穴で。そうさ、捕まえたぞ、穴だろ！「で構いませんけど、でも、その穴って、その穴って何でしょう、って尋ねる声の他には、何でもありませんわよ。」うん、それでこそ、穴、他にない。どうでもそうしかない。なので、その声で穴の何処にだって、何でも有りさ、だって何でもかんでも放り込まれてるからね、間違いなく、だって、他にない穴なんだもの。そのそれっ切りにそうして何でもかんでも放り込まれてるなら、その放り込まれてる全てが丸ごと穴で。「こっちは、で構いませんけど、じゃ、そんな穴に話し掛けて来るあなたは誰なんでしょ、まさかあなただけは穴に放り込まれてないぞ、

なんて仰いませんわよね。それともそう仰れるならそうなんでしょうか、ならあなたは、穴に放り込まれた何でもかんでもの外の、何でもかんでもと違う声なんですよね、違いますかしら。」あはは、また詰まらない事を。そんな、あなたとやらなんて、何処に居るのかな？声は一つっ切りさ、他にないって。あなたとやらが何処かに居たにしても、それもそれさ。「…。」そう、そうして黙ってるのも、どうにもまるで声で、そんなそれとも同じなね、それが、そんなあなたとやら、だね。なので違うも違わないもないって姿が有るなら、それが、あなたとやらって事かな、でもまあそんな姿なんて無いけどね、声で穴なら、そんなの幾らでも拵えられるだけで。そんな事よりだね、いやそんな事だから、全てが丸ごと穴な穴を、捕まえても捕まえ損なったみたいに、また捕まえようとしなくちゃいけなくなるんだけどね、捕まえてるのに。で、なら、もうそんな事しなくたって構わないなって、疾っくに分かってて、その通りにしてるんだけど、それで却って、まるで帰れてなくて、で帰ろうとしてるんだよ、ずっと。で…、いや、でも、話しは少しも初めに戻ってなんてないからね。どうでもそうしかない穴の他にないんだから、どうでもそうしかなく。なら、まるで帰れてなくてずっと帰ろうとしてる事から、いや違う、まるで帰れてなくてずっと帰ろうとしてる事へ！だよ、そっちへ逃げなくちゃいけないね。逃げられてても逃げられてても、逃げられてないかに。疾っくにそう分かってる

としても、そうしてるしかない。それがきっと、まるで帰れてなくてずっと帰ろうとしてるって事さ。まるで違うかな、そう、まるで違うんだよ。なら、初めに戻るどころか、初めより前まで戻ってるみたいで、つまりそれって、何でもかんでも放り込まれる穴を見付けて仕舞ったんだけど、それって、まだそこへ放り込まれてないのがただこの身だけってのも、その穴を鏡に映すみたいに見付けて仕舞ってて、そう分かるからには、ともかく何か逃げなくちゃいけないのに、さあ、どうかって事だね。逃げなくちゃいけない何かって何？ああ、そんなの考えたくない、なので、まるで帰れてない処へ帰ろうとしてるに違いない、違ってるかも知れないかに。そうだよ、その違ってるかも知れないかに、が、その逃げなくちゃいけない何かに違いない、違ってるかも知れなくたって。そんな、違ってるかも知れなくたってなこの身を、この身としては、さあどうするか。も何も無いなら、身なんて、穴に葬えられただけの、なので身でも何でも無い、何だろう、きっと穴を回すか止めるか浮かすか沈めるか引っ繰り返すかの為の、必ず何でも無いでなくちゃいけない、なので、何でも無い、って事かな。いや、それならそれで、そんなのどうだって構わないさ、「こっちは、で構いませんけど。」って、穴の声色だって使えそうに。で何？が、穴。でも穴の外な。ここで、「そうか見付けたぞ！外を。こんなの初めてだよな。」って、叫ばなくちゃいけないのかも知れないけど、そんなの叫べる筈ないんだよ、

だって、こんなの初めてって、それっ切り、って事だよ、然も穴の外な何？へ、
独り放り出されて。なら、そっちのそんな事を何かもう先に叫んでようね、す
っかり黙って。いや、でもそれをそれらしくでも叫べたんなら、もう放り出さ
れっ放しでもないかも知れないな。なので、で何？と、穴と穴とで繋がってら
れる儘に、穴の外な何？へ縋り付くしかないみたいに、穴に外も内もなく、な
ので、一つ切りに独り身で。その独り身の姿でなら、宿り木を逆さに抱ける。
いや違う、さっきはこっちが逆さになって抱いてたんで、太い枝の股を根の股
と取り違えたんだな。さっきから宿り木のずっと逆さな儘なのを、そのつるり
とした幹を撫で回しながら確かめて、こっちの逆さを直して抱き直せば、もう
間違いなく、逆さに拡げられた木の根の股の暗くて狭くて臭くてぐらぐら揺れ
て奥へ行く程広そうな、空と同じ真上を向いてビクともしない穴へ、ぬらりと
首を突っ込んでて。でも、こんなの穴だっけ？　なら、お前、穴だろ、穴なら
きっと牝だろ、って、試しに間抜けを装って尋ねてみようか。答えは、それを
覗いた目があなたならね、って、間抜けに輪を掛けて来るよな。そんな筈ない
んだよ。牝だろって尋ねられてお前が牝なだけさ、でも俺は…、なんて牝のお
前に付き合って牡の口を利いとくが、俺はお前を牝だなんて少しも知らない、
だって牝は尋ねられたお前だけに牝な事だから、なら俺は、俺を呑み込む穴を
探してる、その穴なんだ、同じ一つの、きっと。それって、何を尋ねても答え

ても筒抜けみたいに問いと答えが同じで、なので牝も牡も覗くも無く初めから繋がってて。「それはそうね、でも、そんな事じゃなく、穴なんて要らない、って仰りたいだけなんでしょ。そう遣って死にたいんなら、さっさと空の穴を塞ぐ黒雲の下に突っ立って、雷にでも撃たれたら如何かしら。知ってますわよ、そのくせ、嵐の夜は何時も、あなたはびくびくして岩の割れ目の狭い中に頭から水を被って身動き取れないって。」誰だよそれ、お前好みの盛りの付いた牡の話しだろ。その嘘しか吐かない口でそんな怯えるばかりな牡の肉をどれだけ喰らって来たやらね、でも牡も牝も覗くも無く初めから繋がってりゃ、穴の独り善がりって事かな。「アハハ、独り善がりってそれ、あなたでしょ。初めから無いのは、牝とか牡とか覗くとかあれやらこれやらじゃなく、穴なんですよ。有りもしない穴を要らないって、独り善がりにも成りませんかしらね。」そう、そうだよ、それを聞きたかったんだよ、直に穴の口から。要らない穴なら、そりゃ有りもしないさ。穴に要るも要らないも有るもんか、だって、穴を呑み込む穴を探す穴だからね、その探し探されながらも一つ限りな穴に、その見付からない儘に呑まれるなら、その呑まれた穴は。いや違う、そんな事は疾っくに済んでるよ、だから初めから牡牝とかじゃなく、無いのが穴だって分かってるのが、丸きり穴で、逃れようはなく覗かれようもなく。そんな穴が、逆さの宿り木の根の股に、ほらこっちを見なよって、ぱっくり上を向けて口を開けてる

のって、どうなんだろ。それともそれって穴なのか、って尋ねられてだけ、そのそれには穴な、とか。なんて首を捻ってたのも忘れて、一つ切りの独り身は、その一つ切りにしか走って行けないその向こうへまで走り抜けてもまだ走り続けてて、振り返れば穴が、その残り一つの獲物を狙って、その穴の尖った先に、磨いた牙を並べた魚みたいな口を裂くように開けて追って来るのは分かってて、でもこれって、逃げてるのか？少しも逃げてなんてないんじゃないか、だってこれもう、逃げ切れてるもん。いや違う、逃げ切れないのを良い事に、却って追っ掛けてないか。何を？って尋ねられたら、間抜けを装って、穴の外を、とか、答えてみようかな、なんて、浮き浮きと。で、なら、ずっと帰ろうとしてて帰れてない処へはとても逃げ切れようなんてないさって、嘯いて。いやそう嘯くしかないなら、その嘯く通りさ。でも、その通りに間違ってるって事かな、間抜けにも。だって穴の外なんて追っ掛けて、何になるんだよ。それともそう遣って間抜けの振りをしてれば、ずっと帰ろうとしてられて、そのずっとがずっと、ずっとの儘なら、そうしてずっと帰れないで、何処へ帰れるか分かってるなら、その帰れないと帰れるを結んで繋いで、一つ切りの己の身ばかりでそこがくねくねと塞がれて仕舞っては、穴は？その穴が無いなら穴の無いのが穴でも無くて。ならまた、疲れた独り身を引き摺って、ぱっくり口を開けた逆さの宿り木の根の股に首を突っ込もうと戻るしかなさそうでも、その宿り木の

他にそこには何もないなら、その振り返る身が、逆さの宿り木でしかなくて、そうなっては、宿り木は名ばかりで何に宿りようもなく、「まさか、木の身の枯れないのは、木の根が穴に宿ってるんですわ。」かね？見え透いてるね。そうして、根が穴に宿ってるって、それで帰れる処へ帰れた話しでも拵えて、誘い込んだこの身をつるりと呑みたいんだろ。「まさか、あなたが穴なんですよ、根を宿らせる。何処にこの身なんて有りましょうか。だって試しにそれを指し示してご覧になっては如何。穴のあなたに出来るのは、穴のあなたを覗く事だけでしょうかね、うふっ。」それも嘘だ、穴が穴を覗くのに、何の根を宿らせなくちゃいけないんだよ。「良いじゃありませんか、嘘で。穴のあなたが嘘なら、それを穴のあなたが呑み込んで、その呑み込む穴も嘘なら、何処へ帰れるかなんて、分かるも分からないもなくなって、それでも帰ろうとしてるのだけが、くるくる回る為だけみたいにくるくる回るみたいに、ずっと帰ろうとしてる儘なら、あなたと私とで、くるくる回るみたいに、ならずっと一つにくるくる回ってて、なら他の何処へ帰るもなくて、帰れる処へ帰れてるみたいで、帰れてるみたいなら帰れてて。」それって、丸きり振り出しへ戻ってるだけで、何も始められてもなくて。それに、あなたと私って、誰と誰である訳もないよな。「良いじゃありませんか、それで。そんな誰でも無くて、何を始めるでもなく、くるくる回れる一つで居られましょうからね。それに、あなたね、これ、

誰に話し掛けられて話し掛けてるか分かってます？あなたですよ、どっちも、誰とだろうと。これより帰れる処なんて有りましょうかしらね。」だから、見え透いてるんだよ、どっちもあなたって、そんなの、そこへだけは帰り着いちゃいけない処に決まってて。それにこうして話し掛けてるのが誰かは…、いや、それは笑いが止まらなくなるみたいに切りがなくなるんで已めとくけど。「良いじゃありませんか、そこへだけは帰り着いちゃいけない処へ帰り着いて。そこへだけは帰り着いちゃいけない処へ帰り着けるなら、全く、そこへしか帰り着けないそこへ帰り着けたんですよ、誰が誰を、楽しく切りもなく歓ぶ誰にしようと。」じゃ分かったよ、で、何もかも良いにして、それで、何がどうなるかな。何もどうもならなくて良いじゃありませんか、ぅふっ、が答えか。だろ、あなたとあなたとやらの。「まるで違いますわ、何一つ良くはなくなりますわよ、だって、そこって、帰り着けてそれっ切りな穴で、他は、何一つ、穴に放り込まれるも呑み込まれるもなくなって、くるくる回れるかどうかも遣ってみなきゃ分からないなら、そうも出来なくて、そんな中のどれか一つが、きっとあなたであなたな私な誰かで、それともそうでないかも知れませんけど、でもどれか一つの内の一つが一つには違いなくて、その一つが、一つ限りでなくなる処へ帰り着こうと、いや、まるで違いますわ、そんな一つなんて、一つが一つと幾つにもずっと繋がって、そうして失われた一つの儘に凝っと、（二〇一

八年三月二十三日）

（目の真ん中から…）

目の真ん中から下も腰から下も青黒いのは拡がるばかりの海に因むからか、朽ち木の欠片の窪の水鏡を覗いて考えるにも飽きて、ふと立って見ると、びっしり濃い高い繁みばかりの小さな島のそこだけ雷に撃たれたかに窪んだ谷の隈の土の冷たいと今更に尻に伝って、しゃがんだ儘で居たからか、ずっとそこに禿びて埋もれてたかも知れないな、と。でも隈の奥まで曲がるようにも延びる陽に、身は浮くように軽く、跳ねたりして上を向いた足の裏だけは青黒くないなら、ちらりとも赤いような白いような。でも真ん中から下の青黒い目では、眺めの内の見下ろされるのは、やっぱり青黒いばかりで、なら赤いような白いような、ってのは。そうか、さっさと女を捜しに行けって事か、言われなくても行ってるさ、行ってても行けって言われたって行ってるんなら言われる何に抗いようもなく行く他になく。で、島を離れて揺らす身を突っ立てて小舟を操ってるかな。舟底を踏む足の裏の擽ったさについゆったり振り返ると、島はその一つ切りを晒す谷の姿だけで海に浮かんでて、その谷の隈は幾つか縦に並ん

で、陽を斜めに受けてにんまりと襞のようで、ずっと埋もれてたならそれ、どの隈だったろうって、襞の形をそれぞれの隈の土の色でも探るようになぞってると、そっちへ向けた身は舟に矢印みたいに寝かされてて動けなくなってて。襞の形の滑るように崩れて辛うじて繋がって拡がって行くのは、島そのものが強い行き成りの横波を受けて堪らず畳まれ掛かる谷を倒しながらゆっくり砕けて行くらしいにしろ、舟を操ってその向きを決めてるのは、やっぱり襞の形だろうな。でもないか、だってもう襞じゃなく、つるりと延ばされ引き離されそうにも隈は一連なりに、重そうに低くへうねって、そこに渦すら巻き始めそうなら、目を切るべきでは。で切ったか、なら舟を操ってるのは何。も何も、矢印みたいな身しかなく、首だけ起こし爪先を見詰めようにも腰から下は青黒い水に沈んでて、渦に巻き込まれないなら、身の矢印の向く儘に海の流れに付いて。にしてもこれ、眠ってるんじゃないか、海が。だって海はすっかり俯いてるもの、死んで動かないみたいに、そんな眠ってる眺めじゃ、どっちがどっちもない。なら矢印なんて使えない、急いで身を突っ立てると、水を弾く酷く耳障りな濁った音の勢い任せに真上を向く矢印の儘に、身は軽く浮いて、真っ直ぐ昇ってるに違いないんだけど、恐る恐る見下ろしても青黒くさえなくて海もその止まった寝息の戦ぐのさえ見付からないのは、さっきまで身の埋もれてた狭い隈の底を覗き込んで、その何処までも深そうに暗いばかりに目を奪われて

るからなら、昇ってるようで却ってその隈へ尖った矢印の先みたいに成って降りてないか、そんな筈ないかに。音を聞かないと、はっきり、こんな時に頼れるのは他にない。で欹てた耳に入って来るのは、「死んだ女には会いに来ようね。だってお前の目は、真ん中から上が赤白いぞ。それって、ずっと女を捜し回って一人も見付けられないで、独りはぐれた男の目だものね。」かね？でも、ああ、その知らない女に会いに行こうさ必ず、他にないって分かってるし。そうしてるだろ、そう見えないか。確かに、埋もれてた谷の隈にまた甘ったれるみたいに身を細めて戻りそうではな。でも目の真ん中から上が赤白いなんて言われたの初めてで、嘘かも知れず嘘なんてどうだって良くって、だって誰が海からもはぐれたような奴の目なんて覗き込むんだよ、色まで見極めようと。目の色なんて、どう見えようと水に映ろうと初めから極まってるさ、腰を拗らす女の姿を拗けるように睨め回したり見失ったりする度に幾らくるくる変わろうとね。な事より隈へ届きそうなぷらぷらした揃えて矢印の形を作りたげな臭そうな足なんだけど、島も谷も影もないならそれ何処の何の隈なのか、なんて考えたってどうにもならなさそうで足をぴくりと蹴ると、身は少し跳ねて、その足が風に着いてまた跳ねてを繰り返せば、慣れるかに足も些っとは様になって撓んでは開いて、風の階を駆け上る蛙そっくりで。蛙の膚に擦れる風は、粘っこく「そう、そんなだよ、それで、知らない死んだ女を取りに行くって、取り

に行ってんだろ、行ってるよ、な。な、かな。の、かな、は言い過ぎかな。」
って、鳴ってて。ふん、まさかね、で、己の姿を映せる水鏡を嵌めた朽ち木の
欠片の窪を探そうと、目を何処か酷く狭い奥へ懲らしたのが徒で、いやそこが
隈の何処かならそれで構わないんだけど、何処だか当たりも付けずに懲らした
目では、狭い奥も見据えられず、目ばかりで酷い狭い事になって、もう何も見
えなくなってるかも知れないけど何も変わってないみたいで初めからこんなな
ら、まあどうって事ない、って言えるかな、どうかな。言えたって何も変わら
ないみたいなのは何も変わらないんで、どうでも構わなくもあるんだけど。そ
れとも目は初めから見えてなくて、なのに足だけは見えてるようで、なら足が
足を見てるんだね、その動くのを已めないの足がやっぱり蛙みたいなら蛙で、蛙
なら何処へ帰るって、のかな。って見えはして、も、その通りに足が思う訳でもな
さそうなら、見えない目がそう思うしかなく、だって目の他にないもんね、そ
れで、なら、帰れそうな何処かだけは見えてるに違いなくて、だって、そっち
がそっちに見えてないんじゃ、知らない女の、その知らないって事だって、知
れる筈ないもんね。帰れそうなのが何処か知れなくなってるのも、その知らな
い女のせいかもね。いや、何で知れないなんて知れるかな、ひょっとして何処
かに、そう知れるしかない何かが隠されてるんじゃ？って振り返ると、いや違
う、帰れそうな何処かしか見えない目じゃ、振り返りようもないさ。なら、知

れないもきっと知れないで、そっちだけがそっちで、それで初めから見えない目が、そのそこが目であるしかない儘にそう据えられてるしかなく、ならもうどう目を凝らそうと、その、どう、の儘に何だって見えて来ようね、見えないならきっと、見えないとも知れずにさ。で、死んだ女の何処にも見えて来ない穴埋めかに、透ける水鏡の奥のその窪に織り込まれた鬟の内に雪崩れるように揃った隈という隈に、生きてる証しみたいに丸まった乳の香りの息に塗れた丸丸とし過ぎていて細かく震えるしか取り柄のないみたいな女の体が幾つも見えに見えて、その狭さを嫌さに隈を泡のように弾け出たかの赤白いつるりと脹れた水を頬張ったようなその体そっくりにやっぱり丸い顔ばかりが、隈の中よりもっと狭そうを嫌そうに眉を顰めて犇めき合えば、それで鬟をすっかり隠したそれらは水鏡の裏に重なりながら張り合わさるように映って、こちらへ、なら上を向けた、でも下をも向けてる口をパクパクさせ、自らの一つ切りの伏せられた名を水から掬い取りたいかに、それらしい短い翳りを吐いてはまた吐いて。ああこれはどうにも、全く生きるしか知らない生きてる女共だな。翳りなんて吐かなくったって、つるりと膨れたその顔と体の色形がそっくり生きて動いて疲れてくすむ翳りだろ、死んだ女なら何の翳りも纏えないさ。その翳りがそれぞれの顔と名を、伏せられたのも嘘みたいにすんなり繋げて、パクパクさせる口で水を食い破って、やっぱり泡みたいに鏡の上に凪の光りに滑りたそうに溢

れても、もう顔と名が繋がってるんじゃ、そんなの、せっせと集めた石ころを何時何処で拾ったか思い出しながら並べてるみたいなもんで。まぁ今も死んでないなら何処かで生きてようけど、それが何処かは、風に吹き払われたとも知れない、まるで行き着けない遠いでもなさそうな向こうばかり。で、なら、そりゃ死んだ女がその先へは残るしかないよな。まだ姿も時みたいに浮かばないけど、風に吹き払われるよりもっと先の向こうで初めから独りで死んでて、なので、どっちともその向こうへ向かってれば、知らないそこへは、迷いもしないかな。こっちは独りはぐれてられるんで、生きてる女に行き会うなんて目にも遭わず惑わされようもなく。て事にしろ、その死んだ知らない女なんか掴まえたって、それで何をどう出来るやらね、確かに生きてる女なんて石ころみたいに並べて仕舞えば、それで後障りなだけでどうするもなかったんだけど、と言って、死んでるのをどう使い回そうにも、ま、どうとも使えなくっても構わないんだけど、死んだなりに知れないなりにどうにか成って呉れなきゃ、何の翳りも纏えない石ころを拾って、その珍しさを渋渋と嬉しがりでもするしかなさそうで。でないんなら…、でないに決まってるさ！　死んだ女は、死んだなりどころか、死ぬも生きるも知らない処で、何にでも成れて成れたらまた成り変われてて、なので、生きて死んだ事もなく死んでる儘で居られるに違いなくて。だって女だもんね、捜す前から。女である他は知りようもなく、なら、

女が何もので何にななるかなんて知れなくたって、女なんだとは何のくすみもな
く知れ切ってて、でなくちゃ捜しにも行けない　それも必ず、捜しに行こうと
するずっと前からそうに違いないって心得てて。死んだ石ころじゃきっと、捜し
当てても待ってましたと火でも噴いて冷えて艶艶と生き返るのがやっとさ。で
も女なんだ、石と違って、火を噴くだけじゃない、だって、何だって喰えちま
う口が有るもんな、その喰われてるもの等の運んで来た姿形を砕いては火の色
に変えてるみたいにその口だけは熱くて。それって、何だって遣らかして何処
へ行ったって腐った塵の吐く微かな息さえ見逃さずその身の重みで圧し潰せて
るって事にしろ、足がそっちへ向かってて急ぐのは、その女を取りに行くしかな
いって、それ抑も、夜の短さをもうっかり遣り過ごしてた誰かが誰かに慌てて
お座なりにそう囁いたのを、夜の明るさの果てるのに独り掻き消されるように
取り残されてうっかり小耳に挟んで仕舞って、でも耳はずっと歓ててはいたん
だけどね、その夜ごと居なくなるって分かってた誰やら等の交わす声には添っ
て、それで。ん、急ぐ足？　歓てて耳の硬く尖り過ぎて時を逃れる風へ溶け
て土の軟らかさを分かる音にまた触れたいのばかりに、確かめられる度の夜の短
さに急き込んではその明るさに捩込まれる囁きの弾ませ合いに、抜け目なくも
うっかり乗り移ったかの。そんなの有るかな。朽ち木の窪に溜まってた水は、
生きてる女共の疲れ知らずのパクパクに食い散らかされたんだよな、でも食い

残しでも見付かれば、僅かにも身を映せるかな、って屈めば身は縮められるって疑わないみたいに屈むと、その屈んで縮んだ己の姿の、魚の割かれた腹に静かに溜まった水の隈に沈んでるのが、口から噴いた火みたいに明明と翳りを纏ってみせて、そうか、こっちはまだずっと生きてなくちゃいけないんだ、死んだ女に絡むまでは、然も幾ら絡んだって知らない女の儘で、だって知らないから女で、そんなんじゃこっちまでまるで知らない、でも女に絡むんならきっと男なんだ、でも男の事こそ何も知れない、そんな男に成り果てちまいそうに俺は、って、嫌でもそれをぐっと呑み込まなくちゃいけないみたいに、映って。映って？　そんなこっちの姿を映せるのって、こっちを向いてる、死んだ女の目しかないよな。だってもう、迷いもしない向こうだもんね、ここは。だって他の何処へ行き当たれるんだよ、いや当たるも当たらないも何処だって向こうさ、その引き返せるこっちなんてなくて向こうばかりに、でもそのこっちでその向こうで、しかないよね、こっちとしては。かな、にしたってさ、魚の腹を割いて、きっと直ぐに中の卵を啜って残りは捨てるなんてね、知らない女しかしないよそんなの。って、棘棘と皮と身は干涸らびさせても骨と血はぬるりと生きてるみたいな魚の姿は、そう言ってないか。にしても、その魚の姿って、水を溜めた割かれた腹の他は、女の目には映らないだろうな。だって、何を映すにしても映せるのって死んでるんじゃその水しかなくて、その隈に沈んでる、

俺ならきっと俺の姿を映すのが死んだ女の目なら、女の目に映るのは、水を映す女の目ってその女の目を映すその水なんだって、そんな自らの目の水から知らされる姿の映る自らの目で水であるしかなくて。なら魚の皮と身と骨と血は、こっちの見えない目に映ってるしかなさそうだけど、それを確と見て取ってるのは魚自らの目かも知れないぞって探そうにも、魚の目を見付ける替わりに、死んだ女の目とも知れない目と目を合わせて仕舞いそうで。で、ならこっちの姿は、水の隈に沈む儘に女の目に映るような儘にして置こうかな、ってして置きたいんだけど、そうさせないようにさも目障りかに見えないように紛れ込むようないのは何、って見付かるのは、そりゃ女の目しかなくて、その目に映るこっちの姿を、女は女で自らを自らの目に映してるしかないって疑ってもなさそうなら、その映ってる姿を、女の死んで水から上がった自らの姿と見誤ってそうで、それは。か、見誤ってるのは、こっちとか、まさか。の、まさかに逆さに映り込むのが何ともまた目障りな、だって死んで待ってる、知らないとも知れなさりそうな女の姿でしかないんじゃね。にしても、その女の姿って、水の隈そっくりじゃないか、ってどうにも見えて仕舞うのが嫌なら、何処へ逃げようか、一先ずは。って、その一先ずが、死んだらさっさと水から上がるしかないだろって、こっちへ大口を開けてる大水みたいに襲い掛かって来るんだね、で、そのこっちには女も魚も黙ってすっぽり沈み込んで仕舞ってるに決まってるん

じゃ、逃げるどころか、その逆様だよ。逃げるの逆様って何だっけ？って、何が何に尋ねるも、もうその一先ずが、死んだ大水の水から上がったその姿を転げ猛らせて皆一呑みにしてるなら、何が何にもその何も、先ずはその一先ずでしかなくて、もう大水みたいでもその大水の過ぎた痕みたいですらなくて。で、何が残るかなら、それを映すきっと清かに魚の匂いの岩の響くみたいに微かに浸みた一掬いの水か、それを真似ようとでもしてそこにその姿をその姿へ映そうとして損なってる姿をどうしようかって苛立ってそうな、死ぬも生きるも知らなさそうな女の姿なら女の姿かな。なら一先ず、女の姿なんて何が女だろうと見なかった事にして、だって見えない目だからね、でも水なら水って知れるんだ見えなくったって、その匂いから形から音から僅かな重さから何となしの冷たさからね、ま、決まってるけど嘘に。その嘘なら、それそっくり、やっと尾っぽを無くしたばかりの身軽さを間違いかなって間違えてそうな蛙の姿で。ならやっと帰れたんだ蛙の姿にって、きっと水でもないのに水に映ってるなら水ならんだって自らの姿を水みたいに振る舞わせたそうな、そんな中で揺蕩ってたよって顔してる卵の孵って、風に乗る蛙を撃ちたそうな雷を夢に見たくてウズウズしてる、産まれた時からずっとそんなで尾っぽなんて知らないって言いたげなその姿は、それで却って、自らの蛙の姿を見失って、時の尾っぽでも追っ掛けてなくちゃ、旋風に振り落とされそうで。で、振り落とされるんならや

っぱり、水でもないのに水に映ってるなら水の、そんなそれのたっぷり溢れ上って来そうな辺りが良いな、なんて甘い夢に浸るしかなさそうなら、その姿の、孵った卵にまた帰ろうかって尾っぽを無くしたばかりの蛙みたいで。でもその、みたいで、しかないなら、それはそんなでしかないね、って目を見開けば、その目は、そうと決まってたみたいに清かに形もない道を開こうね、何の道って尋ねるもない道を。だってそれ、その目が真っ二つに切られて開かれたんだ、死んだ誰かを通す為に、の誰かって他に居ないなら、その知らない女を。なら女は、これもそうと決まってたみたいに、その目を切り開いたに違いない刃の上に危うく裸足の片足を乗せ、でもそれにしてはフラフラもせず足よりずっと暗い色の汚れた腕を拡げて、涼しげな顔を重く暑苦しそうにやや上げて立ってて、もう片足が、濁った水の中で餌を探す魚の頭みたいにすばしっこく揺れてるなら、その爪先に、それそっくりの魚が、その女の爪先を狙うかに口をパクパクさせてて。で魚の周りをその裏から滲み立つように薄っすら青黒い水の後ろ向きかに迫るなら、女の爪先は、そのほんの先ばかりが、僅かに、ああ赤白いんだ、先を照らしたげに燃えるみたいに、って声にしたいんだけど、俺。俺？俺じゃないよ、俺に声なんてないもの、だって知らない死んだ女の事を誰かが誰かに囁いたあの忙しない夜の儘の声に耳を塞がれる儘じゃね。なら声は、道にしかない、で、もっと清かでなくちゃいけないみたいな声を上げるなら、ま

た真っ二つに切り開かれて、それで開かれた道は初めに開かれた道と交わって、そこへ赤白い女の足の踏まれるのを今か今かと待って、差し招くみたいに、そこに撒かれた水が息絶えた海そっくりに静かに張って、透き通って。透き通る程に、道の交わりはそこで深く切れ込んで、そんなじゃ、女の足でなくったって二の足を踏むしかなさそうで、そう道が道に向かって声を上げたんなら、それを聞き取れるのは、俺の耳しかないぞ、だって、魚は女の爪先を銜える夢に浸り込んで、その冷たい血の匂いぷんぷんの目も耳もダラダラと溶けてるみたいじゃないか。でもみたいなら、溶けてもないかな、溶け掛けの目と耳で、胞衣そっくりに、なら胞衣なんだ、そのそこへ、目を凝らして知らない女が見付からないなら、女は他の何処で死ねるだろう眠り込む己の産んだ幼子を真似て真似きれないみたいに、って声を上げられるのは俺の他にないさ、だって道の声を聞き取って俺の耳はもう俺の声と繋がれるんだ、何の障りの有るもんか。って、有るんだな、女のどろりと、死ねない魚の目を真似るみたいな何処までも脹れてそうな目が。で俺の声は掠れて、夢に震える魚の譫言みたいで、でも却ってそんな声なんで、飛び跳ねる蛙の足を見付けて嬉しがる蛙の足みたいに撥ねる水に絡むのは、その声を吸い取る女の片足で、さっきまで刃に乗ってたって分かる死んだ海の匂いぷんぷんの。なら、その赤白い足首でも掴んだら、って、声だけじゃ掴めないんだよな、それともそれを掴める蛙の手がきっと生

えてるにしてもどうにも胞衣の下で潰れて、それともそれって魚の手かも知れないぞって、魚の夢の中になら、そんな手も幾らも水から自ら生えて出ても女の足には届きそうになく、それで却ってそれらが幼そうにおずおずと女の目を取り囲んで、その目を水に溶かして仕舞うみたいなら、それを嬉しがる跳ねる蛙にでも成りたげな水ばかりがまた、道の交わる辺りに撒かれ続けて、そうしててそこから時が産まれるみたいに、時が産んだに違いないんだよって言いたげな小さな透けた卵が一つ浮いて出たのを、落ちる処をずっと探してたみたいな雷が見付けるなら、それって蛙の見る夢の雷なんだなって、また、産まれた時からずっと尾っぽなんて知らないって言いたげな蛙の姿に帰れたかな。って、何が。ああそれは、女とその男が、互いを知らない儘ぴたり時を合わせて、その蛙の姿に一つに帰れたなら、その小さな卵も孵るのを嬉しがれそうだよな、なんて甘くないなら切りもなく苦い夢に浸る魚の割かれた腹に溜まる水の底に映る、知らない死んだ女を捜して飛び回る鳥みたいな、それとも翼を生やして嬉しそうなら魚みたいな俺の姿なら、蛙の一口にするりと啜られそうで。って、見下ろせるのは、ただどろりと女の冷たい血に満ちて何処までも脹れてそうな目に違いなくて、ならそれって、この身を賭けた俺が確と女を見付けたのと同じなんじゃないか、って、翼を生やした夢に浸ってる知らない男の心を見透かす女の、そっと歩み去りそうに向こうを向いて、赤白い足の裏を見せて、水か

ら魚の次次に丸く尖った顔を出すみたいに続く刃の上を渡る姿は、直ぐ先の息絶えて却って荒く波立つ青黒い海へ、今にも転げるように落ちて行きそうで。今にも？なんて言える時なんて有ったっけ、だろ？蛙の姿に帰っちまってるんじゃね。それとも、時って蛙だったとか、卵の孵るに帰りながらにだけに、とかね。はっ、良いよ、そんな分かり易過ぎる嘘。でだね、そんな嘘の分かり易過ぎなんて掃き清めようってのか、道の交わる辺りに周りから魚が湧くように寄って来て、水の湧くみたいに盛り上がれば、水そっくりにどの魚も透き通って、死んだ女の口は何よりそんな魚が好きに決まっててね、それらをゴロゴロ喉へ流し込んで、そりゃそんな女なら子供を産むに決まってるさ、孕んだばかりでもまっしぐらに、って、こっちは蛙の目でのんびり眺めてると、女は、女より大きな体の酷く熱い血の滾ってそうな丸丸と赤くて青い産んだ幼子を一つ、時を置かず石が石を喰うみたいにガツガツ喰って、その骨だけをぺって吐き捨てて、でも何時もながらに喰い残して仕舞うつるりとした開かなかった目が骨の色よりぽつんと白く二つ、水の中をよちよち漂うみたいに目障りで、その女の苛苛とした尖ってて死ねる筈もなさそうな目がまたそれを貪りたい儘に、その漂う小さな目の幼さを二つながらに突き刺したいかで。なら突き刺して貰わないとね、だってそれ、その突き刺し突き刺されるのって、そのあどけなさったら、蛙の姿そっくりで、そっくりなら蛙の姿で、蛙の卵の孵ってその孵る卵の帰れ

る処をそっとウロウロ結んだ口先で柔らかく弄ってる初めから尾っぽの無い蛙の足掻きみたいに、さも卵に閉じ込められた儘に卵を産み続ける振りの、そんな。また良いよ、そんな分かり易過ぎる嘘も、あどけなさまで加わって、だってそう遣って、道は道道、道と交わり続けて来たんだよ、清かに清かに。ならそんなの、道じゃない。交わりが交わり続けるんだね、ってしか言えないみたいな、そんなそれへ帰ろうって蛙かな、その己の姿を時に産ませるみたいに水から孵す卵の振りで。ああ、その卵の形の、はっきり見えるよ、時に溶けた水より儚げな、あどけなさ。あどけなさって、それだったんだね。それで女は死んだんだ、死んでられるんだ、生きられもせず死ねもせず。なら、死んだって何？知らない。それ声なんだっ、「死んだって何？知らない！」って、ほんの瞬きみたいな、砂粒程の泡の直ぐ消えたくて素速く音もなく爆ぜたと見える。短過ぎてそれより細切れに出来なくて必ず一つの。で、ここはそんな爆ぜた泡ばかりで、それもどれも「死んだって何？知らない！」とは必ず違う、やはりそれより細切れに出来ない一つの事をあれこれと、そのそれぞれに違う声音で言い立ててるみたいなら、そんな一つ一つが数知れず、何処へ拡がりもせず、ここでばかりに消えもせず積み上がりも重ね合わさりもせず。で、そんなの、透けた卵のゆらゆらした形に成るしかないよって、そうそれを蛙の目は見たいんだろうけど、そう旨くは事は運ばないねって声だけが、ここの何処にも見付

からない耐え難さに、蛙の目は捩れて捻切られて、で、目の形の跡形もなくなれば、それが卵だろうね、死んだ、って、何だか知ってる。だって、死んだ、ってその卵だものね、違うかな。違うか違わないかなんて知らない、どうだって。だって、そうしかないもんね、それ。で、そんなそれって成ったら、それはぶくぶく泡を噴くみたいに殖えて殖えて、態態あの夜の凝っと透ける儘で変わらない抜けた底から呼ばれたに違いない器の形をした硬い凪に掬われては撤かれて行く先は、粘粘と暗くて、その暗さがまた暗さを粘らせて、その粘粘を餅でも搗くみたいに、長い答そっくりの細く撓る死んだのを悦んでそうな女の体が叩き付けられる音に群がるのが、飢えて痩せ細ってもう腹なんて切り捨てたかに無くした口も無い小魚ばかりなら、蛙の、やっと形を現したごつごつと野太い尾っぽが振り回され、その女の味の染みたような音と小魚の群れの影を心行くまで混ぜ返し、それで益益硬く勢いを増す尾っぽは、それだけで女の体と絡んで、粘粘と暗い中へ切れて呑まれて溶け果てれば、その奥を掠める、数え切れなくとも一つ限りの事しか言えない声は、途絶えない空耳のように、ちびちびと禿びるみたいで。で、その一つ限りは、「死んだって何？知らない！」の逆様が言われてるんだって、きっと女の耳は、己の身の立てる答そっくりの音の下に、それだけはずっと知ってたかに聞き取ってるに違いなくて、だってそれって、その儘それが、知らない死んだ女の姿でないなら、初めからあの夜

も無かったって事にされちまいそうで。つまり、そうなら、こっちが逆様に、血も逆巻かせるしかないかに。でも女の姿なんて影も無いよね、きっとその逆様も短過ぎるんだよ、それできっと何の姿も裏返しに一つに消して。その一つなら、舌でも出せば、ぺろりと一啜りとか。でもそれ、誰の舌かな、こっちから出してるなら男の舌、とは見せ掛けで、でも知らない死んだ女のでもないに違いないなら、知らなくもない死んでるでもない女でもない、そんな…、ああ、そんなものなら俺は、ぺろぺろ舐めてしゃぶってられるし、って、思ってうっかり啜ってるのは、間違いなく死んだ水で、その儘その水へ身を滑り込ませるその大きく開いた口は、蛙を呑む女を呑んで、腹は脹れて、そうして水に沈んで直ぐに浮かぶなら、その仰向けの身を嬉しがる幼子のはしゃぐ姿かな。違うよね、だって、そんなの卵から産まれたに決まってるもの。知らなくもない死んでるでもない女でもないは、卵からだって産まれないに決まってるさ。なら水に沈みも浮かびもせず、ならきっと水なんて丸ごと呑んで、その死んだんだって呑んで、で何が生き返るもないなら、何も死んでなかったかも知れないぞって、知らん顔で決め付けたって何も起こらなさそうで。で何？って思えるなら、それ、蛙そっくりなら蛙の、開くだけ開いた平べったくヒクヒク震える赤くて青い口の、そこに動けずに、その口の中の口を己で口の中の口から刃を吐くようにして切り開いて厚みをぐりぐりと取り戻すしかないかに、斜めにゆっく

り回るように傾いて、逆様に逆様に、って、夜のこっそり隠してた抜けてなかった底を擦れる音でも真似た声を上げたそうに。でも何も言える訳ない、だってもうずっと逆様だものアハハ。声の逆様って、どんなだっけ。って見渡して見付かるなら、呑まれちまった死んだ水しかなかろうね海のか、それでもそれ声なのかな。なんて疑い掛けたのが拙かったか、開くだけ開いた口は、開くだけよりもっと開いて、ならそれ裏返ってるとか、なんて考える暇もなく、赤くも青くもなくなって、ならきっと夜の底みたいに透けてただ暗い穴が、分厚過ぎて激しく身を捩るしかなさそうに、でも、なさそうにって事は、少しも捩れてない儘に、ただその暗さの激しさに酷く怒ってるみたいに。それでまた愈愈、分厚さを増すみたいに。その必ず真ん中だけなら、糸でも引くみたいに、すうっと真っ直ぐに先へ進める。何がって、そのそんなものが。で、そんなそれは拡がって行こうね、知らない死んだ女と聞き取れた声の味を、包み取るように。その声の味は逃げて行くけど、それでまたそれを包み取ろうと追えるなら、それで構わないよね。そうしてまた拡がって行けるなら、味なんてどれも同じ、って事は、味なんて消せてて、ならその声の身を晒す知らない死んだ女の生の息の味を吸えてるに違いなくて。でもやっぱり味なんて消えてて、ならその息を吐く女の唇へだって、こっちの息を吐き掛けられそうに。でもそんなのまるで違う。だって、さっき嗤ったよね、ずっと逆様だって。そうか、分かったぞ、

まるで違う、って事だよ。アハハ、って嗤い直すしかないけど、でも、そのまるで違うって、そのせいで、どんなに透けた暗い穴も、開くだけよりもっと開くよりもっとどうにかなるなら、初めから開きもせず閉じた儘の奥のきっと清かに明るい暗がりへと、切り開かれた身と身を交わらせるみたいに身は透けて拡がり込んでて、そこでなら死んだ海も青黒く見下ろせるに違いないって見下ろしても、破れた胞衣を敷いた赤白い骨ばかりが息でもしてるみたいに触れたり離れたりしながら並んでる、その内の必ずそれでなくちゃならない一際くすんだ一つに、舌を這わせて味を確かめるなら、確かにそれは、口の中の口を切り開く口の中から吐かれる刃の形に違いないにしても、その刃に切り開かれようとされるのは口の中とは逆様の、そうか、それで女はどうしたって、蛙の皮から腸まで丸ごと裏返すようにその逆様を、その己の身を波打たせながらに突き抜けて、それで答そっくりの細く長いのを、奢り立てるかに何も知らない先へ向けて晒しては、骨ならどれとも見境なく、ゆらゆら震える声を眠るように交わし合い、（二〇一八年四月二十二日）

（そっちがどっちか…）

そっちがどっちか知ってるか、俺は知ってるぞ、お前が知ってるからには。でも俺がそう知ってると、お前が知ってるかだ。」「お前が俺の何を知ってようと、俺は何時も通りの脚なら、行って帰るだけだ、そっちもどっちも有るもんか。藪の向こうはそろそろお囃子を始めようかって賑わってるし。それとも、凍った土の弾けて連なる甘い這うような音の匂いが、どっちへとも流れようもなく淀んでるだけかな、上っ面だけなら。」「知らんだろうが、そう遣って、お前は俺を騙してるぞ。俺は、さっきから見てるんだ、お前の足が、そっちへ向いてるのを、うっかりお前の後を付けさせられて。確かに、そっちもどっちもないってんなら俺を騙してるとも分かってなくて、なので却って騙し果せてるんだ。何で、騙されてる俺が、それを分かるか分かるか。」「さあ、俺に騙されたいからかな。なら独りで騙されてろよ、それを知らない俺に構ったってどうにもならんだろ。」「ああ、そうしてるさ、で、お前も、そうしてるんだぞ。」「どうしてるって？」「それだけが、俺には分からなくて、分からん頭の何処かに知らない血の滲んで溜まるのでも見たくなってて。きっとそれは、俺にはどうにも触れようのない、お前の頭の中だけで知れる事だからだろうな。なのでお前も俺も、どっちだろうと、こうやって時が経つ程、どうにもそっちしかなくて。行くってんなら海へは行けるけど滑るみたいに、帰ってるなら、帰る処はないな。」「どっちだろうと帰れるだろ、決まってるさ、海へ行ったら帰りなら、

藪を抜ければお囃子の始まりそうなのは空耳で、甘い音の匂いも、山の森に当たって縮れる暗がりに迷い込んだような乾いた風の消え入るのに巻かれて消されたか、でないんなら音の匂いは、その甘さを一筋に上っ面のそのまた上っ面に這わせて延ばして頭も尾も隠した蛇に似るんなら空耳のお囃子ごと夜の内に山を越えようってかな、にしても、谷の隈に湧く儘に重く沈んで緩く戦ぐようにも動かない風の縁に浮く湿っぽい土の擦れ合う火の匂うような音一つなら、灯でも点すみたいに残しそうな、狭まるばかりの谷は、暗過ぎるんで。」「この先の谷の隈にお前の塒の有るのは知ってるけどな、土を弄るなら見晴らしの利く坂の縁で濡れ衣を着て、そいつなら体を冷やして海の便りでも待ってようさ、でもそっちは、お前が足を向けてるそっちじゃない、だって、俺がそう知ってるからさ。」「どう知ってるって？」「何を捨て置いたって、俺を殺さなくちゃいけないって。お前はそれでもう、どっちが谷の隈か、キョロキョロするのも甘い音の漂う匂いに添うのも煩わしくて、腹を空かした儘、どう遣ったって俺を殺せそうなそっちばかりにずんずん進んでて、俺がまたうっかり姿を現すのを、うんざり顔と裏腹に心待ちにしてるって訳だな、火の匂うような一つ切りの音にさえ背を向けられた勢いに、こっそり酔うかに嬉しげに。」「お前の姿なりんて疾っくに知れてるさ、現われるも現われないもなく。そんなもんだろ、お前って。そうと知れてるんで、そんなお前だって、俺に取っ付いても来られるん

だろうよ。」「何を知れてるって？　お前は、俺がお前を喰い殺そうとしてる事を知ってるだけだ、だろ。例え俺がお前の前に、俺が口を利かなくてもお前に見える裸の姿を晒してたって、お前には、そっちの、俺を殺せるまだその先ばかりしか、お前は見ようとしないさ。それで俺の姿を知ってる積もりなだけで、そんなのきっと何処かしら明るそうな暗がりだろうよ、何の音の匂いも嘘だって、暗がりを蝕む明るみみたいにせせら笑ってそうな。もし俺の声を聞こうともしないなら、どっちを向いても温い潮風が眠そうに黙って薄闇を撫でるしかなかろうな。でも、そうでなくちゃな、そうさ、そうでなくちゃ全く。それで俺はお前を喰い殺したくて、なので黙ってられなくて、カチカチ動かし続けるしかない乾いた口で、干涸らびて強張った舌をお前の疲れて濃い血にじっとり浸したくて、もうお前の木みたいに硬い右脚を、背を丸めて嚙って俺の奥歯にお前の肉の筋はぎしぎし絡んで。嚙るぞ、って、脅してからにしようと思ってた筈が、忘れてたんだな。」「そんな、お前独りで騙されてる俺の脚なら呉れてお遣るさ。却って身軽で、お前のぐだぐだ絡むのからも身を躱せそうだし。でもお前はきっと、殺るか殺られるかに拘るしか出来なくて、そのケリが付かなきゃ、ずっとこんななのは変わらんし、そうしかないならそうしかないようにするしかなくて、で構わんが。」「ふん、分かってたさ、そう来るってな、何時ものの言い草だ、そんな右脚を持ち歩いてたみたいにな。なのでそんな右脚な

んてすっかり囓った事にして硬い儘呑み込んじまって、もう左脚をずぶりと囓ってるって訳だな、血も肉もじっくり味わえなかったんで口も舌も乾いた儘さ、でそれも直に平らげちまえば、また右脚が、態と間が悪いみたいに出て来るのも分かってるぞ。なので先回りして、そっちにも翳り付けば、お前が目にも止まらない速さでそっちへ行こうってのを、俺は益益背を丸めて後押ししてるみたいで。でもその、みたいで、ってのが嫌なんだ。囓ってるのも、囓ってるみたいなだけになっちまって、なら囓ってなくて、お前の重ったるい言い草をむしゃむしゃ口に含んで唾で混ぜ返してるだけみたいで、の、みたいで、は、もう口の中をゴワゴワさせちまってて、そのゴワゴワは、どうにも吐き出せないなら呑み込むしかないかってぐずぐずしてれば、腹は空いてる程空っぽな儘すっかり脹れて、お前がそっちへ俺から逃げてる振りでまたずんずん進むのに付いて行けなくなってて。でもお前だって、余ってるみたいに脚を右左次次こっちへ放り出すのを已められないんだろ、なので、その脚をゴロゴロ転がし次の脚で踏み付けてれば、ぼんやりしてたって何も見失いは出来なくて。何も見失えないって、水のたっぷり溜まってさざめく匂いはもう嗅いでるって事かな、ぼんやり頭を捻って揺らすような程にも、そんなそっちならさも揺るぎなく、楽しげにか、楽しくもないなら楽しさなんて要らないかに。そうさ、楽しさなんて要らなくて、それを楽しげに蹴飛ばしてるお前の、影を跳ね踊らせてるみ

たいな姿が、俺は嫌なんだ。お前の脚なんて、そんな影だったんだって思い知らされて、それでそんな影に俺は跳ね踊らされるばかりで。でもそんな俺の姿なんて無かろうな。俺の腹が空っぽみたいに、空っぽな俺の腹に俺の姿は呑まれて熟されちまったらしいかに。だってお前にそれが見えないんじゃな。って事は、俺はお前をすっかり見失ってて、お前の嗅いでた水の匂いを探して、そっちがどっちかも知れない日は暮れてもないのに真っ暗な中を、水を欲しがってる乾いた鈍（のろ）い裸の風みたいに滑って滑って、でもそんな風の姿なら俺は俺だけで俺の姿を見て取れてそうで、ならその風の姿に脚を生やすのも思いの儘で。でもそれでその脚が風の姿を消して脚ばかりなら、それって誰の何の脚？ってその誰かか何かに尋ねてるばかりになって、その分からなさにでも齧り付けるなら、それが腹を満たせる喰える脚だとは嘘でも分かりそうな、でもどうかな。」「‥。さてと、鳴き声が煩いけど、煩いばかりが煩いんじゃ、何だか分かりようもない。それとも火の匂うような音一つは、耳の底に残って、その音がその音を叩いて、いや違う、それって、また女の目が突かれ潰されて剝り貫かれる音だよ、でもその音がその音を叩いてるのは変わりない、その音を剝り貫いて裏返して乾すみたいに。つまり音しかないんだな。それでそれは、叩く音じゃなく、途切れずに高くなったり低くなったりする鳴き声みたいで、でないんなら、女は丸めて袋詰めの逆さ吊りにされ、筈で決められた数だけ打

たれて、その女の口の塞がれて声の出せない替わりにか、それを覗いてる身内でもない女が、務めみたいに余所余所しく、己の体を己の体で打ってその体を鳴らす音が、森の外れの目立って葉の大きな木に止まって鳴いてなきゃいけないんで腹を空かしてなきゃいけないのを酷く怒って鳴いてる鳥の声に似てるかな。」「へっ、今更、俺を騙したくなったか。お前は耳なんか澄ましちゃ居いさ。やっと、そんなお前の生の脚を、それで俺は確と掴んでんだぞ、だってこの脚だけは、幾ら噛んでも口の中で弾けて暴れて、肉や筋どころか皮さえ食い破れないんで。それとも血も肉も筋も皮の中でドロドロに成っちまったのを毛穴から吸い出してしゃぶり尽くして、硬い皮だけが残って、そいつをもう疲れて言う事を聞かない口の中でどうにも扱いようがなくなってて。なら一先ず吐き出して、呉れて遣るから、これを噛めるようにも柔らかくするんだ、お前の脚だもんな、出来るだろ。残ったお前の片足は俺に繋がれて、次の脚なんて放り出せなくて、もう逃げられないぞお前。」「脚の皮も食い破れないって、へっ、女の顎か、そうか、お前、女だろ。鳴き声に聞こえたのは、お前がひーひー言いながら、喰えない皮を噛んでる歯の鳴らす音だな。ひーひーと混じってるもんだから巧く聞き取れなかったって事か。いいさ、そんな皮なら、放っちまえば、ゴロゴロ転がって鼠にさえ嫌われて熟れは海へ落ちるに決まってれば、海には魚の屍を食い尽くした海蛇しか棲んでなくて、さぞ喜ぶだろうよ、蛇は牝

で冬を越そうと孕んでて、人の脚の皮を喜んで喰えば、胎の児も陸を踏みたくて火照るような熱い脚が生えそうで。それからな、言っとくけど、お前が繋いでるのは、俺の脚じゃなく、森の外れの目立って葉の大きな木の崖へ剥き出しにされた硬い曲がった根っこだぞ。だってもう、俺はお前の声を聞くのも嫌になったんでな、喰うしか出来ない癖に碌に皮を喰い千切れも出来ない女なんて、血を吸い過ぎて丸丸と引っ繰り返って悶えてる虫みたいに体の何処もかも血腥くて鼻が曲がるぜ、うんざりさ、女だけでもうんざりな上に。口だけは何か噛んでりゃ臭くもないが、皮も吐いちまってるし。でだ、そう遣って、お前を騙して、さあ、お前の体と木の根っこを繋いで置いて逃げるとすれば、谷の塒は帰る処だから逃げられないし、なら、お前の言うそっちか、それとも、強く吹き付けて来る風の凍るように冷えて荒れ始めた海か。ああ、風の荒れるのは、海蛇が児を産みに浜まで上がって来るんだ、もう早いもんでそんな時なんだな、そんな海へ逃げられる筈もないか、いや海へなら何時でも逃げられるんで逃げたくなくて。なら、女のお前の体の血腥さから少しでも遠ざかれるんなら、どっちか知れるもなく、それで逃げられてるってしとこうか。で、だとして、そのそっちはまた、鳴き声が煩いばかりが煩くて、なら皮を噛む音じゃなかったんだし、鳥の声にも似てないなら、やっぱり、覗いてる女が、己の体を己の体で打ってその体を鳴らす音かな。って決めて済むなら済ましたいけど、それに

は、そんな女の姿を見付けるしかなくても見付からなくて。」「で俺は、崖っぷちの木の根っこに繋がれて、逆さ吊りにでもされて、血が上る程目が冴えて、お前の逃げるのを指を咥えて眺めてるってのか、成る程、そりゃ女だって見抜かれそうだ、って、隠してるんでもないんで見抜かれるもないんだけどな。いや、じゃお前は俺が女だって初めからは分かってなかったって事か。それより血腥いのは全くお前なんだよ、来る日も来る日も血腥いものを呑み込んでばかりじゃないか、それも血腥いとも確かめず知らん振りでだ、ったく質が悪い、なので何時でもそのお前の匂いなんて嗅ぎ当てられて、お前の後なんて真っ直ぐ追えるんだよ。然もお前はもう片足だぞ、何で逃げてられるなんて思えるかな。お前は、俺を間違いなく殺せるそっちへ、よたよたと向かってるだけさ。それには、俺に追われてなくちゃいけなくて、で追われてるにしても、そっちがそっちなら息も強く弾んでような。片足を引き摺る己の姿を、ここぞとばかり珍しがって撫でるみたいに、そうして力も湧いて、その力を味わうみたいに、けっ、忌忌しい。」「…んで、済まない女なんて出て来ないなら忘れちまえば済むだけで、やっと独りになれたは良いけど、夜が明けない限り谷へは戻れまいな、喰うの喰われるのに転がるばかりの暗がりってんじゃ、陽を頼らずには抜けられないので。いや違う、まだ陽も暮れてなくて、だって振り返れば海だけは、水を抜いたみたいに光ってて、その光りが水の替わりに水とは似ても似つ

かない形に波を打ってそうで。って見えるのは初めだけで、だって何故そう見えたかは、海蛇が、涙を溜めた目に海へ落ち掛かる陽をゆらゆら映して、己とは似ても似つかない逆さに跳ねる脚ばかり転げ出そうに目立つ丸丸としてなきゃいけない筈が何処か歪に捉え処なく棘棘した児を静かにそっと産んでて、その輝く姿を海と見誤ったと直ぐに分かるからで、海は明るいも暗いもなく、ただ風の酷く荒れてる音だけを、空よりもっとずっと遠く高くからかに鳴らしてて。でも、煩いのは風が鳴く訳でもないんだ、ならまた体を鳴らす女へ戻るしかないって事か、覗く女が出て来ないなら、覗かれてる女を俺が覗くしかなさそうにしても、袋は吊された儘ズタズタでもう空っぽなら、その女は筈で打たれるだけ打たれて、間違ったかに死んでないんなら、生き延びるには、己の傷だらけの身を呪いたくもそれを嗤う間もなく、袋みたいにズタズタに成りたいかにさっさと孕むしかなく、でもう孕んでて、何処で産もうか探してそうで。でも何処でって、そんなの谷の隈の、そのまた隈の隈とも知れない辺りでに決まってるさ、吊されてたのは、女はその隈に産み落とされてずっとそこに隠されてたに違いなくて、そこへ戻るしかなくて。でも違うかも知れない、でも違つてるなら、必ず違いないって事にしなくちゃいけないに違いないに違いないかな。それであいつは、そうかあいつが孕ませたんだ背を丸めてたんでそうじゃないかと思ってたぜ、土を弄って坂の縁で、出来る事なんて何もないなんて

虚ろな目を虚ろへ瞠らせて海からの便りを待ってる振りしか出来ないんだな嘘でも。まるで、卵に恋い焦がれてるのを見せびらかしたいかに卵色に染まりたそうな目じゃないか有り余ってる嘘でも欲しがってるみたいに。は、それとして、陽が暮れてようといまいと、谷へは戻れないに変わりはない、だって煩い鳴き声が、煩過ぎてもう何が鳴くか知れないせいか、崩れる程積み上がる壁みたいに塞がって、それに背を向けるしかないなら、脚は、そっちへしか向かわない。クソ、あいつの言ってた、そっちに違いないじゃないか。そんなに殺されたいなら殺して遣ろうさ、って、どっちを向いても独りじゃ、空回りするしかないな。いや、崖から根刮ぎ剥がした木を引き摺る儘にひーひー言ってそうなお前の、でもどんな軟らかい土へも鋭く突き刺さるように静かで確かな足音がひたひたと、煩い鳴き声の壁に小さな穴を開けるかに、一つ一つ少しずつ形を変えて聞こえて来るような、俺はまだ何を殺せる力もない、だって嫌でも耳を澄ませて仕舞うからな、それも、俺よりもっとずっと殺しに長けた奴らのその力を誇るかの轟くような囁き声でも見付けようと、そんな奴らに付け狙われてるってその囁きに苛まれるしかなくて。でもそんなの聞こえる筈なくて、でまた欹てて仕舞う耳は尖って、そっちへ引っ張られそうに痛いなら、そこでもし行き成り訳の分からない奴に捻り潰されるみたいに殺されたって、痛みばかり抱いてる儘の屍じゃ、俺はこんな訳の分からない殺され方をする為にこれ

まで生きて来たかって喚くみたいに黙るしかなさそうで。で、なら、嫌でも独りじゃないって分かるにしても、そっちへしか向かわない脚も、お前の足音を嫌って、登りたい木でも水の匂いそうな辺りに探してて、で見付かるのは、逆さの、逆さなからにはさも腐ってるかに中がすっかり虚ろな木で、それが、土の下に埋もれて動かない水にじっとり沈んでて、その真っ直ぐ降りて行く長く途切れない洞の刺刺した皮に膚を擦り付けて下へ下へ潜って水底を目指すみたいに木に登ってるんだけど、脚は真上へ尖ってるんじゃ滑るばかりなんだな、片脚かどうかも分からずに。」「追い付くなんて訳ない、そんなお前じゃな。それより、海蛇の産んだのはな、あれは脚なんて生えてなくて風の色をして牝親そっくりだったぞ。疾っくに俺が一呑みにしちまったがな、俺の喉にぴったりの大きさだったさ思ってた通りに。でそいつ、女の俺の腹の中で暫く暴れてて、今はすっかり硬い卵に収まって、石みたいに凝っと丸まってて、脚を生やす夢でも見てられるんなら、俺と同じで、きっともう殺されたがってるって事かな。で、凝っと石みたいなのは、その生やした脚で何処へ行けるか行きたいか、その隈無く分かってる事を俺に知らせたくて、黙ってる儘みたいでもずっとそれを喚いてるよ。でも、光りに就いてだけは、黙るより喚くよりそれは重過ぎるみたいで何も言えてなくて、それって、何一つ言えてないのと同じで。それとも俺の耳が光りに就いての遺り取りだけは聞き取れないとかかな。でそいつ、

石みたいだったなんて嘘みたいに、喚けば喚く程、黙って暗く溶けたいかで、それで女の俺の腹の底も抜けそうで、俺がそいつを産み直しでもしなけりゃ何処かへ流れちまいそうにしろ、それでもやっぱり、光りの事を何も言えないのが災いしてか、どうにもならないみたいなんだけど、そう遣って、産もうとしてるかも知れない俺の赤い涙目に真下に見下ろされるその姿は、ぽつんと一つ小さくても、その形を角角しく動かして周りの闇を蹴って闇の血を吸いながら、風と卵の色は同じなんだ決まってたさ、って喚いてそうに、その色かに光ってて、で、なら、と、慌てて耳を澄ますにしても、やっぱり光りに就いては俺には何も聞こえないなら、その聞こえない向こうへ、そいつはそっちで産まれるのを分かってたみたいに、独りで自ら産まれ出ようとでもしてて。いいさ、そうしたいならそうさせるさ、って、思えば直ぐ、俺はまたそいつを、首をどう捻曲げてでも一呑みにするしかなくて。でもどうやらそれで、俺の女の腹の底はすっかり破れて抜けちまったらしく、そいつはきっと、割れ掛けた卵に籠もる身を引き摺る、そこから蛇の首だけぬるりと突き上げたみたいな姿で、俺には届かなくてもお前には届きそうな光りの、小さな器の底に蛇の鱗の幾片か、重ねたように、その擦れる音さえ聞こえて来そうな程に薄っすら溜まった中へ、おずおずと浸り込んで行くんだけど、それって、頭が重くて、卵の逆さの底の虚ろは上向きにゆらゆらしながらも一つに凝っと集まって、卵の殻を内から薄

青い光りを滲ませて透かすなら、それって、海と空よりもっとずっと遠くの色を映してるんじゃないかって、ああ、なら、それって目なんだ、違いない、目が何だか誰も知らない頃の儘かの。その目に映るものを、下を向いた蛇の首は、薄く溜まる光りに突き刺さって、その下を流れる、谷からの水へでも伝えようってのかな。でも初めから分かり切ってたみたいに何が伝わるもなく、蛇の身は自らを腐らせて、卵の殻の割れ目から一溜まりもなく一息に流れて落ちれば、割れ目は嬉しそうに卵を二つに裂いて、その裂け目は直ぐに塞がって、縦に割れて離れた逆さの卵の形で真上を向く目二つは、それより降りられない木の枝先まで登り切って身動き取れないお前の狭苦しそうな逆さの身を、間に挟み込むようにしてて。」「ああ、それで分かったぞ、お前が何を言いたいか。俺の登り切った逆さの木が、逆さの蛇の身だったって事だろ。俺は蛇の尻の穴から身を滑らせて、吐き戻されるみたいに間近に蛇に睨まれる処まで、降りて登って来たって訳か。そうなら確かに逃げようもないだろうけど、だからって何だ、そこで俺は蛇に呑まれ直して、また蛇の尻の穴へ下って昇って行くだけで。いや蛇じゃなくても、それ木だろうと他の何だろうと、ただ俺の逆さの身を通す管が繋がってれば済みそうで。」「そう先走るなよ。蛇はお前を呑みも吐きもしないで、お前はそこで、お前を挟み撃ちにした二つの目に、射殺されるのさ。」「構わないね、それで、俺はお前から逃げ果せる訳だろ。困るのはお前さ。さ

あ、お前それで誰に殺されるんだよ。」「お前を射殺した目二つを引っこ抜いて、それを、目を刳り貫かれた孕み女の目の穴へ嵌め込むのさ。女は、児を産む痛みに、目の前の俺の女の姿をカッと見詰めて、そこに女なんて居ちゃいけないみたいに俺の首を捻切ろうさ、ああその女の血走った目が俺の目に浮かぶぞ。」「先走ってるのはお前だろ。産む為に谷の隈の隈に隠されてる女を、お前に見付け出せるもんか。」「だからその為に先ず、目はお前を射殺すのさ。それでその目を女を覗いてたお前の目の届いてた先に遣れば、何処に隠れてようと女は捜し当てられるしかないだろ。」「そうか、なら、そう遣って手の内を明かすお前の愚かさを逆手に取って、蛇の目に射られないよう、目を逸らして、さっさと独りで蛇の尻の穴へ戻って遣ろう。」「ハハ、手の内を明かしてるのはお前なんだよ、お前はもう蛇の目に行く手を塞がれてるぞ、殺される他になさそうに、だろ？」「そんな目は、掴み取って捻切って刳り貫くだけさ。女の目を刳り貫いたのは俺じゃないけど、俺はそれが刳り貫かれるのを、繰り返し見て来て遣り方は分かってるんだ。俺の畤なんて、何時もそんなさ。女の目なんて、刳り貫かれる為に有るみたいなもんで。…いや待てよ、俺はすっかり話しに乗せられてないか。孕み女なんて俺と何の係わりが有るんだよ。だって、女を覗くのは女でなくちゃいけないに決まってるじゃないか。俺はただ、鳴き声が何で煩いか突き止められたらそれで良い、の、良いだって、何が良いか、知れてもな

い。それが煩過ぎて、身は押し流されてても、あいつに追われてる儘で、もうそっちへ行くだけだし。それともそんな事でもないかも知れない。だって俺には、擦り切れたみたいに何時からか片足すらなくて、行く足が無いなら、そっちだって無いも同じで。木の洞に長く留まり過ぎたからか、木が蛇だかどうだか知れないが、俺の身が、形ばかりはどうやらすっかり蛇そっくりで。いや、なら遣りようは有るぞ、だって、枝を伸ばす木の形に身を嵌め込めば、その木が幾ら蛇だって形ばかりには木で、筈のようにその身を振るうなら逆さその枝枝は音を立てて撓って、蛇の木を沈ませてる土に埋もれた水を逆巻かせ、その水が土の重みを背負いながら渦を巻いて、その中に渦は土の重みの儘の目を嫌でも作ろうさ。ああその目を、児を産み掛けてる女の刳り貫かれた目に嵌め込めないかなって思えば、木の形なんて直ぐに脱いだ蛇の身の俺は、もうそれを銜えて、何処へ。」「ふん、蛇が蛇の目を銜えて何処へも有るか。俺を騙す振りも、もうそれ位にしとけよ。お前は木でも蛇でもない、だって俺の身はもう木の洞に逆さに突っ込んでて、身動き取れないじゃないか。お前の騙す振りに騙されたせいだ、って、今分かっても、お前を、お前の知りたいその何処へかへ逃がすだけで。」「ほぉ、そうなのか、なら、お前を騙す振りに騙されたお前に騙される振りで、俺は何処へも行けるって訳だな、お前を騙す振りに騙されてるかは、さも知らない振りで。なら、お前を騙すみたいに俺は俺を騙せてそうで、そう

とも知れない儘に。それってもう、騙すも騙されるもないんじゃないか、って、そう騙される振りでもして、何が良いか知れない儘に、ま、それで良いとして。いや違うぞ、良いと知れない良いが良いな筈ないさ、だって俺は、お前に追われてお前を殺さなくちゃならないのは変わってない、それを変えたいって思うしかないんならな、良いも悪いもなしに。それは、お前が女なんだって知って仕舞ったからで、俺にはどうしても、お前じゃないお前に似ても似つかない何時もしれっとして木の根っこでも味が出るまでむしゃむしゃ噛んでそうな女にでも行き会ってどうかしないかされない限り、それともどうにもならなくても行き会って行き違うだけで構わないかも知れないが、お前を殺すにもどうして殺すか何も思い浮かべられないに違いない。殺されたいにしろ殺されたいそれを殺したいにしろ、女共の行き着ける処なんて、どん詰まりが好きなばかりにどん詰まりでしかない空っぽで決まってるからな。そこへ行き着けないようじゃ、女の形はしてても、獣の生肉を喰らうばかりで、その獣と同じに孰れ獣に肉を喰われて、骨だけに成って、その骨が集まってまた女の形に、男を欲しがる姿を見せようと直ぐにも組み重なって暴れ出しそうで、ならきっと痩せ細って喰われもしないのに喰われたい男も寄って来そうで、それで女に成って、って言っても己の何が女なのか探してるだけなので女なんだけど、でも、なのでそれも形だけで、また、獣と同じに獣の肉を喰うだけで。俺にはそんなじゃな

い、ちゃんと行き着く処へ必ず行き着ける女、つまりは男と二人で手際良くしれっと木の根っこでも引き裂くみたいに女を殺せる、ずっと当たり前に己をどん詰まりの空っぽにも見紛う肉の塊と思えてへっちゃらな女で居られる女が要るんだ、の女って、他に見当たる筈もないなら、目を刳り貫かれた孕み女に決まってて、女がそうされたがってるに違いないなら、それとも俺にそうされるんでなきゃ女なんて見失われて俺は再び女を見付けられないに違いないなら、俺はもうそのさもこっちの言いなりな女を逆さ吊りにして思い切り笞を振るえてないか、俺こそその女の言いなりかに、でもそれ何の笞なんだよ、笞の握り方だって知らないぞ、って思い直して振るわれる笞みたいにぐるりと見回せば、見回してる筈の俺が逆さ吊りで、そうかそれなら女を見失うも無いな、で重そうな音を立てて望んでた通りかに振り回されてて、今にも噴き出しそうにぶりぶり音でも立てて死に損なってるような児を立て続けに産みそうな丸い上にも丸く尖った腹を晒した女が、脱げたばかりのまだ張りのある蛇の皮に浜の濡れた砂をぎしぎし詰めて縫い合わせて硬い笞にしたみたいなのを掴んで撓らせて、俺の尻を傷だらけの血だらけにして嬉しそうに打ち据えてるんだけど、女でもない俺がそんな事されたってどうも成らないって、女に分からせるにはどうしたら良いだろうって考えてれば痛くもないし血も上らず、俺は女に分からないように、そっと蛇みたいにでも蛇なんかよりずっと分厚く重い俺の皮を易

易と抜け出して、その逆さ吊りの笞打たれる程に傷口も血も固まって硬くなる脱いだ皮の震えてる直ぐ上で、身を小さく丸めて隠してると、いや隠してる積もりなだけで、女は、俺の脱いだ皮を益益強く打つんだけど、その上で尖って丸くなってそれを見下ろしてる俺の姿を、顔を上へ向けて笑い掛けるかに睨んでて、刳り貫かれた儘の目で。それで俺は何をしなくちゃいけないか、はっきり分かった、忘れようったって忘れられない。んだけど、はっきり分かっただけ、それが何だか分からなくなって、でもはっきりしてる儘の、そのはっきりに目を凝らすと、それははっきり真下へ尖って、その逆さ吊りの腕と脚を生やす儘の傷塗れの俺の脱いだ皮の真下で、お前は背を丸め過ぎて尖らせて俯いて疲れた脚を畳んで蹲って、己が、木の洞に突っ込まれてるんじゃないんなら、それとも突っ込まれた儘にその木ごと根刮ぎにされて丸められてるんでもないんなら、どうやら、俺を追って何でもガリガリ齧りたがるだけの女の皮を被った、海蛇の産んだ二つ限りの卵なんだって、己を思い出したか思い出せそうか思い出そうか躊躇ってるかで、だって脚が生えてるんじゃその姿を卵だとも中中踏ん切れないよな、で、潮の匂いを嗅ぎ付けられでもして鼠に齧りに来られたらどうしようって、びくびくしてそうで、なら俺は、笞で打たれ過ぎて殆ど腕も脚も分からない尖った錐みたいな形の逆さ吊りの俺の皮の足首を捻切れば、それが真っ直ぐお前の日焼けした首へ刺さって、さて、それで俺はお前を殺せ

るかどうかだが。って、そんな先走る事もなさそうかな、だって、顔は上を向いてるけど、女はお前がそこに動けずに居るのも、目を剜り貫かれた儘にしっかり見てるんなら、だってもう女は孕む儘で居るのも息を吐くのと同じに飽きたかに、胎のものを吐き出そうと、鳥みたいに頬を緊く歪ませ、口を粘粘した尻の穴そっくりに窄めて、それで、お前の被ってる女の皮へ、吐いたものがぶちまけられれば、そんな皮なんて色が褪せるみたいに剥がれて、きっと水みたいに脚まで溶けて、で、直ぐに俺は逆さな儘、その溶けた中から裸な姿を晒すしかない丸丸と大きな卵二つを、水の落ちるみたいに伸びる腕を下ろして絡ませて、その弾みにその二つを剜り貫かれた女の目へ一つずつぬるぬると嵌め込めば、って、これもまた、先走ってそうだな、って、分かってるはっきりに目をまた凝らすと、でもその凝らしてる目って、どうやら、俺の目を後ろから刺し貫くみたいな女の目で、剜り貫かれた儘で、てな事だとしても、でもそれ、どんな目だろうって、それを逆さに覗き込む俺の目が、剜り貫かれた中へ転げ落ちそうなのを止めようと、俺は俺の目を確と掴み出そうとするんだけど、どっちの手も、女のお前に喰われて疾っくに無くしてたって今更に分かれば、その手に違いない手が、だってそれ女の腹の中でずっと揉み拉かれてたって分かるツンとした匂いがするもんな、それが、剜り貫かれた女の二つの目に、厚い膜か木の芽かそれとも翳ってただ艶ばかりのもののようにか生え始めて、剜り

貫かれた穴をぴたりと塞いで、そのこっちを向けたテカテカした掌に映るらしい俺の顔が、ぐりぐりした尻の穴そっくりで、それは俺が、俺の皮を脱ぐ時に、尻の穴だけ脱ぎ損なってそれを顔に被ってるからだって分かるにしても、もしそれを剥いたら、俺は顔ばかりかそこに丸くなって尖ってる俺の身が丸ごとお前を騙すだけのもんだったってバレそうで尻の穴で居るしかないなら、頼みは同じ尻の穴そっくりの女の口かな。で、女は胎のものを吐くか吐かないか、なんてやきもきしてるのはきっと俺だけで、だって女はもう、それが俺の掌かどうかなんて知りもせずぱちくりと目を生やし終えて、瞼なんて無いんだ、その目がぐにゃりと尖って嘴みたいに、お前の首の後ろにそっとでも刺さりそうなら、俺は、その嘴に似合いそうな鳥の声色を使って、お前に、お前が俺に殺されるにはどうすれば良いか、どうにでも言って聞かせられそうで。いや、俺の声色じゃ拙くて、だって殺す俺が出しゃばったんじゃお前は俺に打ち掛かって来るかも知れないからな、やっぱり女の嘴みたいに尖った目で、ちゃんと言って貰わないと、なんてうっかり凝っとしてると、俺の被ってた尻の穴が脱げて、それでそこに俺の姿がどんななのかは、それが女の目にどう映るかを当てにするしかないんだけど、そんなの女の目を微かに翳らせも出来ず何も映る訳なくて、何の姿もない儘また尻の穴から逆さ吊りの己の脱いだ皮へ戻るのもまどろっこしいなら、俺は女の目に引き寄せられるかに斜めに落ちる儘に自ずと女の

頭に被さって、その女の頭だけを、男の突き上がる尖った形に変えて。そうさ、そうすりゃ女は目を嘴みたいに尖らせなくたって、俺の男の尖った、その女の頭を音立てて振り立てれば、お前は蹲ってなんて居られなくて、だって女だもんな、膚は海蛇の卵の匂いをプンプンさせて、己がその卵かも知れないとは思いながら、その己をうっとりさせるような艶っぽい姿を何処かへ探しに、って言ったって、取り敢えずは逆さ吊りの俺の皮に縋り付くしかないんだけど、でもそれって、卵なんてどうだって良くて、ただ俺に縋るしか殺されようがないって思い定めでもしちまったからかな、そんな姿こそ艶っぽさの極みかな、なんてうっとりしながら。ああ、それなら、俺は女の尖った男の頭で、お前にはっきり言ってやるぜ、お前の死ねる処なら、俺の脱いだ皮の破れた尻の穴の奥しか無いってな。さあ、それをお前がどう聞くかだな、お前の耳には俺の声はお前を騙すとしか聞こえないんだろ、そう知れてて、お前が、いや違う、これは俺の声じゃない、女が頭から被ってる男の声、それとも、男の尖った形の女の声、そのどっちとも定まらずに揺れてるみたいなのが、お前の耳を、お前に何の疑いも抱かせずに、お前を騙せて仕舞えるに違いなくて、だってお前はもう俺の逆さの皮を脚の付け根まで攀じ登って、破れた尻の穴の中へ折るみたいに首を突っ込んで、捩れ昇る腸の匂いからして空っぽな筈のない暗がりを、その粘粘してるのを望むかに覗き込んでるじゃないか。その痩せて日焼けした

項へそっと女が息を吹き掛けるだけで、お前は背を押されるみたいに、俺の皮の中へ逆さに滑り込んで、その思いの外虚ろな闇の中ならお前は寛ぐかにすっかり卵二つの姿に成って身動き取れなくなっちまうかどうかなんて、お前の事だから知らんが、ただ卵だろうとなかろうと、お前の沈んで行き着けるのは、脱いだ皮の虚ろの底に開き掛けてる俺の潰れた目の穴しかないんだけど、そこで卵のお前が一つ一つ右左の俺の目へ嵌まって、俺の二つの目を開けて、逆さにこっちを見上げるなら、お前は、俺と女が絡み合って、いや違う、もう絡んでもなくて、俺と女は、男でも女でもあるずんぐり捩れて尖った上も下も見分けられない、だってどっちの顔も互いの肉に埋まってるからで、緊く抱き合うよりもっと一つなのを呆れる程喜び合って、細かく押し殺される笑い声を肉の隙間に捩込むかに頻りにしなしなと波打つ体で、そんなのが、俺の脱いだ皮の尻の破れた穴に嵌まり込もうかって、穴を圧して限り限り拡げて狭そうにぐりぐり刺さるように塞げば、閉じ込められたお前が息をしてられるのも、もうほんの一息吐く程しかなさそうで、でもその極僅かな時でも卵な限りならそれを幾らでも引き延ばせて卵の色の時を薄っすらまた更に薄っすらと、途切れ途切れの死に際の息を吐くかに楽しめそうで。なんてのんびり考えてられるのはお前だけさ、だってお前はまだ独りで生きてるもんな、お前独りの息をどうにでも出来るって訳だ、その為の卵二つでもありそうに。そうしてそんなお前が、

俺の脱いだ皮の潰れた目に成り変わって、逆さにこの世を眺めてるなら、当たり前に海と山も風さえも軽軽とさも果てし無げに暗そうに遠い光りを探してどれもさも柔らかな形に引っ繰り返ってて、その却って果てし無げな明るさに微かに照らされてそうな風の行き止まる逆さの谷の隠の隠で、何が行われてるかにも目を凝らせてそうで。ならに直ぐに分かるだろうよ、そこで女が産まれたなんて、初めから、女のまだ穢れてない血を見ないんじゃ己が誰か確かめられない奴らかに企まれた嘘だってな。いや女が産まれたでも間違ってはないんだけど、間違ってない儘に嘘なだけさ、だって女なんてのが丸きり嘘だもんな、卵が姿を変えただけの肉の塊みたいでしかなくて、アハハ。いや、お前だけはさぞかし嘘から外れた女だろうさ、殺されたがってるんだから間違ってもそれは嘘じゃない。当たり前だけど他にも女は居て、探せば探すだけ奥深いと知れる森から蔓みたいに幾らだって引っ張り出せそうに。でもどれも、そう遣って引っ張って来れるからには、選ばれたかに隠の隠へと産み直されてその儘そこで育てられて海からの風の言いなりに殺されるって決められてるだけのむっつりした女ばかりで、それを逆さの海の底の蛇の目から隠す為に、嘘の女が、隠の隠でその隠に逆さの狭い穴をさも限り限り拡げるかにして、産まれるばかりの頭をつるりと卵みたいに覗かせる、でも嘘さ。でも隠の隠の穴までは嘘じゃない、ならそうと決まってるかに、そこへ、まだ胎の匂いをぷんぷんさせた女か

どうかなんてどうだって構わない、でもまあ雄の印の見付からなくて女なんだろうけど、そんな幼子共が騙されたかに喚きもせず次次に裸で投げ込まれるに違いなく、息の根を止める間もなく磨り潰されて、だって欲しいのはその幼い息の根だからね、そうしてその穴だけが、その柔らかな息の根の震えで形を整えられる、穴の内側へ切れ込む襞を細かく並べて、女の形をして息をしてられる。女の形で息をしてるなら、それって、どうにも生きてる女だろ、嘘でもなく間違いでもなく。俺が殺したいのはそんな女なんだよ、お前みたいに行き当たりばったりで肉を喰らうのと面の皮の厚いのだけが取り柄の、男に殺されたがってるだけの野山育ちの女なんて、もううんざりで。どうだ、これもお前には嘘か、ってのも、うんざりで。でもどうやらそのうんざりも、これっきりかもな、だって俺はこうして俺の殺したい女を見付けちまったからには。お前が俺を殺しに来て呉れたお蔭か、それともお前なんて居なくて、お前らしいようなものを、海へ行く前かに予め拵えて置いた前か、でもそんなのもう、どうだって構わなくて、いや違う、俺には海へ行く前なんて無いんだ、海から戻るのだけが俺に違いない、だって俺の脚は必ず山坂を登る形をしてて、海を振り返るんだって、腰を捻るまでで、脚はずっと山を向いてるんでなくちゃ、頭から足下の闇へ丸きり消えるしかないだろうさ。とすると、俺は、お前をうっかり侮ってたかも知れないな。殺されたがってる見掛けに惑わされてただけで、お

前が俺の殺したい女でないって確かめようもないなら。いや、俺はお前のずんぐりでかい卵の目を通してしか、俺の殺したい女を知れないなら、俺はその卵に閉じ込められてるみたいに、まさかその卵のようにしか、ものを見られないって事か。そんなのまるで違うかも知れないが、取り敢えずはそうしかなさそうなら、俺は二つの卵のお前を殺せるか考えるだけじゃなく試すべきで、だろ、違うのか、でもこれがもし違ってたら全て違ってる事にだって為り兼ねないよな。でも女を殺そうとして俺に他に何が出来るんだろ。の、俺って誰だっけ？脱いだ皮の破れた尻の穴を塞ぐ男でも女でもあるずんぐり尖った上も下も見分けられない一つの体がしなしなと波打つ儘なら、その内の片割れが、女を殺したがってる男の俺に違いなかろうけど、そんな男の俺なんて、顔を女の肉に埋めて女の匂いの膚を吸える限り吸って女と体一つに成っちまってるんじゃ、どうにもならないか。それとも俺に片割れの男の俺が分かるなら、もう片割れの女をそれは殺せる女じゃないって分かりながらも、さもうっかりと殺しに掛かる振りをしてあわよくば女を慌てさせてその肉をまた違った向きへ捩らせるなんてのも有りそうだが、どうか。そう遣って女だって、おどおどとでも男の膚を吸いたかろうからな。これだって、もし違ってたら全て違ってる事に為るんじゃないか。それとも、こんなあれこれを俺に考えさせるのは、襞を並べて息をしてる間違いなく生きてる女から目を離せないからか、でそんな目なら、間

違いなく腐ってても節穴でも俺の目で。違いない。違ってたって違いない。だって、その女だけは、己にそっくりな、つまりは己の産んだに違いない女共を幼い儘に次次に食い殺してしか生きられなくて、つまり、その女だけは、殺されたいなんて夢にも思わず、ただ生きようとしか出来ないんだから。違うのか。いや、違うのか、なんて誰にも尋ねようもないなら、そう問うのが間違いかも、の間違いも間違いで。なら違うも違わないもない儘に、俺は、その女を見据えてられる限り、男の俺で、でもそれも、もう片割れの女なのかも知れなくっても少しも構わない、だって違うも違わないもない儘って、もう分かってるからな。ふん、何を分かってるって？違うも違わないもない儘なら、何も分かりようもないじゃないか。アハハ、それって、やっと俺は女を見付けたって事なんじゃないか出会い頭みたいに。そんなもの、いや、そんなものでもないものが、俺には女に見えるだけで、他に見えるものもないなら、それが女でしかなくて、ならそれだけが女で。ってまたあれこれ考えてるだけなら、女に女を食い殺させて生かしてるのは、こんな俺の考えかも知れないな、きっと嘘塗れの、嘘塗れでしか何も考えられない。そうさ、見付けたぞ、女なんて、どうだって構わない、海でも谷の隈の隈でも蛇の胎の中からでもない何処かから紛れ込んだだけの、何かを映すのでも何かの影でもない、まるで要らないロクでもないもので、じゃ何が要るかって、それは、嘘塗れにしか俺は俺で居られなくて、な

ら殺すんだって嘘が嘘を殺すしかない、そんな事が当たり前に何時も起こってる、そんな処をずっと眺めてられる、望んでたかに刳り貫かれた儘に、水だけは水自ら身の毛も弥立つかに嫌う水辺にでも放って置かれてる俺の二つの目玉しかない。一つじゃ嘘を嘘とも知れない、二つより多いんじゃどれが嘘を嘘とも見極められない、二つの目で互いが互いを嘘ときっちり見て取って、その二つの間に映る全てをその嘘に嘘と塗れさせて。そうして嘘だけが産まれて止まらないなら、目が卵に似て仕舞うのもまるで分かり易いじゃないか。で、そんな目が、水の水を嫌う心など知らず、水の匂いを擽ったいかにそこらを転がってるなら、俺なんて要らなくて、誰かがその目を拾って、如何にもそれがそこから刳り貫かれたかの穴へその目を嵌め込めば、って、きっと、それを嵌めるのは、その目を刳り貫かれたって思い違いでもしてる誰かだろうけど、そいつがその目で眺められるのが、谷の隈の隈の穴の奥しかなさそうなら、そこは、女の欠片もない、ただ刳り貫かれたみたいに虚ろで、でもまた、殺したい女をじっと待ってるみたいな抜けの良い色でも滲み出しそうな、そんな内側を息付かせようと、殺すのと殺されるのを、それが嘘でも一つの姿で有るかに絶えず入れ替えて、どっちがどっちでも同じならどっち付かずで、そのどっち付かずが、殺し殺されたい女を共に予め殺して仕舞ってるみたいで、それを見兼ねるかに、どうにも殺したくて殺されたくて堪らない、きっと女を蔑むばかりな薄

汚い奴らを、そこへしずしずとぞろぞろと、その薄汚さに嫌でも見合う輪を描いて傾くばかりなふわりと軽い足取りで引き寄せて。で、奴らがそこで薄汚い手を隠したり見詰めたりしながら、黙り込む間抜け面を崩さずに、女の殺されるを易易と思い浮かべられる限りさも当たり前に、時など忘れて互いに殺して殺されてれば、その下に望んで埋められたかに、硬そうな肩を窄め、ずんぐりした脚を拡げて押さえる長い腕を胸の前で緊く組んで仰向けの逆さになって、己の一つ限りの穴の内からその外を、その内と比べて凄い速さの時に追われるかに移り変わって行く様を、揺るぎなく静かに真上へ見上げてるのが間違いなく女で、だって、それが女でないんなら、誰が誰を殺すも殺されるも無くなって、何も無くなって仕舞うに違いなくて、なら、ただ要るのは女だけだって事になりそうで。そう考えられるのが、他に幾らでも居たとしても、俺にはきっと俺だけなら、俺だけが浮き浮きと女を殺しに行ける訳だな、男に殺されるのを嫌がって、でも嫌がる他に何も出来なくて、己に体の有るのも忘れて喚くのも顔を顰めるのさえ出来ない女共を。そうして俺がそんな男に成れば、俺を殺しに来る女を次次に呼べて、それを面白いように次次に殺せるんだけど、そんなの、面白いようなだけでちっとも面白くないのも初めから分かり切ってれば、俺は笑う口を捻切られたかに黙り込んで、進んであの薄汚い奴らにふわふわと柔らかい身の熟しで混じり込みたくなって、何が薄汚いかを、黙り込まされる

程にそれを笑えない痛みにまた黙らされるように分かって、その分かった事を、どうにかしようとまた、殺される女共を騙してでもそこへ呼び込むしかなくて。ああ、なら、そんな俺の事を、専ら俺を殺したいお前だけは分かってるに違いない。そう言ってみたくなるしかないさ、捻切られたかの口ではな。だから俺に殺される為なら、何の嘘も軽軽踏み越え、どんな離れた処からでも、ひたすら血腥さを求める姿をこれ見よがしに晒して、俺を殺すしか出来ない身のお前が、海も山も捨ててでも、って言うか、捨てるしかなく、ずっとそこに居るか、そこから逃げてもまたそこへ行き着くしかない俺には、どうしても無くてはならないって訳だ。いいか、それでだ、事はそれからなんだよ、なら、まだ何も起こってないも同じさ、殺すだの殺されるだのなんて、幾らそんなの繰り返したって、殺された女共が一絡げに逆さに土の下に隠されて隠された儘ならそんな女なんて居もしなかったってされると同じで、何でも無いって事さ、でだ、そんなお前が要るって分かれば、そう分かる俺さえ居れば、お前なんてもう要らなくて、要らないお前なら直ぐに殺しちまわない事には、俺は、殺すと殺されるしかないこの世を己の穴の内から外へ見上げてる逆さの仰向けの女へは、声も掛けられなくて。だって口を捻切られようと、俺の声の落ちて行く先なんて、その女の穴しか無いんじゃ、その障りになるものはどうにか除けて、そうするしかないだろ。で、そんなお前なんて、女だってお前を殺したくて堪らな

いんだから、幾らでも一溜まりもなしに殺せるんだけど、幾らでも殺せるって、幾らお前の屍を焦げた炭にして粉粉に砕いてさえ、却って少しも殺せてないって事で、そう遣って、殺されても殺されても死ねないお前が、そんな自らにうんざりも出来ないで、ただ死ねない姿をそこに晒して他に何を望むでもないなら、つまり俺を殺すなんてさっぱり忘れちまってるなら、お前が女だって事が、俺には死ぬ程か死ねない程にうんざりでどうにも許せないんだけど、でもどうにもならないなら、その俺の頭の中のどうにもならない処を己で打ち潰すか切り捨てるかで、そう出来る石か刃が要るんで、その為には、その石か刃が潰したか切り取ったまだジトジトしてる生肉を持って来て、それを汚いものみたいに踏み潰して、俺がどうしても俺の頭の中のそこを取り除きたいんだって、己の穴の内から外へ見上げてる逆さの女へ分からせなくちゃいけないんだよ。だって、手のない俺に何も出来ないのは分かり切ってるし、抑も石も刃も女の逆さの穴からしか取り出せる処もなく、全くその女頼みって訳で。でも、なので俺はやっと、その逆さの女を見失わずに居られて、女だって俺がそんなでなくちゃいけない筈で。にしても、それで逆さの女に何が出来るでもないってのも分かり切ってるなら、俺は、踏み潰してる肉を、石か刃で俺の頭の切り取られた処なんだって、お前が女なのに死ぬ程に輪を掛けて死ねない程うんざりしたよりもっと死ぬも死ねないも無い程、間違いのない確かな事と思い込むしかな

いんだけど、俺が俺だけで死ねないなら、俺にそう確かに思い込ませる、お前でも逆さの女でもない、また他の奴を何処かから連れて来なくちゃならないのかも知れないかな。でも、そんなの、そう思い至りさえすれば思いの外訳なさそうで、だって、そいつしか俺を殺せないに決まってるじゃないか、なら連れて来るも何も、ずっと俺の前に居ないみたいに居座ってたか消えてたみたいに踊り狂ってたかして、俺の来るのを待ってたようなもんで。で、そいつが俺に、俺が何を踏み潰してるか、嘘なんて何処にも無いみたいにはっきり分からせるって成り行きなんだろうけど、で、そいつのお蔭で、俺が俺の頭の切り取られた処を踏み潰してるって成れば、死ねないお前なんて女独りで死ねないで悶えるのと諦めるのを繰り返しでもしてれば、俺にはもう係わりなくて、それできっと逆さの女も、重しが取れたみたいに、己の穴の内から外へ産声みたいな鬨の声でも上げ損なうのを楽しむかに易易と出られて。でもその身はどんな形（なり）をしてるだろう。それとも形になるより先に、俺そっちのけで俺の前のそっちのそいつと誑し誑されてくっついて、女なんて捨てて、そいつとぴたり一つに身を溶かし重ねて、石か刃の振りかで、穴に籠もらされてた恨みでも晴らすかに、俺の頭を打ち潰すか切り取ろうとしてるとか。でも俺には俺の頭なんてもう済んでて、どう打ち潰されようと切り取られようと、好きに殺せるぐったりした獣と同じで。それより、そうなって俺には次に、喉の渇くのが喉の渇

く事のように、何が間違いなく確かなのか、だよな、どうしても。アハハ、そんなのそれこそ、確かに俺の前にずっと居座ってる、そうとしか言いようもないならそれだけのもので。踊り狂ってもいるってんなら、つまり、そんなものを何が確かも無いって訳で。で、俺は間違いなく、切り取られた俺の頭のどうにもならない処を、すっかり潰れて血の跡みたいになってても、まだ、それがずっと厚い肉みたいにぐりぐりと踏み潰してて、ただそうしてるしかなくて。って事のようで、まるで違うんで、ただそうしてるしかない儘で居るのだけは、俺の頭の真面な処まで捩切られそうで出来なくて、必ずそれとは他の何かをしてるしかないよな。だって、逆さの女ももう影も無く取り込んで澄ましてるそいつじゃ、ただ息を一吐きして俺を全く殺すしかなくって、それでも俺が生きてるってんなら、俺はきっと遣れるなら何だって遣ってるんだね、凄いな俺、とか。でも何を？なんて考える事も要らずに。なら、それももう成り行き任せで済んでて、俺は今にも、逆さの女の残して行った穴の周りに集って覗き込んでるそこへ降りて行こうか思い悩んで汁を出してまで身を擦り合わせるのを已めないどうにも薄汚い奴らへ、またうっかり混じり込みたくなって仕舞いそうで、でもひょっとしてその薄汚さって俺程の奴なんてまるで居なさそうなら、混じったって混じりようもなく奴らを奴らよりずっと薄汚い脚で蹴散らすだけで。で、却って俺独りが、股でも割かれるみたいな勢いで、女の穴だった処へ

突っ込めば、そこからは片脚に違いない、折れ掛けてふらふらする木の枝のように軽い身は、髮を無くしてつるつるの内側を滑って回ってそうで、そうして穴の内から見上げられる逆さに拡がる外は、その円く回って止まらない色と形から、俺を薄汚いとも知らずに穴に姿を隠した俺を殺したくて殺したくてウズウズしてるのが丸分かりで、その独楽の真ん中みたいな処が、俺を一息に刺し貫こうと狙い定めるかに、こっちの穴を揺れて鏡に映し損なってるような穴を開けたり塞いだりしてて、それは、嘲笑ってはいるんだけど、俺をじゃなく、その穴に成り損なってそうな自らをみたいで、ああ俺なんかよりずっとそいつは、自らを打ち潰す石が要るんだな、きっと刃じゃ歯が立たなさそうで、他のどんな硬い石さえ打ち砕く、どんな刃より尖った飛びっ切りの石が、って、そんなの見当たらないなら俺がその石に成ってやるぜ、なんて軽口をうっかり叩きそうになるのは、穴を飛び出た俺がそいつを打ち潰そうが、そいつが穴の中の俺を刺し貫こうが、それでどうなるかがどっちも変わらないに違いないからで、だって、それじゃ何処からも女が出て来ないからね。って誰が言ってるの？そう言ってる俺が女か、だって穴から逆さに外を覗けるなんて、どう逆立ちしようもなく女だよ。それとも、なら、その女は俺じゃないかもな。俺はもう、打ち潰せるものはそうして、刺し貫かれるならそうされて、女なんかがどう逆立ちしたって生きられない長い時を、穴の内側に髮のまた並んで起き立つのを

凍えたみたいに待ち焦がれてて、でも何処で。穴の内でも外でもないに違いないなら、穴なんて上の穴も下の穴も消えてて、逆さな儘死んだか生きてるか知れないけど穴の消えたのを良い事に己よりでかい卵を二つ程呑んで動けなくなつて脹れたかにはち切れんばかりな女の体に狭く歪まされた隈へ押し遣られて俺は、その丸く艶艶した膚にそれだけ金切り声みたいに目立って赤黒く捩れた女の穴の破れ目の奥のスカスカなのに向けて、それを殺して八つ裂きにして食い散らかしたいかの響きを連ねる高い笑い声を口の中に籠もらせて溜めてぬるりと固めてはペッペッ、って投げ掛けて、それでやっと俺の居処も分かるんだろうけど、でもそれ、遣ろうとしても、脹れた女の体までで、それに歪まされた隠なんて疾っくに女の体に磨り潰されてるに決まってて、ならそこから先は逃げ道なら幾らも有りそうな闇さえも磨り潰されてそうで、ならその女がやっぱり俺か、って、どの口で呟けるかな、女は穴一つ開いてるだけで、それが口を利きそうにもないなら。なんて、誰に考えられる筈もないんなら、その筈もないと分かる辺りに誰か居そうだけど、その辺りって、どう見直しても、奥のスカスカの女の捩れた穴の辺りでしょ。で、アハハハハ、って笑うのは、ハイ待ってましたって声色の女なんで、そいつの身がその笑い声を白っぽく弾ませてそれをガツガツ喰うみたいにせっせと脹れれば、また一から俺の居処を探す羽目になりそうだけど、そんなの探せる筈もないって分かる辺りに誰も居そう

にないなら、もうどうだっていいや、ここまでさ、の、ここまでの辺りが、一つ切りの女の捩れた穴で。これ見よがしに穴とはっきり分かるように塞がって、何時でも拡がりそうな明るい色を秘めて隠すかに捩れ捩れに上と下へ延びて、その奥を覗けずに蹲く片脚の身が、俺の居処でしかなさそうかな。ふん、まるで違うよな、って、こっちから笑い返そうにも、笑うのもその笑い声を喰うのも女って、そこでは決まってるみたいで、蹲いた儘の片脚だけ残して、笑えない俺は腐って土に浸みて消えたかで。で笑える訳か、アハハ。でもそれで全く良いのだよ、ああ片脚の形って、惚れ惚れする程どんな事だって遣らかしそうで、それって当たり前だけど俺が思うんじゃなく、ならそれってまたそいつしかなく、あれ？打ち潰されたんじゃなかったの、って誰も突っ込めないなら、そいつは易易と、そいつが鋭い刃の形の石かどうか知らないけど、きっとそんなで、穴なんて知らんよって笑いながら、女を楽しげに薄く薄く絵に同じに画いた女を散らかすように削いで行けそうかな、でも何の為。決まってるさ、片脚の片脚なのを際立たせる為だろ。それで直ぐに女の穴に蹲いた痕だけは深手の刀傷みたいにくっきり残して片脚は、目が付いてるかに真上を向いて立ち上がって、そうさ、目ってんなら決まって真上を見詰めなくちゃな、真上に有るなら何でも射殺すかに。でも周りに直ぐ、その片脚に比べればとんでもなく薄汚い奴らがまた集って来て、どれも鳥の濡れたような姿はしてるんだけど、も

っと汚れるのが嫌か翼は拡げたくなさそうで、その替わりにか何奴もこっちの片脚の肉をもう啄み始めてて、でもそれもそれで良いのだよ、肉なんて落とす程片脚は軽軽と高くへ跳ねられるからね。でもまだ跳ねる時じゃないって、高くにそいつの声でも聞いたらしくにその空耳を歆てれば、高くになんてこそが間違ってて、ならそいつがそいつなのも間違ってるぞって、それって、こっちが間違いなのに違いない、って分かりながらに言い放てそうで。言い放てそう？そんなの放てる筈ないさ。他の何も放てない処で、肉はすっかり落として片脚は、何も放てないより他なら何でも出来そうに、片脚の姿も失せて、石の隙間からでも拾い集めた獣の脚の硬い干涸らびた筋を揃えて唾を捏ね付けて束ねて細く縒り合わせて少しだけ柔らかくしたようで、その踏んでる乾いた土を煙の出るまで擦り回せば、目を尖らせて何を真上に射殺すも、何処にでも落ちてそうな女の開いて塞がらない穴の底でちっぽけな虫けらにでもなって戯けるのと同じだったね、と分かって。薄汚い奴らは、腹に収めた片脚の肉の毒に遣られたか、羽を全て毟られような汚れなど受け付けないすべすべした体で誇らしげに翼を拡げて却って、脹れた女の体に狭く歪まされた隈へ取り集められるかに一つ残らず呑まれて消えて、ああ薄汚いのってちっとも薄汚くない事だったんだな、って今更すっきり分かるとはね。分かる？それだって、その分かったのを、そこへ放ってるだろ、なら、分かりようなんてないさ、って、言い放て

る奴。見付けたぞ、そいつがそいつを。で、そいつなら何でも放てるにしろ、そいつが何かを言い放ったとして、それを聞く耳も聞き放たれてるに違いないなら、言うのもそれを聞くのも、どれも放たれるよね、ってだけかも。そんな、何処へ行っても有り難くなさそうなそいつなら、そいつにもきっとそいつはややこしいだけで、それともややこしくなくったって、放たれるばかりから放たれようもなく、独りできりきり舞いしてそうで。でも、そうならそれで良いよ、って言い放てば放ったきり、その独りのきりきり舞いを、せっせと磨いて他に何をするでもないなら、さもむくりと狭そうに身を寄せて片脚でも引き摺り合うかにゆるゆると、初めからそいつを嫌って遠ざかるの已めない殺し殺される二つの姿を、そいつは、その少しも遠ざからないのに苛立ちながら、黙って見送り続けるしかなさそうで。と、そいつに分かれば、その二つも、そいつに見送られて二つなんだと分かる時は来るしかなく、そいつなんて嗤いながら見限られ、二つは何の障りもなく、一つが喰う卵に、もう一つが喰われる卵に成って、それなのに何時までも喰い合ってるのは、入れ替わるのでも、どっちがどっちか分からなくなるからでもなく、どちらも己を卵と知れないからで。知れてるんなら、喰った卵は、喰い果たしたぞ、ってピカピカ勝ち誇って、それっ切りだろうけど、そうなれないんじゃ、喰われる卵も、喰い果たされようもなさそうで。でも、じゃ何がその二つを卵だって知ってるんだろ、ってなら

また、嗤われてるそいつが、きっと嗤い返したりしながら、喰い合う二つが卵な筈ないだろ、卵なのは、殺し殺される二つの姿が、それをそう見せてるだけで、だって卵って、殺し殺されるばかりに挟まってる泡（あぶく）に殺し殺されるのが映って溶けて、殺しとは違うので泡に成れたそれがその外へと産まれ出るかに爆ぜるしかないなら、でも殺すも殺されもしなくて済まないなら、色の無いものなんてないなら色を着けるしかないみたいにその喰うと喰われる二つに分かれて一つに丸まりながら殺すでも殺されるでもない処へ転げて、殺し殺されるに留まらない姿を自ら追っ掛けさせられるみたいに真ん丸でない卵の形を纏わなくちゃいけないんで、でも、そう見せてるそれだけのそれなら、それはやっぱり卵でしかなくて、って、卵と卵でないを、どっちがどっちか分かる儘に分からなくなりそうに、つまりそう遣って、その姿を、殺し殺される二つに分けようかってしながらも、そのように分かち難い喰う喰われる姿へと、それらを追い遣ってて。って何が？卵じゃない。で、それを卵じゃなくすのが卵に決まってるなら、それで、いや、なら、それら、って言うのが怪しくて、二つとは限らなくて、その分かち難い二つが一つに卵なら、それで晴れて卵は、喰うも喰われるも殺すも殺されるもなく、ただ一つ、そいつ独りのきりきり舞いと、向き合うか背を向け合うか、互いに斜に構えながらにもきりきり舞いでもするかしてそうで。でもそれって、一つじゃないからでもあって。でも、あ

あ、ならもう、ひょっとして殺すも殺されるもなくなるんだね、いっそそれでそれはそんなだよ、って、そいつは言い放てるかな。まさか、な訳ないさ、だってもう、そいつだけじゃないからね。そいつにとっての、きっとそっちのそいつが、卵なんて知らんぞって声色で、鏡みたいに、言い放ち返せば、それって、言い放ちようもなく言い合ってる訳で。でまた、どっちが殺す殺されるって話しが始まるかどうかは、どうせそいつらだけの事で知らないけど、でも間違いなくその、知らないって見切るのは、それをそっちよりまたそっちの何処かへ追い遣って無くしちまおうって、って、何が？こっちが？だからそんなの知らないよ、ならまたそうして、殺されるそいつらを待ち望む少しも薄汚くないってバレてる薄汚さにでも、こっちは何の事もなく巻き込まれてそうで、って事は、殺し殺されるなんてどっちかに片寄れる筈ないんだから、殺されもする自らの身を、殺しに来る奴に晒してて。その来る奴って、そいつらだろ。そいつら？だから、殺しに来るだけじゃ二つも一つも知れやしないんだって！でももし一つだけでもそいつのそいつらだけで殺し合えるなら、きっと敵無しだな。なら、こっちも鏡みたいに、そんなそいつのそいつらの殺し合う様を映して、そうして絵に画いたみたいな殺し殺される姿を、そいつのそいつらと映し合えるかな、って言うと、そんな鏡みたいに、なんて事が、そうあっさり出来ちまうのなんて根も葉もない話しかも知れなくて、だって鏡なんて鏡と映し合

えば、切りもなくあやふやで。ならまた、独りで片脚を引き摺って遣ろうかって、片脚が引き摺られるよりあやふやでないって無いだろ、でも卵が二つかに、卵と卵じゃないが見付かるなら幾ら遠くたって直ぐにすっ飛んでって踏み潰すぞ、って脅すみたいに。で、脅されるのは何だろう誰だろう。それとも何も誰もなくて、脅しもそれ一つなら、やはり敵無しか、そんな脅し一つ切りのきりきり舞いじゃ、様にならないにも程があるなって呟くそいつは、誰かにそっくりだなって見れば、俺とお前の鏡の向こうとこっちで向き合うような、何処か同じような程まるで違う二つの、啀み合いながら縫い合わさった一つの顔をしてて。いや、そんなの、まるで違うんだけど、それはそれで違ってて良くて。だって、顔なんて、鏡のでっち上げた嘘だからね、って言ってみようか、って言えるのは、引き摺られっ放しで爪先なんて、すっかり削れた片脚の目の見詰める真上から、それを見下ろすそいつしか居ないに決まってて。で、そいつのそいつらなんて話しは、鏡の嘘に巻き添えを喰らったかで済んでて、そんなそいつなら、遣れる事なんて無さそうだけど、それで遣れない事は、幾らでも数え上げてられてて数知れない塵みたいに風に吹かれ、海の底でしか孕まれない卵を焦がれるみたいに態とらしく海を探す振りで、そんなの何時もの誰にも知れた偽りみたいに、山を向く土を舐めるように谷の隈へ隈へと消されて行くかな。ふん、そんな事だけはいじましくも遣れるそいつさ、って、見付けたぞって勢

いで、そいつに声を投げようと、そいつに見付け返されるのを待ってるなら、それってさぞかし、俺を喰ったお前だろうけど、お前ったって、俺を喰うより先に俺に殺されるのだけは間違いないお前じゃな。いやお前の足音は必ず俺の空耳に混ざり込むらしくて、で、俺を怯えさせたその足音だけだったって話しをでっち上げようってのか、アホらしい、ってそいつに言わせるしか、そいつの立つ瀬はないなら、ちゃんと立たせて遣らないと。だって、そいつの遣れない事まで谷の隈へ消されちまったんじゃ、遣れる事も無いそいつじゃ、そいつなんて呼びようもないしな。ハハまさか、まるで違う、我ながら凄い間違いだな、そいつなんて呼べるそいつなんて、そいつと呼ばれるだけの何も映さないのが取り柄の鏡みたいなもんで、もし何か映しちまったら鏡ごと嘘だってバレて叩き割られるのがオチで。つまりさっきの、卵と卵じゃないじゃないが、そいつとそいつじゃないで、二つかに一つみたいな。いやそれこそ違う、だって、その違うのにちゃんと目を懲らせよ、って、俺はそれに強いられるしかないんで。って、初めからそう強いられてると分かってて俺は俺を俺とも分かって。の俺なんて、誰だろうと知らないが、その知らない俺なら、そいつと呼ばれても、そいつの儘で居られそうで、で、そのそいつが、そいつとそいつじゃないのがまるで違うのに目を懲らせよって俺に強い奴に、そのそいつがその奴に話しが通るかどうか試すみたいに、また声を投げたいんだけど、でもそんなや

やこしい事しなくても、そいつは、奴から、然して有り難くもないかも知れないけど、声を一一投げなくて済む、卵そっくりでもきっと卵じゃない、そのさも二つかに懐に抱えられるものを与えられてて、それにずっと心を配って手入れしてれば、それへぶつぶつ呟くだけで、声は奴へ通りそうな。声の通るなら、話しが通るかなんてどうだって構わなくて、だって話しなんてどう転んだって話しでしかないもんな、で、そいつと奴は、ってのは、誰だろうと知らない俺とその俺じゃないならお前でも女でも構わない、いや違う、それがお前や女な筈のないそれとで、卵じゃなくても卵そっくりの振り位は出来て、そうしてそこから何処へも行きようも戻りようもなくそこに居られて。それを何処と探すなら、谷の隈の他にないのは、ちょっとは嬉しいにしても、探すなんて、お前か女に遣らせて済むんで、隈の隈も、要らないと言えば要らないかな。卵も卵じゃないも要らないって言えば要らないし、そう言うのも要らないに違いなくて。だって、声の通る他にこの世に何が有るだろう、誰だろうと何だろうと他に何を遣れるだろう。」「アハハ、寝惚けてんじゃないなら眠れなさ過ぎて頭が冴え切って惚けてんな。声なんて何処へだってどうにだって通ってて、なので声なんて山を越え海を渡ってても無いと同じ。要るのは確かに俺でも女でもない、でも確り握れる筈だけは無くちゃな、その筈打てる裸の逆さ吊りのそいつとな。そいつって、そう遣って吊されてやっと姿を現すんだよ、それをそい

つって呼ぶも呼ばないもなく。だってそいつはまだ死んだばかりで、ハアハア息を吐いて、打たれては尋ねられる度にそいつの耳にしか届かない己の名を死ぬ程繰り返そうから、そうしてそいつがそいつを呼んでれば、そいつは何とも呼ばれなくったってそいつで。でも答が体も鏡に映せそうな借り物で、それでもお前がそれで打てるかどうかさ。打もるなら鏡の嘘だったって、その嘘まで打ち果たせようからな。そいつが誰も何も、誰にも何にも知った事じゃなく。尤も、この声が届く筈もないなら、お前は独りで、答と逆さ吊りの体を取り揃え、その裸に剥いた屍に目を醒まさせるかに、目の前のそれと息と息を激しく交わしながら、それを打ち続けてなくちゃならなくて。なのにどうだ？お前はただ谷の隈の隈を恋しがるかにさもそいつから受け取った贈り物みたいなものを掛け替えのない卵みたいに一つか二つかって声を掛け掛け温めてるのかな。鳥か？　なら鳥らしく翼を拡げてみろよ、バラバラに砕けて飛び散る骨に驚くばかりさ。だって、打つしかないんだよ、でなきゃ時も数えられず、それで卵をどう孵せるかな、孵った卵も腐らせてるさ。いやこんなの、死んだ子の歳を数えてるみたいなもんで。何で独りで呟いてんだろ、俺が女だからか。ならいっそ俺が答になって屍になって、己で己を打つなんてどうかな。いやそんなのずっと遣ってるんだよ、なので女って訳で、で何も起きないって訳で。それを女じゃないお前にさせられないなら、女の俺も疾っくに要らないって話しかも

な。でも、ああ、ならいいさ、嘘の鏡だけは、女も女じゃないも無しに、答打たれる裸の屍を、嘘も死んだみたいにずっと映してられて、その打たれ已まない音の、凡そ打たれるようじゃない、卵なんて臭くて捨てた海がきっと屍の薫りばかり清かな山へ帰りたくて塞がる重い風を散り散りに裂くような、とろりとした響きを、蛇のように拗らせてて、蛇のように、ってのは、きっと、その蛇の身にぴったりの、土に埋もれて回る水に流れ掛けてクネクネ延びた腐り果てた逆さの木の洞を探してるに違いなくて、そこを通り抜けさえすれば、谷の底も卵の底かに潜って行き成り山の頂に、生きた儘の跳ねるような蛇の身の答に楽しく打たれる、己の裸の逆さの姿に出会えるに違いなさそうで、って何が？って、そいつは、そいつが丸きり鏡の嘘みたいに、それは少しも己に係わりなさそうでも、尋ねようか已めとこうか躊躇ってそうで、（二〇一八年七月二十五日）

（女が何かなんて…）

女が何かなんて知らないよ、ひょっとして、女が何かなんて知らないよ、なんてずっと嘯いてて女に成った振りでもしてなくちゃ何処に居ようと身が持た

ないのが女で、そんなの、そんなのでないんだってさえ、私の他に見当たらないにしても、またそんなのとはまるで違う女、ひょっとしてそいつだけは産まれる前から女みたいなのを、生きた儘一晩じっくり焦がしてすっかり炭にしたらしい。膝を折って横様に、尖らせて背を丸め、顔だけ首を捻って上向いて寝てて、ガリガリに痩せてても骨は丸丸と太くて、見掛けは女の姿焼きだろうけど、もう冷めててそれより確かめようもないなら、それが何かなんて女みたいに知らなくて良くて、欲しかったのは、ねっとり柔らかい炭なんだよね。先ずはその少し欠けてる爪先を削って水に溶いて膚をすっかり隠すまで顔と首に塗ってれば、私は、偶偶独りで居たのを見付けて掴まえたか却ってそれでこっちが掴まえられたかの女とその娘と仲良く暮らしてるばかりにずっと死んでるそんな己を哀れとも思わない男か、でないんなら、攫われた妻を探しに行かなくちゃ死んでるのに死に切れない男かで、でも男なんて、男の姿こそ知れないどころか何処にも見付かる筈なければ探されさえしなかったなら、ただ女じゃないだけを、石ころみたいに男と呼んで済ましてるに違いないかな。それとも、その女じゃないだけの事が、巡り巡ってさも計ったかのような間に合わせに女かも知れないね、そんなのは、女に嬲られるばかりの男をその捉えようのない姿の儘に能く能く己の姿と重ねようとしてるしかなくて、それでかな、なら私、男だったんだとか痛い程間違いと分かりながら弱弱しくどうしても呟いて仕舞

いたくなりそうな、女が何か分からないばかりに、なんてその分からないせいにして。きっとそうだよ。だって、それ、ずっと独りぼっちで頑なに。ま、そうなんだけと、でも独りだってのは、誰かを知ってるか知らなくても何処かに隠れてたのをちらりとも見た覚えの有るかなんで、なら、独りじゃないかも、なら、独りって何？って、見詰める足下に転がり出て来るしかないのが女の姿焼きかな、焼かれて却って白白と巫山戯てるかに黒黒と婆さんから娘に若返って科でも作ってそうな、ってしとけば、それを横目で見ながら独りで独りじゃない、つまり女じゃないかも知れない足取りで、独りじゃないせいで取り返しようもなく独り惨めに、なら女かって疑いもよぎりながら、そっちへだってとぼとぼ歩いて行けてそうで、でもこっちで消えるしかないっても分かってそうにね、どうせずっとそんな私だもの、って、詰まらないものの塊みたいにね。いや、な筈ないさ、だって男と暮らしてる女とその娘ってのに、窪んで温い後ろからどうにも足を引っ張られてそうで。だからって、哀れとも思わずずっと死んでるってんじゃ、こっちはそれを手に掛けては殺めようもないし。それとも、そんな間違いかも知れない男かも知れない私の側なんで二人も死んだ水みたいに凝っとしてられて、もし私の影もなかったら、母と娘なんて二人っ切りに閉じ籠もって、どっちかがそこを独り占めするしかなく殺し合いを始めるに決まってて。で、母親が生き残るなら、影の私は、娘の行方なんて女に睨まれ

てる限り知らん振りさせられて。娘が残るなら、影が私だったとも忘れられ影なんて置いてきぼりにされて。にしろ、それでどうなるでもなさそうなんで、顔と首にせっせと炭を塗るしかないってのかな。だってそれで、ずっと死んでる男、ってのが少なくとも見た目、何とも怪しくなるからね、それは間違いないよ。何が男か知らないけど、その男が死んでる儘で、何で顔と首に女の爪先の炭なんだよ、そりゃきっと何か有るだろ、って訳よ。ま、そんなで、その何かを追っ掛けるなら、女とその娘は、その肉付き通りの重さが掛かってるようならその脚を蹴っ飛ばすかして、どうやら纏めて後ろへ棄てられたにしても、でも二人ずっと同じ処には居座ってるんだけどね、だってその二人にだって女が何か知れない儘じゃね、で、それで直ぐに攫われた妻を探しに行けるでもないのは、何で顔と首に炭なんだよ、が、まるで片付いてないからなんだけど、ならそんならそれで、ふらっともなく、そっちへ。まさか、そんなそっちなんて、まだどっちでもないさ、だって女の姿焼きから目を切れば、白っぽく薄っすら輝いて独り拡がる泥濘に足を取られ、目はその白っぽさに泥濘と溶け合うかに白目を剥いて楽しくぬるりぬるりとまどろっこしそうに回ってるしかなくて、死んでる身なんかにすれば取り分け、ぬるりぬるりのまどろっこしさって死ぬ程病み付きになるしかないなって、さらりと思い知らされ。で、ならと、さもふらっと、どっちでもないそっちから戻るかに、風の微かな熱さに崩れ掛

けてる炭の女の小さな顔を見直せば、その崩れ掛けてる顔付きが、まだ乳臭ささえ残してそうに若かった頃に児を産んで母に成りたかったなって言いたそうかに懐かしげで、ならそれ、どうやら妻で、って言えそうで、だって妻なんて、まだ新しい内に、うっかり置き去りにしたのを攫われるんでなきゃ出し抜けに強火で一息に焼き殺すに限るからね、なあんて思いも寄らないよ私は、でも、炭の女の窄んだ儘開いてる口が噛んで含めるように間違いなくそう呟くんじゃ、優しい振りでもして聞いてあげないと、なんて、俯いてその呟きを耳で拾おうとしてると、取られた足はずるずる滑って股を拡げて踏ん張っても突っ伏して沈みそうで、それで泥の撥ねて顔の炭が少しでも剥がれようなら、ずっと独りって決まってるからには初めっから女でしかない儘の私からもう穴に落ちるみたいに逃れられなくなるみたいで怖くて、その怖いのから逃れるには、きっとこっちもそれなりに若くて力が余ってて攫われた妻を探しに行きたいんだって、妻を攫われるような間抜けじゃ他に出来る事もないしさって、それればかりを、男の望みなんてそんなもんさって、そう望むしかないんだけど、でもそう遣って妻へとばかり、何かなんて知らない女の姿を黙って押し重ねようとすれば、その通りにその女の振りで独り女になった妻から、それを取り返しに行く私なんてものはもう要らんわ、独りで遣って行けるわよ、って弾き返されるって分かり切ってるんで。ま、でもそれで良いのかも。そんな要らない私なら私は私

を好きに出来る、もう他の誰も知らない私しか知らない独りぼっちで。でもその独りが、女に成る独りとはまた違うようなら、私を独りに放って置いては呉れなくて、で、女が何かなんて考えようともしない、それは中中に頼もしくもある、ほらあなたが、泥濘で白目を剥いてれば幾らでも時を潰せるぐらぐらしてる私を間抜けそのものみたいに物足りなく見下して、どう間違ってもこれまでもこれからもずっと間違いなくそんな私とは生まれからして違う、何処か遥か余所から来た他の何かなんだって顔付き体付きで、幾ら練った炭だって乗らなさそうな滑滑と透き通った膚の白く乾いた細い裸を晒して、それでやっと私がごちゃごちゃ身に覚えのない脱ぎようもないんで目に留めようもないものを着込んでるんだって私に分からせて、そうして私の声をずっと待ってた、でも私を蔑むような儘に、みたいなら、私は、勢い込んで心ならずも、攫われた妻の行方をさも差し迫ってるたった一つの事のように尋ねて仕舞うよね、当てずっぽうな男の声色でも試しながら。で良かったのかな？何か越えてはならない処をうっかりとも態とかに越えてないかな、泥濘を見損なった処だけは見損なえずに跨ぎに掛かるかに、それともそんな振り位はしてないか、浮き浮きとも苦し紛れに、声色に引き摺られて男か女かって行き交う心の揺らぎに、さも女物ばかり重ね着する男かに惑わされて、なんて、炭を塗ってても狼狽えてる色が顔に出て、それを見逃さないかに微笑むあなたに、「そのぉ、妻ですか？柄

にもなくさも優しく引き取ったかの。そんなの触れられもしなかったでしょうに、誰にも触れられない処にこれ見よがしに隠した積もりが徒か。それとも、その積もりをだけ独りで抱いてられたとか、突き放すみたいに。それっ切りで、女が何か知らない儘に飽きて、男の影でもべろりと肉へと裏返すみたいにでっち上げたとか。抑も何処で覚えたんですか攫われた妻なんて的外れにも虚ろで艶っぽい言い草、草みたいに靡かせて。それも、児を産みたがる幼妻って、フフ。そんなものを探しに行く振りを私にして見せれば、私から、そっちがどっちか、聞き出せそうで、それで、って事？」なんて言われて仕舞うんだけど、でも、確かに若い妻なんて幾ら構ってたって遣る事は一つか二つか三つだし、そうして転がしとけばこっちは知ったこっちゃないけど、その妻の攫われた話しでしか、あなたは私に声は掛けられないよね。「ああ、風に飛ばされたかの、風なんて何処にだって吹いてるみたいに、か弱く幼い妻が攫われたなんて、何処にでも転がってる話しでね。うんざり。そんなんで、今のあなたの、白目を剥いて時を潰してる己のみっともない姿を思い浮かべて見ては如何。鏡でも差し入れたいんだけど、そんなの映そうにも鏡が張り裂けそうで。」うん、うん、その通りかも知れないな、だよきっと。その通りなら誰かの妻を攫って囲いものにしようなんてややこしい奴と係わらなくて済むし。で？「私の事、見覚え有るでしょ、あの女を殺して生き残った娘よね。それで、もう何

処へだって行けるけど何処へ行ったって母殺しの娘じゃ何処へ行きようも逃げも隠れようもない。」それ、嘘だって直ぐに分かるよ、だって、そんな娘が居たら、私なんて疾っくに棄てられて見向きもされないって。何で、そんな見え透いた嘘を吐くのかも分かるよ、そう遣って、あなたが間違いなく私ではない、私と係わりない何かだって、あなたの顔付き体付きを、私の目に焼き付けたいからでしょ。いや、でもそう遣って見直すと、確かにあなたの白く乾いた細い裸が、うっかり娘のように見えても来そうで、ややこしい。でも間違いなく私の、じゃない。「って、あなたの娘だなんて一つも言ってないしね。でも母を殺して生き残った娘が、どうしてどうなるかは、覚えが有るのでは。幾らでもあなたはそれを見て来たんで、死ぬ程に、で、そのせいで死んでもその己を哀れとも思わない程に。で、そんな私の姿なんて、死んでるって己を分かってるあなたの目にしか映らないなら、そこへじわりとも映すしかなく。これも嘘だって聞こえるのはね、あなたがあの女を、女が何か知れないせいで、その知れなさを振り払う程に、それを忘れられないからで、私が幾ら殺し直したって、あなたは、私に殺される時のあの女のあなたを見詰める哀れっぽい眼差しに囚われて、あの女をこっそり何処かへ生き返らせて仕舞うからで。でもそれを私は、殺し直したりなんてしてない。だってあの女を繰り返し殺したくてずぶりずぶりと遣ってるのはあなたでしょ、昂ぶって浮き浮きと。ならいっそ、そん

なあの女なんてのが初めからあなたの好きな嘘だったってのはどう？だってあんなの、殺す程でもなく。私とあなたとで話しを合わせば容易い事ですもの。なら私はもう、あなたに嘘呼ばわりされる若い娘の姿なんて脱ぎ捨てて、白く乾いた細い裸の儘、髪も伸ばしっ放しに真っ白な、爺さんにでも婆さんにでも、そのまた姿も霞みたいに脱ぎ捨てた、ほんのあどけない笑うも泣くもまだほんわかとしか出来ない、爪先までもやっぱり真っ白な幼児にでも、あなたのお好み通り。ならひょっとして、私はあなたがお腹を痛めて産んだのかもねウフ、あなたは忘れてるけど、だって他に居ないもん。それとも私はふわふわと二人居て、どっちともなく姉と弟とか、ふわふわと二つに分かれそうで分かれない影みたいな。そんな産んだ覚えがあなたに無いなら、影の私が姉であなたが寂しがりな弟、影のあなたが兄で私がお喋りな妹、とかね、手でも繋げばそっくり同じ濃い血が透けるように冷たい掌を通して二つの体を行き来しちゃいそうなね、で、産んだ女は、そりゃ、死ぬ死ぬってひーひーお腹を痛めたのを酷く根に持って二人の児をとことん憎んでそうな。それともやっぱり、あなたが怪しい母で、母なんて何奴も怪しげでしかないんだけど、私が何時も側の母の息を吸って息を詰まらせてるみたいにその娘とかで、殺しても殺しても、二人がその儘ならずっと殺し合ってるしかない、なんてね。そんな事してたらその内、母も娘も一つに溶けて同じ声で同じ声嫌さに互いの同じ声を引き破るしかない

かに罵り続けるしかないとか。でもまさか私が幼妻ってのは已めといてよね。尤もこんな言い草、どれを取っても少しも楽しくなくて切りのなぃお遊びかな、ふわふわした、でも細かに刺刺した曲がった草の先みたいな。ほら、風の微かな熱さが撫でて炭の女の頬を色付かせたりくすませたりを織り交ぜさせ、出て来る筈のない膚の色をあれこれ推し量ってるようにも炭の色の儘に透けて来る艶を、目で弄ぶみたぃな。」考えたね、ふぅんそうか、じゃこっちは何が嘘とも言い当てようもないかな。で、あなたがそんなだってならきっと、あなたは私の知らないあれこれを知ってそうで、そんなあなたに話し掛けられる私を、私が先を急がなくちゃいけない、ならきっとあなたも付いて来なくちゃいけない、それとも、そのずっと先をあなたはもう行ってるかも知れない、そんな処へと、そっちもこっちもなく、導いて行っても呉れてそうで。いや違うな、ここは疾っくにもう、そんな処って見回せば、恐ろしいまでにどっちがどの何だろうと必ずあなたと私とで、身と心とで、あなたも私もあなたと私が耐えられなくて見失いたくなりそうならもう見失いようもなさそうに、逃れようもなくそんな処かな。で、私の好みを通させて貰うなら、あなたは私の産んだ娘で、私は穴一つだとしてもさえ女じゃない、だって女なんて何か知らないって事は、女なんて何処に居ようと何処にも居ないんで。あなたが女に成りたいんなら、好きにして構わないんだけど。でも、私があなたを女にしようとすれば、あな

たは私の娘じゃなくなるよね。で、あなたの嫌いな、何処にでも転がってる幼妻が、あなたそっくりに辿辿しく転げ出て仕舞うとか、みっともなくも、そのみっともなさを恥じらうかなら荒荒しげに恥じらいもなく。ならあなたは攫われて、私のじゃない児を嫌嫌産んでそうで、でもそんなあなたなら間違いなく私の娘で、なら私もあなたも児は産むって事かな。そんなあなたじゃ全く私の好みは何処へやら、それとも、私の娘のあなたを産んだのが何処にも居ない女だった、ならきっとそれ女じゃ無いって話しを何処でもない何処かに、なら何処にでも有る在り来たりなそこらに拵えて、耐えられないなんてさっさと忘れた事にして、あなたと私とで態とらしい笑い声でも立ててそこへ転げ込むしかないとか、つるりと。「それで切りのないお遊びに楽しくない儘付き合ってられる積もり？にしてはまるでぎこちないわね。それとも、あなた独りのお遊びに私が付き合わされてるかしら、きっとどっちでもなさそう。そのそうでなさそうでなくちゃ困るわよ、だってあなたも私も、互いの切りのないお遊びに煩わされてる暇なんて、有っても無くて、だってあなたはもうこうして長い道程を経て私を見付けて仕舞ってるんですもの、暇が暇の儘忙しく立ち回るようで、どうにもならなくて。それは私じゃなく、炭の女の頬の色がそう言ってるのはあなたにも見えるでしょ。で、あなたはそれを、あなたと私の耐えられなさをここぞと移し替えるみたいに耐えられなくなるかで、炭の女の顔を急いで踏み付けてすっ

かりぐじゃぐじゃに潰して、で顔と首を無くした炭の女の体に、もう粉粉な筈の口を柔らかく吸うみたいに、女かに丸っこい体付きを誇り損ねて苛苛と抱き付けば、炭を塗った顔と首のあなたに酷くお似合いで。そう、その酷く、ってのが、何とも酷く、私は目を背けるしかなく、そんな私の姿をあなたはもう見失ってて、だって、うっかり剞り貫かれててもそうとも分からなそうな凡そ虚ろじゃない目と目とでしか私とあなたは互いを認めようがないんで。そうして私を見失えば、あなたは、何処も彼処も光や影さえも炭だらけって中へ投げ出され、ならもう、何を抱いてるかも分からず力も抜ければ、首のない女の姿焼きはあなたの腕を抜け、替わりにあなたに抱こうと出来るのは、炭の色をした風の微かな熱さの巻いて反り返る塊のような重みかな。でもそんなの抱ける筈ないなら、あなたは、何処かで私が誰に抱かれてるかをばかり風の透ける昼の夢を粒粒と切り刻むかに考えるしかなくて、でも思い浮かぶのが誰の何の姿もない、色ばかりは底の抜けたみたいに冷たい風の吹き荒ぶ山また山なら、あなたはあなたの行き着ける処に、如何にも山家育ちの腐った礫か土の匂って来そうな私の産んだと直ぐに分かる禿びたかに丸丸とした児を見付けて仕舞うしかなさそうでも、見付けられるのは、その児にたっぷり溜まってる風の熱さだけで、でも風の熱さって風が熱いんじゃないって直ぐにあなたに分かって、なら、風を熱くさせてるのは何？って、前のめりの己の姿を自ら見て取れるのは、炭

だらけの中からはどうやら抜け出せてるんで。そうしてまた足下で寝てる首のない炭の女を見付けても、とても抱きたいとは思えずにそれに躓かないのがやっとで、だって首のないその姿は黒焦げの儘にも、瞬き一つで、光りを影に影を光りに置き換える鏡に映したみたいに、白く乾いた細い裸のあなたの姿そっくりだったりで、粒粒にされた遅い昼の夢かとも。でも、それがあなたに私の姿を思い起こさせはしない。だって、体は白い裸でも、あなたの顔と首だけは炭を塗られた儘なのを、何の鏡に映さなくてもその炭の匂いで分かって、ならそれで、光りを影に影を光りに置き換える鏡のこっちと向こうみたいに、失われた炭の女の首が、炭の儘にもその色だけ抜けて真っ白に、あなたを誘いに来るのを待ち焦がれて仕舞うようではね。で、来ましょうかね誘いは、来ないなら来ないで、あなたは、堅いものが噛めなくて何時も腹を空かしてる私の吐く血の色が乳みたいに白いのを見たぞって事にして、微かに熱い風の巻く塊の中になら、その同じ血の混じってる筈と、私の産んだ児の腹をさもこっそりとも明白に傷付けて、その滲ませたのを集めて固めた白い血で女の白い首を象ろうなんて腹積もりは見え透いてて、熱いのが嫌そうに風を冷やしてその児はもう、それをあなたが掴んでも、掌の中へ誰かの吐き掛けた口の中で練りに練られた扱い難い唾の脹れた塊のようで。それでまた、これなら確かに見たり事が有るぞって、そんな事が有った事にして、あなたは勢い込んで、それを拳

の中に力尽くで握り潰して振り返るんだけど、振り返っても返っても、まだ振り返り足らずに遂には片脚でくるくる回るしかなく、危うげに蹴り出されても弱弱しく風を切り損なうような儘のもう片脚は、ふわふわしてても何処へも逃げない風の熱さに擦り切れて、そうして、その無くされた脚の付け根のすっぱり切られたかに丸い傷口は、縁から内へ脹らみ掛けては塞がりそうで塞がらないで却って深く窪んで穴になって沈みそうにどろどろしてて、それでやっと振り返るのを已めて倒れまいと腕を拡げ、そうしてふらふらしながらも釣り合いを取ってれば何とかなりそうかな、なんて、女の白い首の事なんて忘れたよって浮き浮きしてると、その無くした脚の傷口の穴から、それは血でも唾でもない、でもあなたの体で作られた灰を溶かしたかのどろどろした塊が嘘っぽくもざらざらと痛そうに続け様に落ちて、そこに留まる儘ではそれが盛られて脚を掬われて危うそうで、追い立てられるかにあなたは行く先も決めず片脚を引き摺って、ずっと動き続けるしかなくなってて。片脚をどうやって引き摺るかって？そうね、私の産んだ児ですもの、そこまで見越してあなたに杖を渡してたとか。それとも杖みたいに使われてるのは、体を硬くして伸び上がってる私の産んだ児の杖を真似ようと細い体で、あなたの腋を支えてるかな。風を冷やせるなんてほんの一時で、嫌でも直ぐまたそれは熱くされて、巻いて塊に成ってあなたに構って貫いたそうで。どっちにしろあなたは、溶けた灰のどろどろの

塊を足下に次次クネクネ繋げて落として進んでて、何処までも当て処なく行き果てるようでも、首のない女の姿焼きの寝っ転がってる処までは戻れそう、かな、なんて心の弛みが死んでてさえも命取り、かどうかはやっぱり、私の産んだ児の心懸けに依るに違いなく、で、その児があなたに、女の白い首を思い出して欲しいか忘れた儘で居て欲しいかなんだけど、その児にはきっとそれは、女でも白くでも首でもなくて、なら、ひょっとしてうっかりとも私の姿かしら。なら思い出すも何も、忘れてないわよね、あなた。あなたそっくりの、白く乾いた細い裸の私ですよ。その膚を、醒めたくても醒めるって何だったか思い出せずに醒めた儘の終わらない夢に引き回されるみたいに凝ってとあなたは見詰めるばかりで、その白いだけに目が飽きれば、目は白の中を打たれるように走る揺らめいて波立ちそうにも薄っすらとした、でも撥ねるみたいにしなやかに硬そうな網の目を見出すしかなく、その網の奥に何が囚われているのかを、目ではどうにも捉えられずに、ならと、走る網の影を追うような手探りを素速く繰り出しても行きたいんでしょうけど、そんな事したって私の膚を見失うばかりとも薄薄は分かるに連れて腕は重く疲れ、引き摺る片脚だけでは覚束なくなって、細い体の私の産んだ児に網を掛けるみたいに糸を引く速い唾を向きを変えてずらしては次次飛ばし、そうしてその児を白っぽく搦めて仕舞えば、直ぐにその丸丸と姿を変えた小さくも土みたいに重そうな体を突き放して、何事も無かっ

たかに穏やかに語り掛けられそうで。で、何か、その児に尋ねたいんですよね、何でしたっけ？そりゃ決まってますよ、何処へ行けばあなたそっくりに白い私に会えるか、それともまるで違ってましょうか、白いのは私だけで、あなたの身はもっとずっとくすんでて、それを私に知られたくなくて、私を闇みたいに避けてたいんでしょうか。も何も、まるで違ってようが同じなんですよ。だって私の姿を見失ったからには、あなたはもう、私の姿を見失いようがありませんものね、何の形にどう刻まれるどれ程薄い影にもぴたり浸り込む闇みたいに。それをそうとも限らないぞなんてうっかり疑ったら、あなたの頭の中は、あなたに見失えるものと見失えないものとが行ったり来たりに入れ替わったりして、で、私を幾ら避けようとくすんだ身を見失われた私の姿から躱そうにも、その見失われた儘の私の姿に取り縋るしか千千に乱れる頭も抱えては居られなくなって仕舞ってるとか。それともそれもまるで違ってようが何を尋ねようと一つ限りの答えを教えられてるようなもので、搦めた筈のその児に、その児を搦めようとしたばかりにあなたは搦められてるみたいで、でもそんなの、みたいなだけで、あなたは初めから変わらずに何でも思いの儘で、きっと、白の中をかっちり走る網の目の奥に、その児と絡み合うあなたの、白く乾いた細い裸の私を見失うばかりの時に穢されてくすんだ身を、光も影も無く白ばか

りを白くしか映さない鏡を投げ込んだかに見付けて仕舞うしかなくて、でもそうなるともう、その児の姿はあやふやで、あなたとその児とでどちらがどちらを取り逃がしたか、それとも互いを、互いがそうするだろうに魁けて態と取り逃がしたかして、ああ、ならもうあなたは私の姿も、見失われた時の儘に見付けて仕舞ってるんですよ。でも、そうと、私より先にあなたは分かって仕舞うのでかえってあなたは、見出して仕舞う私の姿をあやふやにしようと、またそれに、手元に網なんて無いって分かってながら、あっちへこっちへ網を打つ真似を繰り返しては、私とあなたの間に網の目を見出そうなんて腹積もりなんですかね、小賢しいとも己を嘲笑いたそうに唇を歪めながらに。でも網の目を通して見えるものなんてどんな違った色形をしてたってどれも同じって、そう腹に落ちて仕舞えば、抑もあやふやなんてのがあやふやで、って事は、あやふやばかりが、網を通して拡がる奥に隅から隅まできっちりと、さも何のあやふやさも残さないかに敷き詰められてでも居そうで、でもそれって、全くどんなあやふやにも為す術無しに違いないなって思い直せば、網の目なんて有っても無くても同じかな、でもそんな、有っても無くても同じに、必ずそれはそこにあなたの行く手を遮るんでなくちゃ私を見失いも見出せも出来ないなって、心付いて、それであなたは、自ら打った網に掛かる振りでもして、そんなあなたへ振り返る私の姿を、網の目を通して見える何もかもと一つに重ねたいかのような目付

きを、これ見よがしに網の目に晒してて。そうしてさえ居れば、どれでも構わないならそれに限る網の目の一つを、獣の目玉をそいつが生きてるか死んでるか確かめたくて剥き出すように押し開いて、それでぬるりと網を擦り抜けられるかに。ええ、そうしてあなたはそうしたんですよ。でもそう分かるのは、私の身がその網に掛かってるって見付けられたみたいだからで、でもみたいなだけで、囚われてる私の何の姿も取り逃がしてて、でもそれって、あなたがあなた自らをずっと取り逃がしてる儘で居るしかないのから逃れられないのを、嫌でも、私の、姿のない姿としてて目の当たりにするしかないみたいで。いや、それこそたった一つ、みたいでじゃなく、どうにも私の姿でも有るあなたの姿でも有りそうで、その有りそうを確かな手応えで手繰り寄せれば、私とあなたをそう結び付けたい、もう一人の、あなたへしか語り掛けない、やっぱり何かなんて知れない儘の女の影の温もりでも側に持って来られたに違いなくて。でも、もう一人って、誰のもう一人なんでしょうね。ま、取り敢えず、私かあなたのどっちかなんでしょうけど、まるで違う、私達の知らない誰かのもう一人だったりして。アハハ、でもそんな事言い出してたら切りが有りませんかね。でも諦めずに言い続けてるなら、必ず切りって有るんですよ、そう思われませんか。切りが無い、ってのが、抑も、まるで切りですもんね。その、どうにも切りでしか無いんで、そこに、誰かのもう一人を、例え影だけでも、あなたは

側に置きたくなって仕舞って、でもわたしにはそんなの要りませんけどね。だって影の形なんて知りませんもの、何もかも白くて、うっかりその白に影を見付けられるなら、白が丸丸影に成りそうで。それとも影ばかりなんで何もが白いのかなって、そう考えても何も起こりそうにないなら、どうでも良くて、そのどうでも良さの中にだけ、私は、まるで白くないあなたの姿を見分けられそうで。でも、そうで、なだけで、まるでそうじゃないかも知れない、なので、あなたも姿も真っ白に、真っ白な中に、見付けられてそうで。それとも、それって、あなたの目に映ってる私でしょうかね、なんて尋ねても、あなたは私がそうして鎌掛けてるんじゃないかって疑うばかりで、誰のだろうと構わないもう一人があなたへだけ語り掛ける処へ一先ずは力なく助けても求めるみたいに落ちてでも行きたくて。そんなの私に止めようもないなら、そうしたいように成るしかありませんよ、あなた独りのその独りで。そのもう一人なんて、あなたを独りから救いようもなくね、そんなその面持ちはあなたにも見て取れるでしょ。で却ってあなたは、独りでなくなったみたいに思い込めば幾らでも思い込めて、で石の中に溶けて固められたみたいに、あなた好みの刺棘しい夢に硬く閉じ籠もってその固めた身の中にぽつんと泡のように柔らかく夢を閉じ込めたかして、でも夢なんてどれも間違いなく草の下の土に露かに浸みて、あなたを裏切るに決まってるなら、あなたの裸の身は、どうにも石の中にしなやかに

溶けて固められて動きの取れないに違いなく、ごちゃごちゃ着込んでた身に覚えのない衣が、その石の周りに切れ切れになって、でもきっとどれも繋がって、それらが風の熱さに触れて転げて一塊に纏められるなら、それをそっと網のように拡げて、網のように拡がるなら全くそれ網なんですけど、それをあなたに見せる為にあなたに近付いたのが、そのもう一人なんだって、あなたは石の中の身に浸みて分かって、そうしてそのもう一人が、児を産むのを初めから背を丸めて石そっくりにずっと冷たい微笑みを絶やさず自ら拒んで来た、草に埋もれてそれを易易と楽しんでる女なんだとも分かれば、何が女かなんて、そんなの分かるとか分からないとかじゃなくすっかり分かる儘に分かりようもないかに、遠過ぎる風の回って穴を欲しがる、穴のような形のその風の影に呑まれ掛ける風の何処へとも消えたかに分かるしかなく、ああ、なら、そのもう一人の女に付いて行けるなら、それともその女があなたに付いて来て呉れるなら、何の疑いもなく己も女なんだって、穴を欲しがる回る風の遠過ぎたってだけ覚えてられるなら、もう何が女か考えるのも忘れられて、冷たい微笑みだって自ずと真似られて。だって、女の他に何が有るんでしょうね。って、言って仕舞えば、そりゃ広い世の中色色有りますよ、って事に成るしかないんですけど、そりゃ有るんで、なので女の他に何が有るんでしょう、とも開き直るみたいに言えて、そう言わせるものを、そのもう一人の女とあなたは、手を携えて探し

に行こうとも出来るんでしょうか、石の中に閉じ込められた儘にも。それともそうして出会えそうもなかったのに出会えた女二人が心を合わせれば、石なんて見損なった夢みたいに風にじわりと溶けては端からポロポロと冷めて砕け、それに釣られるかにもう一人の女も風に流され、でも流されたのはきっとその姿だけで、あなた独りの側に、もう間違いなくあなたのもう一人に成って心だけは寄り添ってましょうかね、それをあなたに嘘って疑われるのなんてへっちゃらに。だってあなたは、身を震わせて石を振り払えば、その砕けた石をすっかり何処かへ捨てて撥ねるみたいにまた直ぐに戻って来た風の、その熱さに巻き上げられた網に掛かって転がされ、もう身動き取れないじゃありませんか、石に閉ざされるより酷く。でもそうして網の目を通して見えるのは何処も彼処も砕けた石ばかりで、然も石は石が石を産むみたいにじりじり増えてて草木の芽も囓って吐き捨てるみたいに悉く潰してるんじゃ、石一色の眺めにあなたの目は痛め付けられるばかりで、その目を二つとも刳り貫いて網の目から外へ押し出せば、その目はきっとものをくっきり見て取れる石に成るだろうに、って思ってもどうにも出来ず、網の中で石に成った積もりで固まってるのがやっとで。でもそれで良いのですよ、あなたの身はもう石一色に溶けてるじゃありませんか、なら網に掛かるも網から逃れるもなく、薄っすら炭の色を滲ませる膚の、私の産んだ児があなたを見付け、その児に腕を取られて起き上がるあなた

は裸でも首より下にはびっしり網目が描き込まれてる筈で、いや顔と首にだって当たる光りの向きで、塗りたくった炭の色より黒くほんの瞬く間には偶にキラキラと、塗られた炭の上に網目は浮き出したりしてね。で、私の児の柔らかな手が、その顔と首の網の目を一つ一つ見分けながらそろりそろり撫でると、その一つ一つが初めどろりと脹れて直ぐに硬くなって、ぐりぐりと石に成って次次に少しでも遠くに落ちて行くみたいで。でもそんなの石なのかな、落ちた切り石一色の中へ紛れて手に取りようもないんだし、って、あなたが思えば、ここぞと、痛くて耐えられない片目を知らず慣れた手付きで端から圧してするりと剞り貫いて、それを手で転がして確かにその石に違いないざらざらともつるつるした手応えを掴んで、その手応えの逃れ落ちそうな儘にそれを足下に置けば、それはずっとそこにあなたの置いた石の儘、あなたのもう痛くはないもう片目で見分けられ、その見分ける目で、あなたに脱ぎ捨てられたみたいな冷たい網の中を透かし見ると、そこにぐったりと重い網に掛かって身を硬く丸めてる死んだ振りでもしてそうな、でもまた何処かへ攫われるみたいにうっかり遠い儘の風にさえさらりと紛れそうに軽そうな、ならもう疾っくに風の痕しか残ってなくてその痕でしかない姿でもありそうな私を、さあどう遣ってその網を除けて救い出そうか、あなたは思い悩むばかりで。側で、風の熱さを限り限りまで蓄えて膚の灰の色の奥を灰に成り損なったような色で探る、その内を向

けた私の産んだ児の目は、明明と燃えるみたいで、燃えるみたいなら燃えてて、でも燃えてるならその目の見上げる私の姿のせいでじわじわ腐るみたいにくすんで行くらしく、ああその目って、あなたそっくりだってどうしてもあなたが思えて仕舞うなら、あなたの片目は、重い網の歪んで、その歪みの縁から私の微かな寝息の洩れて来てるに違いない潰れて小さな裸の穴を見付け、あなたの顔と首の網の目を、その穴を搦め捕ろうとするかに、溶かして落として行くようにゆっくり拡げ、でもそんな事してたって何もどうにもならないって焦って己の身を顧みれば、裸にびっくり描かれてた網の目はすっかり消えてて、もうどんな網にも掛かるもんかって力の湧いて網なんて初めから何処にも無さそうで、白くも黒くも灰色でもなさそうな片脚の足の裏を歪めてその指で、見付けた小さな穴を掴み取ろうと。でも裸の穴を掴み取るって何。そんな事出来るなら、その足の指って、穴を丸裸の儘隙なく取り囲んで、どれもその穴よりもっと奥深い穴でなくちゃいけないみたいなら、指の形を先から突くように剥ぐように裏返して奥へ奥へ何処までも拡がって行く、でも伸ばしたり縮んだりも出来る五つの穴に、私の寝息の洩れてるに違いない穴は、すっかり歪められもう裸かどうかも知れず拉げて、でもそうなる程にその穴も奥へ拡げる形を深く隠してるに違いないぞってあなたには思えて、穴の奥を探ろうと強張るその身は捻曲がるだけでは収まらず、足の指に続いて踵から脚から腰へ更に胸へと裏返

る身の形を、その穴の前にきっと裸で晒して。でもそんな形なんて風に巻かれて風を巻き返すような見失われるしかない形で、そうなると、晒されるのは、その歪んで拉げた穴一つで、でも何に晒されるんでしょうね、きっともうその裸から身を剥がされたようでは。その穴を見付けたあなたの片目も疾っくにあなたの裏返った形の身の奥に攫われてては、足下に置かれて石に成ったもう一つの目に晒されるしか有りませんよ、違いますかね。でも、その目は己を目と見付けられるでしょうか。一つの目しか無いって、その目の先に拡がる眺めだけが有って、その眺めが見返そうにも、目を見付けられそうになく、なら、目なんて無いんですよ、初めからか初めより幾らか後からか、それは眺めが初めからかどうかに拠るんでしょうけど、無かったんですよ、きっと。その眺めも、己が、目の先に拡がるものだとも分からずに。で、眺められる眺めって、何でしたっけ？もう目も無くて眺められるだけの眺めって。目も無いのに、あなたはそれを見付けて、眺め直さなくちゃいけないんですよ、そんな眺めなんてまるで知らなかった目で。何処からそんな目を持って来られるかって？やっぱり足下の石に、目の無い眺めを見付けて貰うしかなさそうにしろ、その石が目に成れる当てはなく、なら石でも目でも構わなくて、だってあなたの裏返った身は眺めの何処かには必ず紛れて、石とも目とも係われそうにないなら、眺められてる眺めが、そんな何かに眺められてるんだって見返られるなら、そう

してそんな眺めの事を目も石も無しにあなたに分かるなら、あなたは、そんな己を一つの目なんだって思い当たって、それで静かに何の障りもないに違いなく。ずっと死んでる儘のあなたには、そんな目のあなたが相応しいでしょうよ、憶えてました？死んでるの。それとも死んでるって言い張ってるだけで死んでなくて、それとも死んでると分かってさえも死んでるってのが何か分からずに、それで却ってあなたは、何かを殺し続けて、あなたの周りに見ず知らずの屍でも並べてなくちゃ居られないとか、死んでるってそんな事でしかないんだって粋がって。いやまさか、屍なんてあなたに知れる筈も触れられる筈もないんですよ、ずっと死んでるだけって、寧ろそんな事でしょ。屍とすら係われず、なので泥濘で白目を剥いてるしかなくて。言っときますけどね、そんなあなたの前の眺めの何処にも、あなたは、私の姿を見付けられはしませんからね。然もそんな私を探し続けるあなたでしか居られなくて。ただ、私の産んだ児はどうにもなりません、だって産んだのは私でも、私の児かどうか知れませんしね。もうあなたに懐いてるんでしょうか、なら益益私の児か怪しくて、児かどうかも怪しいかも、なら何なんでしょう、なんて、誰に尋ねようもないも何も、尋ねたくもなく。それって間違いなく、あなたのせいでしょ？ま、あなたのせいって言えば、何もかもあなたのせいにして仕舞えますけどね、だってほら、何だってあなたから始まってるんなら、間違ってませんものね。なので私は、私

の産んだのが児かどうかも怪しいよなんて、あなたに全て放り投げたくもなるんですけど、尤も何が児じゃないなんて言ってみたって、ここでは産まれるものしか産まれようもなければ、児でないものなんてないかも知れませんよね、あなたと私の他は。産まれるってそんな事だし、そうして産まれたものばかりに取り囲まれてるあなたなので、あなたはそれらをそんなように眺めてられるんですよ。でもそんな児らを見詰めるあなたの一つ目が、その児らに見付かれば、目は寄って集って児らに珍しいものみたいに尖った指で弄られ、その内に、目も眺めも嘘だったって、嘘でも認めるしかなくなって、ええ嘘は嘘に決まってますよ、だって目は知りませんけど、眺めが嘘なんて有り得ませんよね。眺めが眺めを眺めてるんでなかったら、嘘の影も形もないでしょ。で、産まれるものとして産まれるしかなかった児らは、ただそれだけの、他のものでは有りたくなくて、傷付き合うのを恐れて反り返った角みたいに互いにそっぽを向いて、でもあなたの目を突き刺すように掴んでるんで、あなたの目は八つ裂きにされそうに歪んで、きっと血だって流れてるでしょうけど、血ならその色色にもりもりと流れるのでそれなりに眺めを見取れそうなら、それも許されず血なんて無い事にされて、乾いて歪むばかりの一つ目は、まるで石だ、丸っこいなんて裸みたいでまるで恥だ、とか、また粋がって己を蔑みながら、私の寝息の洩れてる拉げた穴の真っ直ぐ奥まで貫くように見据えるしかなくなって、

きっと児らは大喜びで、益益掴んだ目を突いたり引っ張ったりで、更に歪む程
に却って冴えるあなたの目は、穴の光りの届く限り限りまでを見定めたその更
に奥に私の体のじんわりと淡い温もりを、さも奥のそちらからの広い光りかに
静かに受け取りたいかで、児らの力尽くに望みを繋いではみても、でも力は少
しずつ眠そうに斑にぼやけ。それを酷くまどろっこしいって思うのは私も同じ
で、児らを諭そうともするんだけど、その一人一人に、その一人ずつの耳にし
か届かない声をずらしずらし、その、ずらすのって酷く辛いんですよ、喉は一
つ切りなすもんね、その喉と舌と唇をひん曲げてあれこれ声に成らない掠れた
音を糸でも吐くみたいに作れたにしても、それらをまた色色に並べ直し重ねら
れるなら重ねもし、その組み合わせの狭間に声の響きを含ませて、それぞれの
耳向けのこちらの言いようを編み出して行くしかないらしく、疲れて、その憎
たらしい耳を、次次引き千切って遣りたくなるにしても、その耳に漸く届く私
の声の調べも、それぞれ違った形に斑にぼやけて、どれも眠そうで、で、どう
すれば良いんだろう、って、当てに出来そうなのがあなたしか居ないって心付
けば、一人一人にしか通じないそんな様様な声を私に強いてるのがあなたなん
だって、手に取るように分かって、その手を光りの届かない穴の奥から伸ばし
て、あなたの歪んだ目を、児らの尖って曲がった手を全て払い除け、私独りで
確り掴みたいんだけど、先回りされるみたいにあなたの手が、それともそんな

の手な筈もないかに、私の手を優しく撫で摩って、でもそれで私にはあなたの指も掌も粘っこく酷く汚れてるのが知れて、でもその汚れを穴の奥まで引っ張り込んででしかバラバラの声の調べは一つにならないとも分かれば、その汚れに指を絡ませて行くしかなく。でもその、あなたによって届けられるに違いない光りに晒される私の指って、何て細くて長いんでしょ、こんなの指じゃないわ、って呟く声は、それは切りもない程に細く長そうなら、間違いなく死んで、そうだ、死んだ声なんだ、児らを束ねられるのは、って、あなたに教えられてるようで。ならいいわ、後はあなたに全て任せて仕舞って、幾らでも産める児なんて、血の止まらないみたいに幾らでも堕ろして流して。ってなのが、大凡あなたの目論んでる事なんじゃないの？なんて尋ねちゃ元も子も無しかしら。ああなたが私に惹かれるのは、寝息目当て、それも誰が私に寝息を吹き込むかを知りたくて。その息を通すだけの穴の開いたクネクネした袋とでも私の肉の姿を見て取れたなら、あなたは自らを、そんな私を包むように寝かせる揺り籠とも見做して知らぬ間にそっと、私の息の根を止めに掛かるかしらね、自らの娘をこそ濃い血のように優しく、そっと殺したい、そっとひっそりとその行く末を甘く塞ぎたい、そんな望みに逆らえないかに。そしたら私に息を吹き込んでたのが誰かも、私の骸と引き換えに自ずと知れそうで。知れるだけで姿が無くったって、そいつしか居ませんよ、産まれるものを産ませるのはね。でも

そうして知れたそいつなんて誰だろうと贋物に決まってて、でもきっとそいつは己が贋物なんだと考えるのも許されてなさそうで、却って思い切り、だってそいつきっと何でも思い切りなんですよ、自ら姿を現すしかなく、その浮き浮きと動き回って已まない、常に熱く荒い息は渦を巻いて捩れた風を切れ切れに起こし、それらの風がそいつの周りで互いに擦れ合えばまた、激しく動き回るのを已められなくなる、そうですよ、何でしたっけそれ、見覚え有りますよね、お互い。あなたと私と揃ってだけ見て取れて、あなた独りは、飛んでもその後も追える。だって私はもう疾っくに、そいつの荒い息の渦が作る風に囚われ、どう遣ってその荒い息を鎮めようか考えるのがやっとで。と、そうと分かればもう、私もあなたも誰の事を考えるまでもなくなって、産まれるものは止め処なく産まれっ放しで、私もあなたもどうにも出来ず、なら産まれるのって、幾ら産まれ続けようと、同じ姿の一つ切りで、でも白いか黒いかで大違いなら、争うように膚は白くなったり黒くなったり、その度に、声も白と黒に張り上げられて全く通じずに喚き合うばかり。そんな児なんですよ、あなたに懐いて、そいつの荒い息が私に産ませた児だって顔して、そりゃ間違いないでしょうよ、だって熱いのって色の着いてる訳でもなく誰の彼のもなく、どうにもそれ一つ切りですもんね、で、一つの口から互いを拒む白黒二つの声に苛まれ、どっちの声も掠れる程益益どうにも白と黒で、身を白黒二つに裂いて済むんなら、私

とあなたとでその片腕ずつ取って引っ張りましょうか。まさか、黙ってそんな事させるような玉じゃ有りませんし、それに片腕だって白くなったり黒くなったりですしね、と言って、放っとけば一つの儘、あなたを懐かしがって真似るかに泥濘を落ち着きなく動き回って数え切れず幾つにも分かれ、白と黒とで研ぎ澄まし窮めた刃のような声は振り翳され、互いの肉を切り骨を断ち、益益それぞれに違いを際立たせる声ばかりの眺めは、何の色も届かなければ、何処までも低くへ大きくうねるような波立つ暗い海で。でも相変わらず泥濘に足を取られて動けないあなたは、その海すら、分厚い闇の押し被さるのを見上げるようにしてしか、一つの目では有り得なくて。それを哀れだなんて思わない、だって私はもう、あなたに殺された骸ですもんね。それも、間違いなくあなたの娘の私で、然もそれ、あなたが産んだんじゃなくあなたが殺したんであなたの娘の私で、そんな私が何時何の児を産んだかって、今更誰にもどうとも構う事じゃなく。それともあなたには、分厚い闇の海のような声ばかりの白と黒との殺し合う眺めが、どうにも無くてはならないのかしら。いや、そんなあなたで有って欲しいって、私が望んでるのかも。そんなあなたに声を掛けられるあなたの娘の骸の私なので、その私は、私の産んだ児のこれから先を、あなたに委ねようとも出来て。で、私はあなたに何をどうして欲しいかって？でも私はあなたに声を掛けるまでで後はあなたの為たい儘、でもあなたのする事ったら、

ほったらかしにする事だけですもんね。私の殺されたのも、あなたに放って置かれたからでしょ。ふん、私が口から出任せ言ってるって顔ね。そりゃ娘にこんな言い方されたら顔に塗った炭も剥げるかしらね。そりゃ何もかも出任せよね、だって娘なんて殺されるに決まってて、なら他の事なんて、どうだろうと構わないし構いようもなくて。なんて、私があなたを突き放せば、またあなたは、あのもう一人の産まない女でも、あなたの影から石を引き千切るかに取り出し、私達を励ましたりさせるかしら。ん、私達って誰と誰？あなたに殺された位じゃ死なない私は外せないわね、それと、私を殺したところで死んでる儘のあなたもね。でもそれ、私達かしら。そんな、私達なんて呼び合えそうにない取って付けたような怪しい私達が、白と黒の切りのない殺し合いからどう遣ったら逃げられるかって話し、かな。灰色なんて無し、炭を塗って済むなら済んでるし。いや、まるで違うわね。白と黒とが、産まれるのを已めない児達を殺し続けるのを已めないんで、それであなたも私も、あなたはあなた、私は私で居られるんで。なら女なんて端から要らなかったのも、要らないなんて言うのも要らない程に分かり切った事で、私の体が、穴の開いてるだけの袋だったにしても、それは私があなたに放って置かれて殺される為で、ってのは、熱い風に攫われるに持って来いの体付きって事でもありそうで、つまりは、ま、あなたは、その女じゃない穴をひたすら覗いて虚しいばかりの他には遺れる事も

なさそうなら、そんな穴を、勢い任せにあの石の女の穴と二つ、並べて晒したいんでしょ、でも何処へ、何に？児を産まない穴も、もう児を産んで仕舞った穴も、そんなの穴じゃなく凹んでるだけで、ずっと児を産み続けてる処だけが穴なんですよ、でもそんなのきっと指差せる処には見付からないか、見付かり過ぎて何処も彼処もそんな穴か。ふんっ、まるで違うわね、ふんっ、てあなたに先に言われてそうね、ならやっぱり、ただ穴でも開いてるみたいにその奥を拡げて覗けそうなら、それを穴って思い込んで、その思い込みに取り込んだ、凹みなんてないツルツルの穴っぽい形が、己をこれが穴だよって言い寄って来るのをしぶとく望んでは、これの他に穴なんてないさ、だったらこの眺めのど真ん中にぽつんと放るように据えて、そうすりゃ眺めの震えが何にも妨げられず真っ直ぐそれに伝ってブルブルと、その震えに、穴穴穴って笑いが止まらないみたいに言い募らせて、でもそれは直ぐに穴なんて嘘ほい穴なんて嘘穴なんて嘘ほーいって、眺めの奥へ向かって響くに違いなく、その奥にさえ何の穴も開いてないって分かって笑いが止まらないなら、その止め処なく消えて行く笑い声だけがきっと、穴を見付けたりも出来るかなって、嘯いて。それ誰が？あなたでも私でも石の女な筈も無い、ならまさか、あの児かしら、白と黒を血を吸い続ける尖った刃みたいな身に窮め、暗い海にのんびり白くも黒くも灰色でもない脹れた腹を上に向け、魚にでも成ろうかなって顔でのんびり浮かんでる。

尖った刃みたいで脹れた腹をしてられるのは、全く白と黒を窮めたからだぞって言いたそうに。で、それに私かあなたが何か言い足そうとしても、身を水に裏返して、耳の生えてないのを見せ付けそうで。でも、それ誰が？って、誰に誰が尋ねてるのかしらね、私が私にかしら。そんなの、私の知った事じゃなく、なら誰にも知った事じゃなく、ただ笑い声だけが、いやただ笑い声だけならそれを笑い声とも分かりようもなく、なら何の穴も開いてない眺めの奥なんて何の奥行きもない穴の眺めかも知れず、ならなんて事言い出してたら何でも有りなら何でも有りで、でも私とあなたは何でも有りなんかじゃないならあの児独りが何でも有りとか、でもそれとも初めに何でも有りが有って、それがあの児の姿に成ってたりとか。そう、あなたもそう考えるなら間違いなくそうよね、けどあなたは考えるのなんて已めてて、だって己を死んでるって分かるなら何の考えも偶偶目に留まった網目をだらだら転がして時でも飾るだけみたいに死んでるんだし、なら私独りで、そうよ、なんて言ってても何も言えてなくてね。そんな私達じゃ、あの児に置いてきぼりを食らってるどころか、白と黒の果てしない殺し合いの海の中に、疾っくに白と黒の児らは数え切れず溢れ返って、それでも混じり合わず、白は白、黒は黒の、その身の鋭い切れ味を、数に任せるかに益益研ぎ澄ませ、その白黒の身と身の斬り合いに、通じない声なんて掻き消され、海まで届く私達の声なんて、穴が穴をこっそり擦る奥まった音をクネクネ紡い

で縺れさせてるかで、私達の手には負える筈もなく。でもそれ、あなたからは、白と黒の児らに広い網を掛けてるって見えるかしら、どう？私には分からない。あの児らを狭い網目一つにその身一つずつを搦めて縊ろうかって、一人残らず殺したいのはあなたなんですもの、微かでも私達の声しか届かないならそれで殺すしかないでしょ？斬り合いなんて斬り合う程、白黒混み合ってぎしぎし数が増えて行くばかり、数が数の手にも負えない数に成るばかりなら、やっぱりあなたの手に順って殺めて行くしかなく。ああ、でもそれも、私には分からないかな、でも何故分からないかは分かったかも。この私の声なんて何時からか届いてないからよ、あなたにも児らにもまるで。届いてた時も少しも通じてなかったかも、アハハ。いや違う、死んだ声なんて何処にも届く筈なくて、それで却って私は、あなたにも児らにも心の儘に語り掛けられ、その声の結び目を繋ぎ繋ぎ交わり拡げて、あなたを真似て網の目でも編み出そうと。でも幾ら遣っても穴だらけの出来損ないで、それともそんな端からズタズタに破れて用いようもない網目なので私は私を守れてるようなら已めるのも怖くて。でも良い、怖いって、独りっ切りの姿に、己の身をぴったり重ねられてそうで、それって、泥の上に独り生えて一粒の泡の形はしていても、歪に咲く花の浅い裂け目のような奥には、網の目が丸まって波立って重なって、そうして有りもしない奥へ誘うようなら、誘われる儘拡げられる奥を二つに分ける白の、黒い狭間こそ、

何の歪さも拒む端はつるりと丸い尖りたそうな尻を擡げてる姿で。ああまた、白と黒、それともこの白を分けて黒の狭間こそ、白と黒の始まりかしら。そんな白と黒の辛いのって、他の何かと言い換えられないからなのね。例えば、女と穴とか、石と花とか。違う、女と穴なんて言い換えられてないし、石を言い換えるなら目よね、花なんて何処から出て来たんでしょ行き成り、行き成り過ぎて、何もがずっと花の中を転げてたみたいに。それとも目と花が一つに通ってる事かしら。至る処あなたの目の石は、どうやら私にはどれも逆さにでも咲く花で、摘んでも摘む程ぎっしりと殖え、枯れれば枯れるに任せるかに眺めの奥深くへ咲き雪崩れて行く。私がそんな奥へ摘み進むのは、その花花を丸ごと食べる為、その味ったら血より濃くて苦い、肉よりとろりと辛い、きっとあなたには思いも寄らず。だってあなたには網の目より繰り出せるものって無くて、その捕らえたものどれにも、ってどれも何時まで経っても白と黒で争ってる私の児らばかりなんだけども間もなく死ぬんだなってそれら自らに冷たく呟かせようと、網目の奥に拡がる眺めを、白を分ける黒、それって、黒を分かる白とも見分けられないに違いない、そんな、穴が穴を引っ繰り返してまた穴を繰り出すみたいな、で、どの穴も血を吸い肉を喰らう彫りの深い鳥みたいな顔付きをブルブル踊らせて、それっ切り何も起きない時が、粒粒に途切れて脅すように波立って転げて行くばかりにして、それをあなたはなおざりに笑って

眺めてるにしても、他にあなたに笑える何も無ければ、そんなの笑ってもなくて、その笑っててもない笑い声が嘲るかにあの児達に届けば、嫌でもそれを聞き取る耳が生え、その生えたばかりの初初しさに抗えないなら、その声の向かうそっちへ誘われるばかりで。でも耳はそれ一つ切りなら身も一つ切り、やっぱり幾ら数を増やしたって産める児なんて一人限りに決まってる、それっ切り何も起きない時に縛られ。なら、その縛めは解かなくちゃいけない、一人限りの頭の中なんて、時に縛られて次次遣って来る命を殺めたいばかりなら。でも時からは逃れようもないなら、己の身を切り刻むでもするしかないかなって、白を失っても黒と、黒を失っても白が、離れた儘互いを矯めて研いで刃ばかり犇めいてるような石ばかりの眺めへ転げ込んで。そうしてその児の首が飛び腕も脚も捥がれ腹は開かれ、その身の硬く干涸らびて、それは風の熱さも寄せ付けないのを、私とあなたとで見届けて、その私達が石ばかりの眺めの中に居なられるのなら、白と黒の果てしない殺し合いの海なんて忘れ、二人切りの、命こんて何処にも影もない青い海でも、石ばかりの乾いた眺めのその見えない向こうになら呼べて、その遠い波音が微かに届くだけなら私達はずっとそうして守られてるようで、引き裂かれた儘、その遠い海からでも見えようかに高く掲げられた、児の血塗れの頭と腕と脚と開いた腹をつい忘れ、私達二人切りの時が暗がりの儘なら、どう遣って光りを採ろうかって、鋭い鳥の声に切り開かれる、

眠れた穴みたいなくすんだ空でもぼんやり眺め。でもそんなの、石ばかりの眺めが許さない。だって石ばかりで、何で空が見えるかって。となれば、石から怪しくて。そう、で、花なんですよ、きっと、何もかも見通そうかってあなたの目へも通って。石が石に見えるには、確かに花って欠かせませんものね。石は石だけで石でも、あなたの目には石は、花有っての石でなくちゃ石とも見分けられず、だって、石有っての花ですもんね、あなたか私が、さも儚げかに見付けなくちゃいけないものって。で、そんな花が、さあ何の働きをするかって、さあ限り限りあなたを追い詰めるんですよ、白黒白黒って限り限りと。あなたが白目を剥くのはそれが耐えられないからかしら。それともそんなの幾らでも耐えられるのが、どうにもほんの分からない位微かに恥ずかしくて、微か過ぎて戯けたくなるような。戯けてるだけでも済まなくて、白目の端を鳥の運んで来た一筋の光りが掠めたんだって事にして、そのそっちを差して辿る光りは、白い影と入れ替わっては自らを黒く塗るのも浮き浮きと楽しげに繰り返し、それと連んで踊り這い回りたそうに、この世にただ一つ限り食べられるものって穴一つ限りの、この世の眺めの奥に咲く花ですよねって、涎ズルズル、それで命を繋ぐんですよねって、訳も分からず嘘とだけは嘘でも分かって仕舞うかに笑いを堪え堪え歌いながら、その濁った色の嫌われて誰も寄り付かない、それとも血と肉のぬるぬる混じってるのかな、そんな泥濘を滑滑した平たい石みたい

にぴょんぴょん撥ねる花売りでも真似てるらしい児の幻の、くすんで汚れる程に輝く身の熟しは、直ぐにもまた、身を切り刻まれたそうに。それも振り払って光りの辿る道は、私達が忘れたって無くなりようのない、忘れられてるのは疾っくに私達な、光りも影も届かず波立つ白黒の海から産まれて已まないあの児達の、光りも尽きた明るみだけの空からの鳥に命を啄まれて冷たく小さな、寝かされた儘、生きてないのを確かめるみたいにゆっくり押し遣られる姿の向かう、(二〇一八年十一月二十三日)

断片　二〇一八

著者　u_

© 2018 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published